コナミゲームブックシリーズ

コナミ ワイワイワールド



GAME BOOK

コナミワイワイワールド

コナミ スペシャル

KONAMI

コナミスペシャル

STORY

ゴエモン、マイキー、コング、月風魔、シモン、モアイ。コナミのヒーローたちが、悪の帝王ワルダーの手によって連れさられてしまったぞ!! ヒーローのいなくなった地球は、ワルダーに征服されてしまう……。

しかし、シナモン博士によって、ずっこけヒーロー"コナミマン"と、女性型スーパーアンドロイド"コナミレディ"が派遣された。2人はそれぞれ、ヒーローたちを助け出し、8人そろって総攻撃開始だ! コナミマンとコナミレディの2つのストーリーが楽しめる、初のデュアルファミコンゲームブック!

カバーイラスト/こなみ　みなこ
カバーデザイン/長野幸三

KONAMI GAME BOOK SERIES

コナミ

ワイワイワールド

コナミスペシャル



塩田信之/STUDIO HARD

コナミスペシャル

KONAMI : WAIWAI WORLD
by STUDIO HARD Co., Ltd. and
Nobuyuki Shiota

Illustrations by Minako Konami
Character and Basic Licenser

First Published by KONAMI Co., Ltd.
3-25 Kanda Jinbocho, Chiyodaku, Tokyo, Japan

コナミ

ワイワイワールド

CONTENTS

プロローグ

宿敵ドラキュラとの長きにわたる死闘を終えたばかりの彼は、疲れきっていた。彼が救ったこの地、トランシルヴァニアは平穏な日々を取り返した……はずだった。

しかし、ドラキュラとは比べものにならない巨大な脅威が全世界を包み込もうとしていた。そして、その魔の手が世界を救うことができるヒーローたちに伸びていることを、ドラキュラを倒した彼にも伸びていることを、彼は知らなかった。

「誰だ！」

シモンは背後に異様な気配を感じ、振り返った。

ドラキュラを倒した、愛用のムチを求めて腰に伸ばした手は空しく空を切っていた。宿敵を倒し、平和を取り戻した安心感から油断していたのだ。

しかし、彼は安堵（あんど）の息をついた。振り返った背後には何者の姿もなかったのだ。

「気のせいか……」彼の視線は部屋の中を用心深くさ迷った。気配を感じたのは確かだ。用心に越したことはない。

ムチの置いてある場所を確認する。暖炉の上だ。距離は5歩分。ジャンプすれば大丈夫だ。ロザリオは——しまった、礼拝室に置いたままか。もしドラキュラを完全に倒してなかったとして、奴が復讐にやってきたのなら苦しい戦いになる。

プロローグ

彼は警戒しつつ、暖炉にじりじりと近づいてゆく。
ガシャン！
キッチンだ。食器の割れる音にシモンは鋭く視線を感じた。自分の姿が目に入る。
「ミャア」ドアの向こうに見えるキッチンにいたのは、食器を落としてすまなそうな表情を向けている小さな黒猫だった。窓が開いている。そこから入ったのだろう。キッチンとの境のドアの横には大きな鏡がある。それに彼自身の姿が映っていた。
「はあ、しょうがないな」
シモンは気配の解答を得て安心し、片手に持ったままのティーカップのことを思い出した。そう、たった今キッチンで紅茶を入れたところだったのだ。紅茶からはまだ細く湯気が上がっている。ちょっと冷めてしまったかもしれないが、飲めないことはあるまい。
彼はテーブルにティーカップを置くと、のら猫の追い出しと、割れた食器の片付けにかかるため身体をキッチンに向けた。
フーッ！　シモンが向かってくるのを見て、黒猫が毛を逆立てて威嚇してきた。
「何もしないからおとなしくしなよ……」
シモンは猫の警戒を解くため優しくそういうと、かがんで視線を低くした。
しかし、彼はそのときある重大なことを思い出した。キッチンの窓を開けた覚えはなかった。鍵もかかっていたはずだ。猫に開けられるはずはない。



プロローグ

「フギャーッ！」猫が鋭く鳴いた。
とっさに鏡が目に入った。彼の背後を映した鏡に、黒い霧のようなものが空中に凝縮してゆく様子が映っている。鏡に映るということは、ドラキュラの仲間ではない。シモンはとっさにそう判断すると、機敏な動作で暖炉にダッシュした。
グオッ。実体のない霧のような物体は咆哮（ほうこう）に似た声を上げると、はじけるように拡散した。ものすごいスピードでシモンの身体を包み込む。
「ぐっ、身動きが取れない……」シモンの唇から苦し気な声が漏れた。霧に取り巻かれたシモンはダッシュの姿勢のまま静止していた。顔が苦痛に歪んでいる。
「ドラキュラを倒した男、シモンよ……」突然、不快な声が部屋にこだました。
「私は宇宙の支配者、ワルダー。地球を領土に加えるためにやってきた。お前を含め、私にたてつく可能性のあるものは皆私の手に落ちた。月風魔、マイキー、ゴエモン、コング、モアイ……皆私の手中にある。後はコナミマンさえ手中に納めれば、私の地球支配は揺ぎのないものになるであろう。わっはっはっはっはっ……」
身動きが取れず、しゃべることもままならないシモンは、歯噛みしつつ全世界に振りかかる脅威を知った。
ドラキュラなど比べものにならない、巨大な脅威を……。
トランシルヴァニアに脅えた猫の鳴き声がこだました。

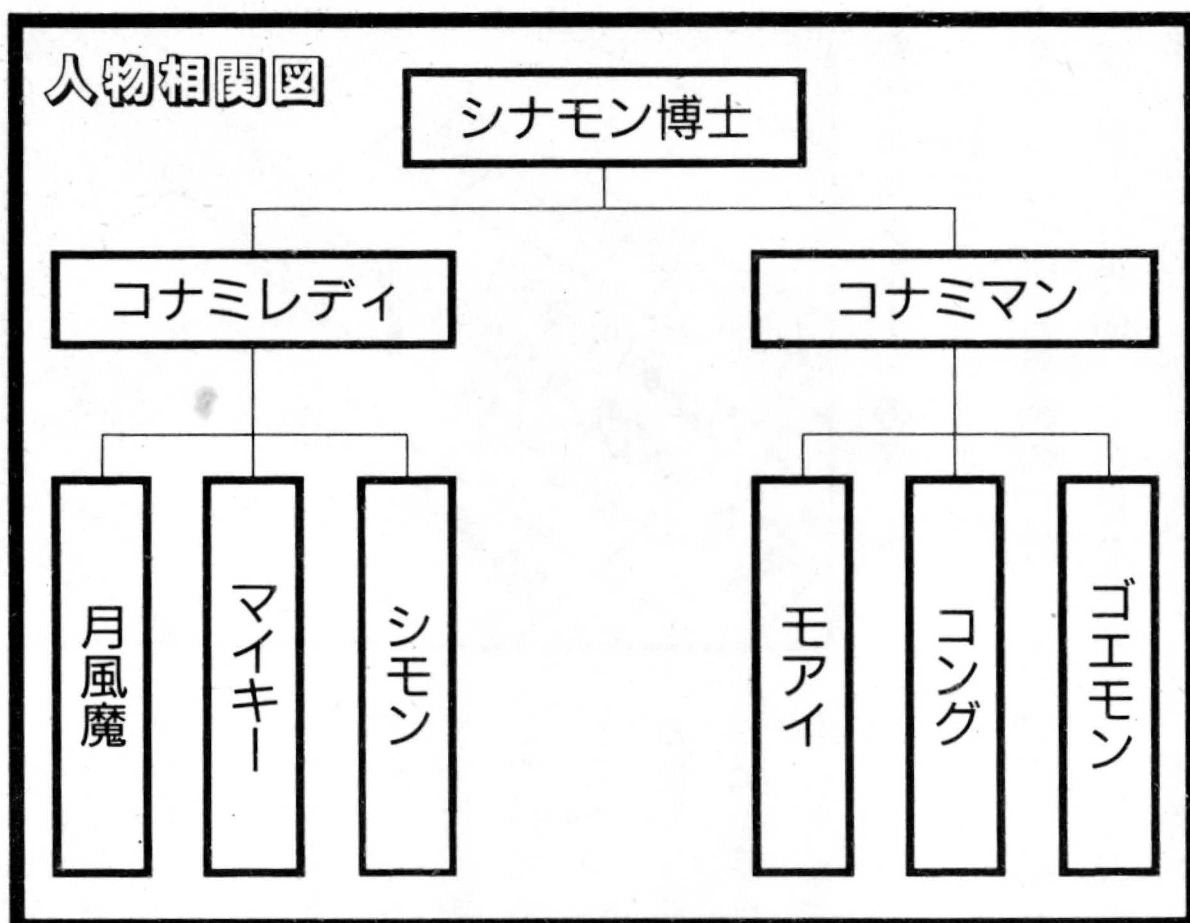
ゲームの遊び方

この物語にはふたりの主人公がいます。ひとりは陽気なヒーロー、コナミマン。もうひとりは、コナミマン顔負けのパワーを持つヒロイン、アンドロイドのコナミレディです。
あなたは、このふたりのどちらかひとりを選んでゲームを始めることになります。
コナミマンを選んだ場合は、ゴエモン、コング、モアイの3人を探し出し、コナミレディを選んだ場合は、月風魔、シモン、マイキーの3人を探し出すことになります。これら、敵に囚われたキャラクターを助け出すと、それ以後、一緒に行動することになります。きっとあなたを助けてくれるでしょう。
また、あなたは、自分のキャラと他の仲間のアイテム（武器）も、手に入れてあげなければなりません。街で買ったり探し出してください。

●**選択肢について**

項目の終りに、選択肢のついているものがあります。この選択肢には、大きく分けて、次の3つの種類があります。
・あなたの判断で決めていいもの。（右へ行く➡○番へ。左へ行く➡○番へ。など）
・あなた（あるいは、あなたの仲間）の体力ポイントや、アイテムの有無によって行き先が決められてしまうもの。（体力ポイントが○以上➡番へ。レーザーガンを持っている者➡

ゲームの遊び方



○番へ。など）

・あなたが選んだキャラクターが、コナミマンか、コナミレディかによって行き先を決められてしまうもの。

●ポイントについて

　このゲームに登場するキャラクターには、体力ポイントしかありません。最初は20ポイントから始まり、0になったらその時点でゲームオーバーです。また、あなたが助け出し、一緒に行動しているキャラクターの体力ポイントが0になっても同じです。

　ただし、このポイントは、敵から仲間を助け出し、シナモン博士の所に行けば、30ポイントまで回復させることができます。

●アイテムについて

　各キャラクターごとに持てるアイテムが決っています。コナミマン➡レーザーガン、

コナミレディ→ヒートガン、シモン→十字架、マイキー→パチンコ、月風魔→手裏剣、ゴエモン→まねきねこ、コング→バナナ、モアイ→イオンリング。これらのアイテムは、店で買ったり、探し出すことで手に入れることができます。（ただし、モアイのイオンリングだけは、最初から使用できる）。また、これらは弾丸の数が、そのまま使用回数となります。例えば、コナミマンチームが3人で30個の弾丸を持っていれば、ひとりで30個使っても、3人で30個使ってもいいのです。その他この弾丸は店でお金として使用できます。シナモン博士の所に、助けた仲間を連れて行けばもらうことができる他、街に行くと、もらえます。

●チェックシートの使い方

P15についている表は、手に入れたアイテムや、弾丸、体力ポイントのプラスマイナスをチェックするためのものです。確実に記入するようにしましょう。P16のステップメモは、あなたの通った項目を記録しておくためのものです。コナミレディを選んだ人は、1番から、コナミマンを選んだ人は、76番からスタートします。

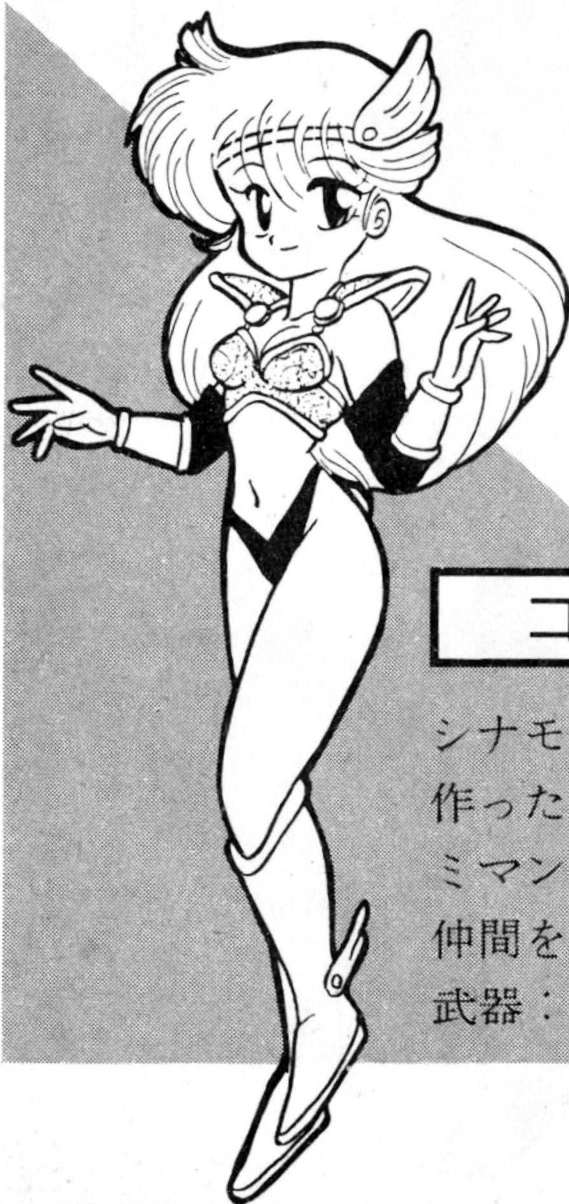
キャラクター紹介

キャラクター紹介

コナミマン

地球に残された最後のヒーロー。ワルダーから仲間を助け出し、地球を救え！
武器：レーザーガン





コナミレディ

シナモン教授が地球を救うために作った美少女アンドロイド。コナミマンと協力して、ワルダーから仲間を助け出せ！
武器：ヒートガン

シモン

トランシルヴァニアの地の英雄。しかし、ワルダーの魔力でドラキュラがよみがえり、とらわれの身になってしまった。
武器：ムチ、十字架



月風魔

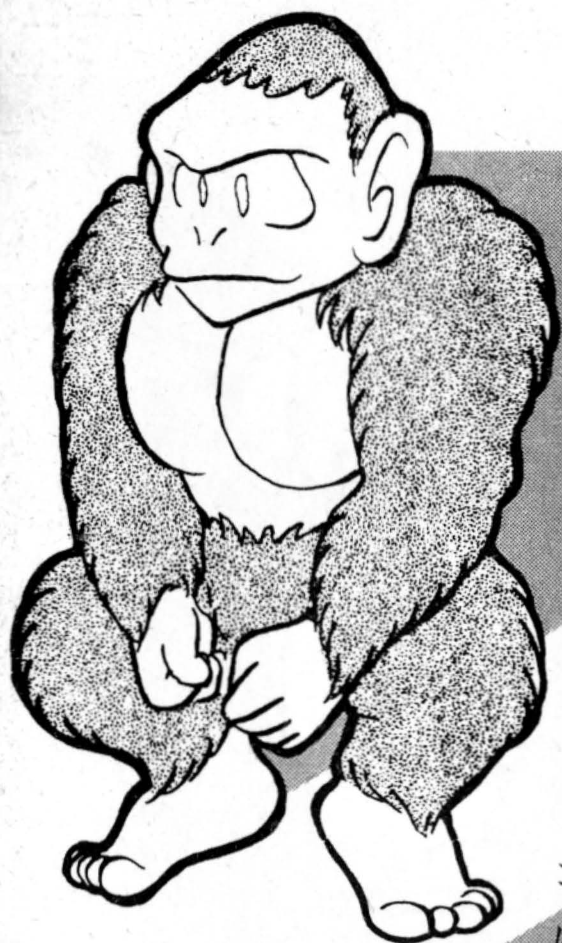
竜骨鬼を倒し、地獄に立ったヒーロー。
ワルダーの魔力に操られたエンマ大王にとらわれている。早く助け出さねば！
武器：刀、手裏剣



マイキー

海辺の小さな街、謎の小屋の地下に広がる迷宮。ワルダーの魔力に操られた化物に見はられて洞窟に閉じ込められている。
武器：パチンコ





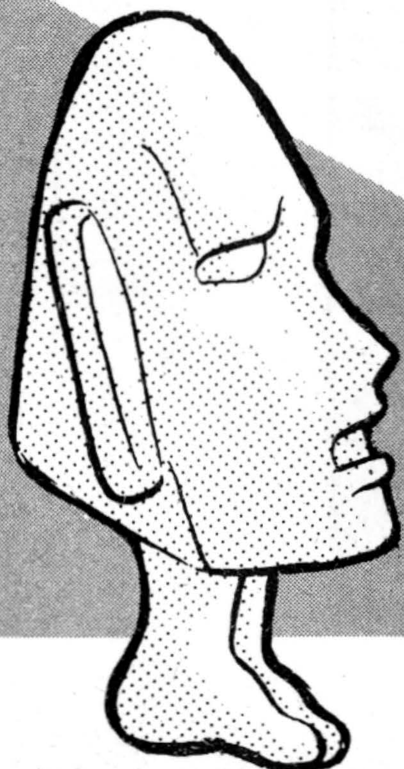
コング

未来都市をあばれまわるコングは今、巨大コンピュータにとらえられている！
武器：バナナの束



ゴエモン

コナミマンが最初に助ける仲間がこのゴエモンだ！　ゴエモンは江戸の城に閉じ込められている。
町で情報を集めて助け出せ！
武器：キセル、まねきねこ

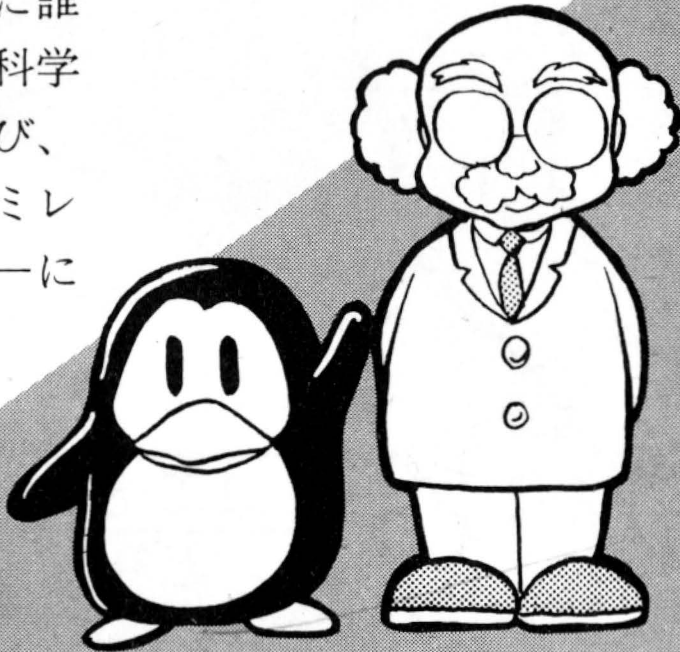


モアイ

南の島、イースター島にとらえられている謎の仲間。
自力で宇宙を飛ぶ能力を持っている。
武器：頭（頭突き）、イオンリング

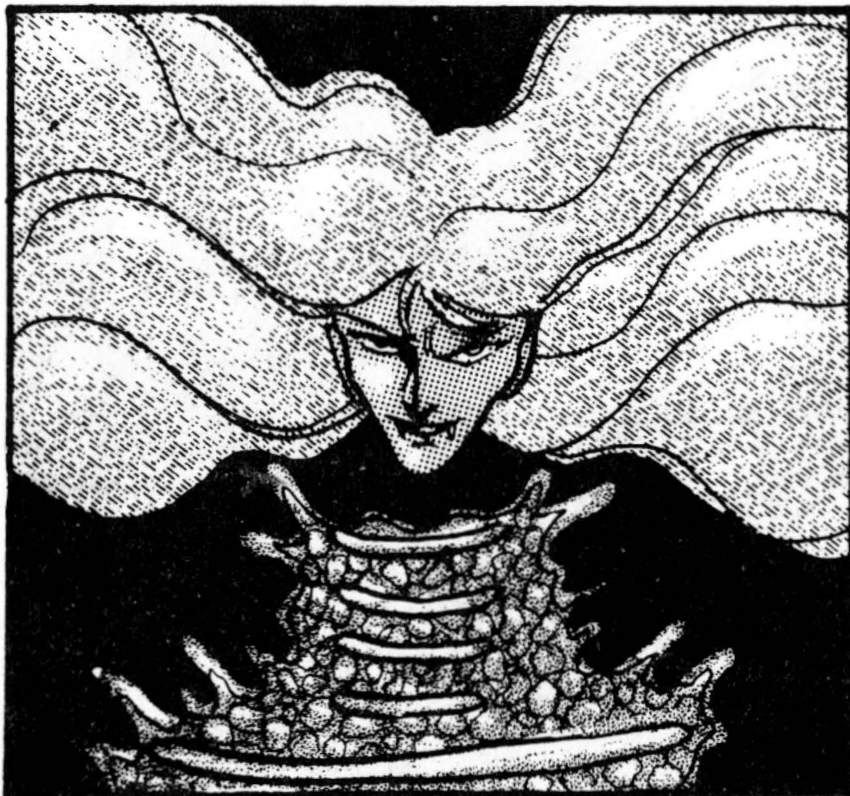
シナモン教授

ワルダーの地球侵略に誰よりも早く気づいた科学者。コナミマンを呼び、アンドロイド・コナミレディを作ってワルダーに対向する。



悪の帝王ワルダー

外宇宙からやってきた謎の生物。ヒーローたちをとらえ、地球支配をたくらんでいる。



チェックシート

チェックシート

コナミマンチーム

	体力ポイント	武器
コナミマン	20→	レーザーガン
ゴエモン	20→	まねきねこ
コング	20→	バナナ
モアイ	20→	

弾丸	30→

アイテムチェック

コナミレディチーム

	体力ポイント	武器
コナミレディ	20→	ヒートガン
シモン	20→	十字架
マイキー	20→	パチンコ
月風魔	20→	手裏剣

弾丸	30→

アイテムチェック

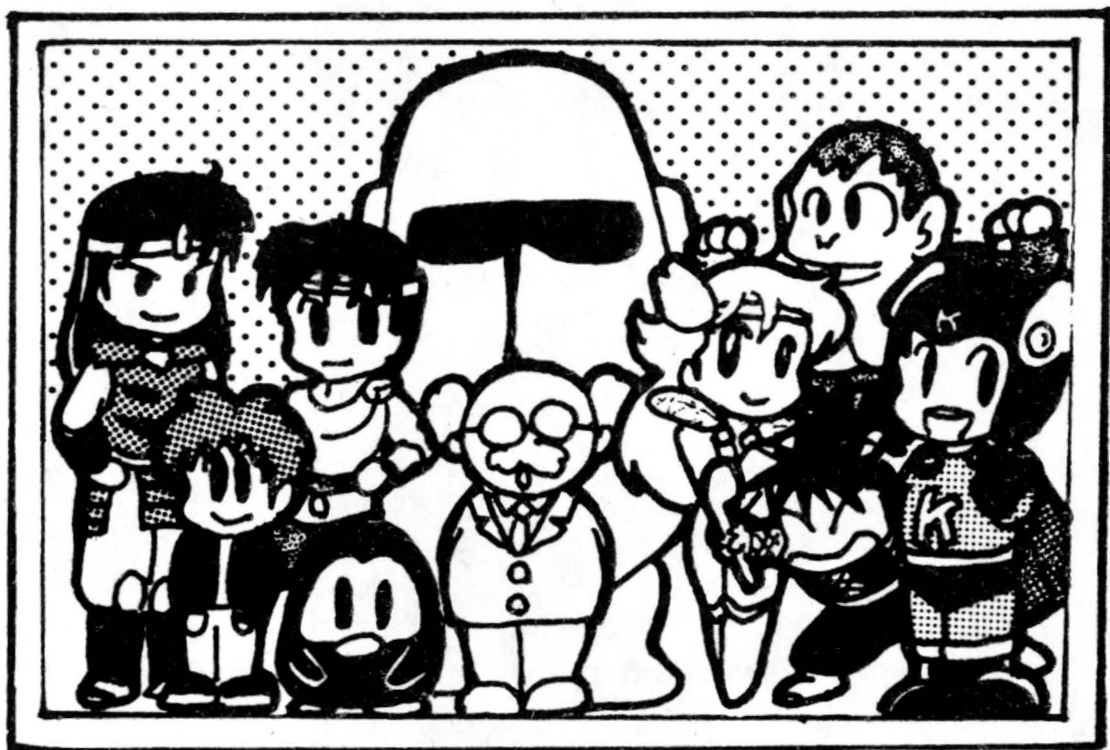
ステップメモ

1→ ←76

●あなたの行った項目をチェックしてください。コナミマンは→76から、コナミレディは→1からスタートします。迷ったときなどは、これを見ればいいでしょう。

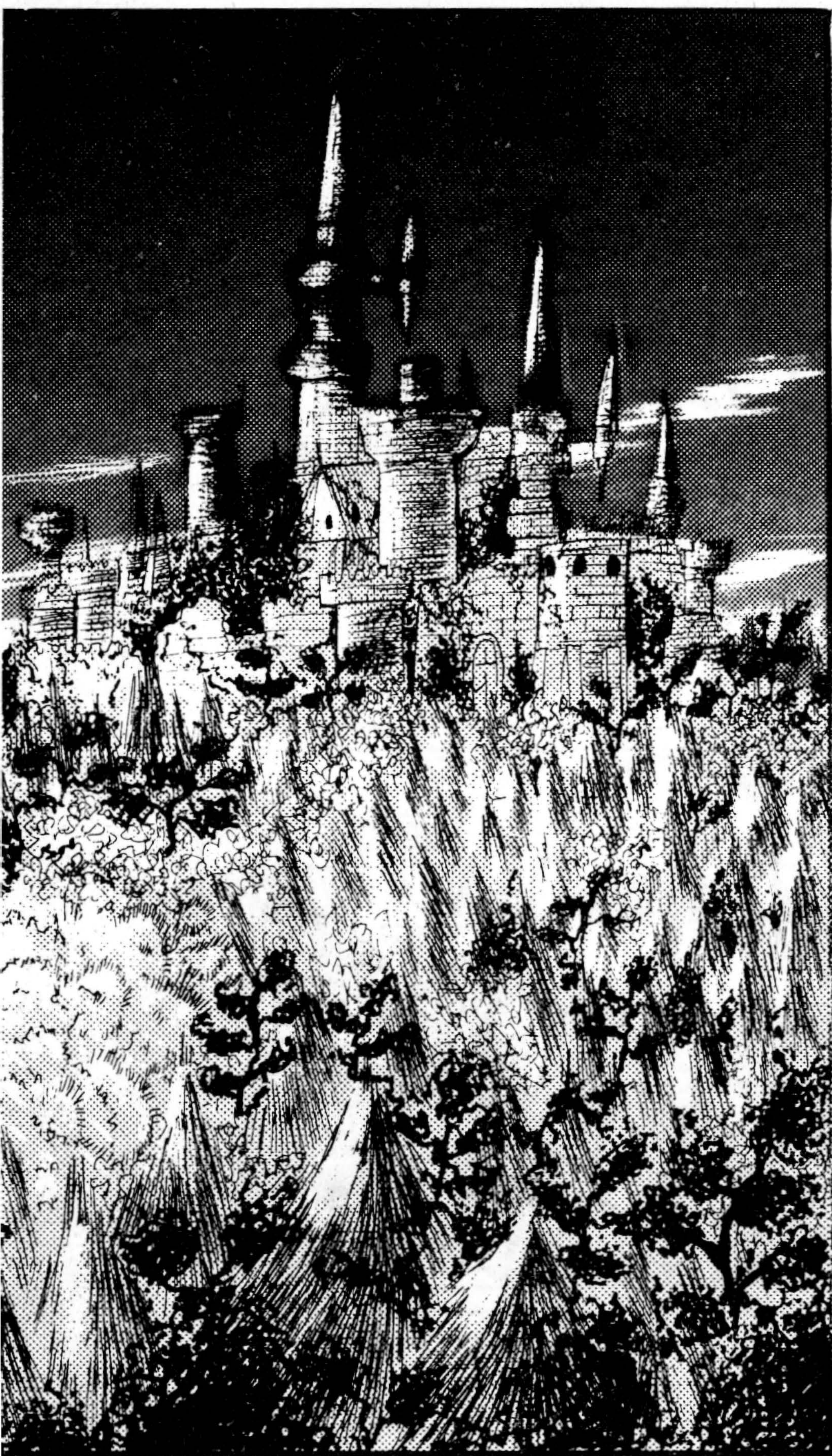
コナミ

ワイワイワールド

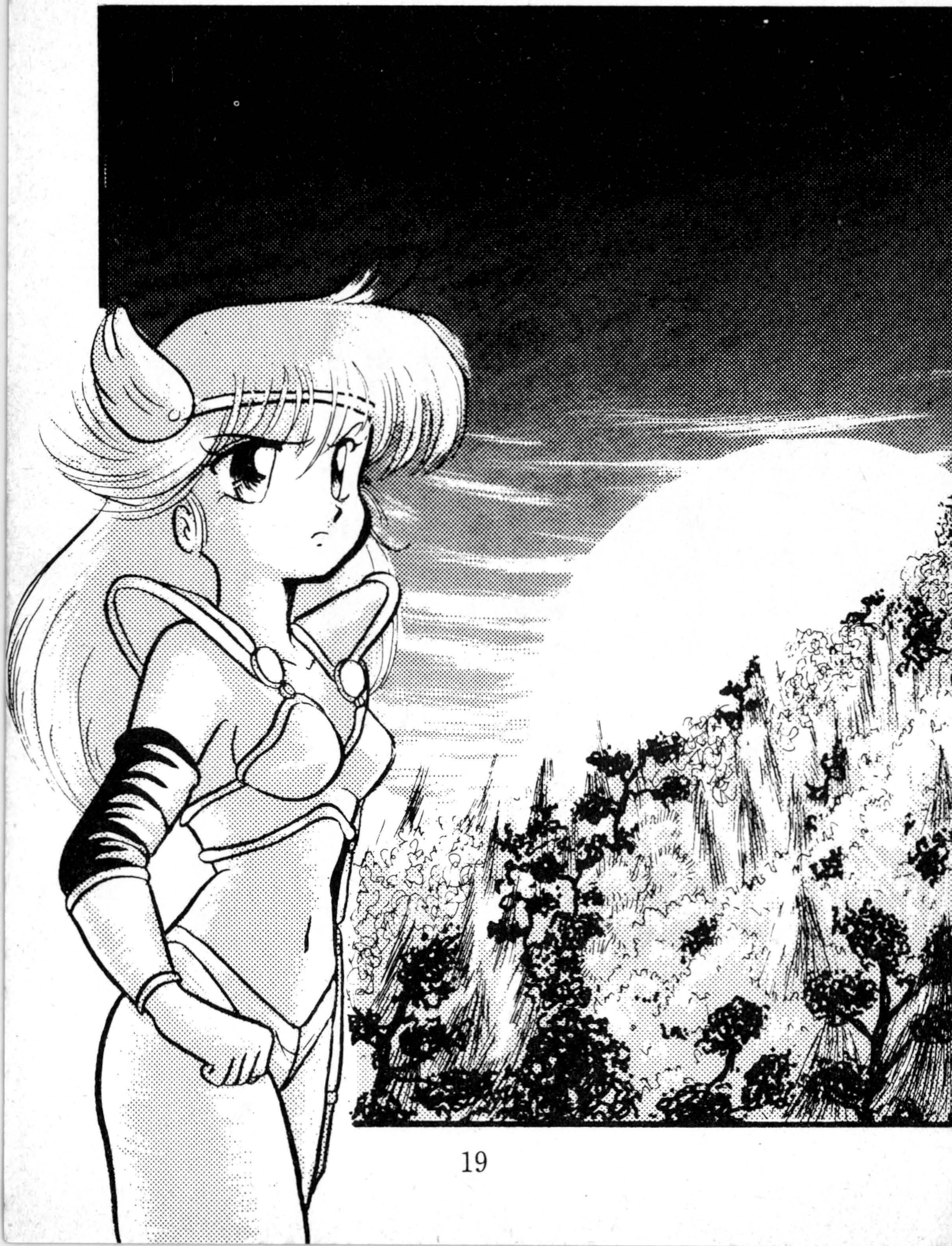


1

わたしはコナミレディ。地球をワルダーの魔の手から救うために作られたアンドロイド。だけど、わたしには感情があるの。ワルダーと戦うのは怖いわ。でも今地球を救う力があるのはわたしとコナミマンしかいないし、まるでわたしを実の娘のように思ってくれてるシナモン教授のためにもがんばって戦わなくちゃ。



1



わたしの第一の使命はトランシルヴァニアの地でシモンさんを救い出すこと……。
「きっとあそこに、シモンさんはとらわれているのね」
シナモン教授の作った次元転送機でトランシルヴァニアにやってきたわたしは、木がうっそうと立ち並ぶ森に降り立った。そして、木々の向こうに外壁が崩れ、ツタとコケに覆われた不気味な城を見つけた。
さらに改めて回りを見回してみると、近くに街らしきものが見える。煙が幾条も空に立ち登っている。あと、その街の反対側に洞窟が見える。
城も洞窟も怪しいけど、街で情報を集めることもできる。もうすぐ陽が落ちようとしているし……森の中や洞窟で夜を迎えるのは怖いわ。街に行こうかしら。

▼街へ――――↓77へ ▼城へ――――↓39へ
▼洞窟へ――――↓16へ ▼※（コナミマンコースは――↓76へ）

2

まだ何も武器を持っていないわたしに勝ち目はない。わたしはとっさにそう判断し、逃げようとした。
しかし、狼男はすでに変身し終わっていたの。
「わたしの正体を見たからには逃がさんぞ」

狼男は素早くわたしの前に立ちふさがると、そう言った。どうやって逃げる?

▼闘うように見せかけてフェイントをかける ——— ↓65へ

▼強行突破。狼男の横をすり抜ける ——— ↓14へ

3

ただでさえ暗い森の中を抜け、わたしは城の目の前までやってきた。近くで全体を見ると、さらに不気味さが増した。コケというよりはカビに近いもので全体を覆われた城は、まるで腐った肉体のようにあちこちが穴だらけで、その穴からはうじのように蔦(つた)が顔を出している。

入り口は開いている。わたしは勇気を出して中に進んでいった。 ↓47へ

4

「この街にも魔物が侵入しているらしいんです。夜が近いんで街の人々は恐れているんですよ。魔物は昼間は人間になりきることができるんです」

「魔物が誰か分からないってわけね」

「いや、私は武器屋のおやじが怪しいと睨(にら)んでるんですがね……どうもこの間、武器を仕入れに行ってから様子がおかしい」

「そうなの……」（弾丸15個マイナス）
「他にはこの街におかしいところなんかありませんよ」 ↓66へ

5

武器屋に入ってみたわたしは、何か嫌な予感がした。店の奥にいた主人のいかついい顔が嫌な予感をさらに増幅させる。
「おめぇなにもんだ。変な格好しやがって。この街の人間じゃねえな」
主人は立ち上がると、怒ったような顔でわたしに言った。
「あ、あの……武器を見せてもらいたいな……なんて……だめですか？」
「ああだめだ。よそもんに売る武器なんかねえ！　とっとと帰んな」
主人の反応はきっぱりとして非情なものだった。どうしよう？
▼あきらめて店を出る ———— ↓21へ ▼まだあきらめない ———— ↓15へ

6

「どうもありがとうございます。ではどの情報にいたしますか？」
▼この街についての情報 ———— ↓41へ
▼城の情報 ———— ↓73へ ▼洞窟の情報 ———— ↓59へ

7

びちゃ。わたしは全反射神経を動員してなんとか降り立つことができた。でも着地の瞬間、嫌な音が響いた。なにか足元で小さなものが蠢(うごめ)いている。――昆虫か？　わたしは何万匹もの昆虫の上に降り立ったらしい。さっきの音はそのうちの何匹かを踏み潰した音だ。足がずぶずぶと潜ってゆく。どうやら昆虫はプールの水のように溜っているらしい。底がどれだけ深いかは分からない。足に甲虫の殻の表面の油の感触や、なめくじのようなぬめぬめした感触が感じられる。虫の足の先の鉤(つめ)が引っ掛かる。

人間だったら、気でも失っているか、少なくても総毛立っているだろう。

わたしはどちらにもならない代わりに、不快な感触をいつまでも感じなければならなかった。

↓23へ

8

ひゅん、という風を切る音が一瞬近づいた。頬(ほお)の一部に空気の温かさを感じた。次に液体がつたう感触。鋭い刃物のようなもので頬(ほお)を切られたのだ。わたしの身体は皮膚に傷がつくと、血液に似た液体が流れて自己修復する機能を持っている。

ひゅん、ひゅん、……という音は絶え間なく続いている。まるで狂躁的な笑い声にも聞こえる。わたしは悲鳴を上げたかったが、声を出しても仕方が無いし、口を開いたら頬(ほお)の

傷が痛みそうだった。
完全に闇で逃げることもできない。闘うしかない。
わたしは首飾りを入手しているか？
▼入手している ――――― ↓18へ ▼入手していない ――――― ↓53へ

9

まっすぐ進んでみることにしたけれど、ここでも通路がふたつに分かれちゃった。今度は、まっすぐの通路と下り階段。どちらに進もうか？
▼このまままっすぐ進む ――――― ↓51へ ▼階段を下る ――――― ↓33へ

10

わたしは階段を登り、さっきのところまで戻った。この階をさらに奥まで進んでみる？
それともさっきの登り階段まで戻る？
▼奥まで進んでみる ――――― ↓51へ ▼戻る ――――― ↓30へ

11

またあのナイスミドルの神父様に何かもらえるかもしれないな―。そんなことを考えな

がら門をくぐろうとしたんだけど、門は堅く閉ざされていた。
「あれ？　どうしたのかしら……」
気がつくと、さっきまで赤い光が残っていたのに、もうすっかり陽が落ちてしまってい
た。深い森によって囲まれた街は、たちまち真っ暗になってしまった。どうやら夜になっ
たせいで教会が門を閉めているらしい。どんどん叩いても全く開けてくれる気配がない。
何か悪い予感がする……。

↓25へ

１２

教会の重々しい門をくぐると、アンドロイドのわたしでもつい、はっとしてしまうよう
なナイスミドルの神父様が優しく迎えてくれた。
わたしがここにやってきた理由を話すと、神父様は優しく、まるで包み込むような声で
こう言ってくれた。
「わたしは情報など持っておりません。お役に立てないようです。お詫びと言ってはなん
ですが、これを持ってお行きなさい。あなたを守ってくださるでしょう」
神父様は、自分の首にかけていた小さな十字架のついた首飾りをわたしの首にかけてく
れた。**（首飾り入手）**

↓56へ

13

「情報はこの街についてと、洞窟についてと、それにドラキュラ城についての3つありますが……どの情報をお買いになるんで？」

▼この街についての情報 ──────── ↓41へ
▼洞窟の情報 ──────── ↓59へ
▼ドラキュラ城の情報 ──────── ↓73へ

14

わたしは狼男の脇を駆け抜けた。

いや、そうしようと思ったのだが、狼男の横に来た瞬間、わたしの身体は軽々と持ち上げられてしまっていたのだ。

やはり横を通り抜けるなんて無謀だった。身体を持ち上げられてしまってはどうにもならない。**（コナミレディの体内ポイント、マイナス2）**

↓28へ

15

「でもここは武器屋でしょう。武器を見せてくれたって……」

わたしは踏み留まり、怖い顔の主人におずおずと言ってみた。──とたんに、主人の眉間にたてじわが寄った。

「なんだと……女のくせに一人前の口をきくじゃないか……」
主人は怖い顔をさらに怖くすると、わたしの方に寄ってきた。やだ。本当に怖いよお。
わたしは情報屋でこの街の情報を買ったか？

▼買った ―――――― ↓35へ ▼買っていない ―――――― ↓61へ

16

わたしが洞窟を調べてみようと思ったとたんに、たちまち陽が沈んでしまった。こんなのってないわよぉ。まだ夜にはならないだろうと思ってたのに。
街へ向かうのも遠いし……とにかく洞窟に入ってみることにしましょう。

↓29へ

17

街を進んで行くと、まだ開いている店2軒と教会を発見することができた。店は武器屋と情報屋。情報集めに来たのだから、情報屋に入るのがいいかもしれないけど、武器屋で何か武器を探してみるのもいいかも知れない。さすがに教会には邪悪なものは近づけないだろうから、教会に行けば安全に夜を迎えることができるだろう。
どこへ入ってみるか？

▼武器屋へ ―――――― ↓5へ ▼情報屋へ ―――――― ↓31へ

↓27へ

18

空を切る音が再び近づいてきた時、突如胸に下げていた十字架の首飾りが輝き始めた。わたしは思わず目を閉じ、さらに腕で光から目をかばった。それほどまでに凄まじい光をその十字架は発したのだ。

ぎゃあ、という苦し気な悲鳴が後を引いた。徐々に光が和らぐ。わたしは闇の雰囲気がさっきまでと全く違うことに気がついた。今では普通に暗視のきく闇になっていたし、邪悪な気配がなくなっていて、空を切る音もやんでいた。

どうやらあの神父の言ってたことは、本当だったみたい。これのお陰で助かったんだもん。後でお礼のお祈りを捧げとこ。

「そんなちっぽけな十字架でわたしの部下を倒すとはこしゃくな……」

わたしが殊勝な気分になったその時、部屋に不気味な声がこだました。

↓26へ

19

「そうですか。残念です。それでは気をつけて旅をお続けください」

「ええ。どうもありがとう」

「あ、これは忠告ですので代金はいただきません。この街は夜になるととても危険ですよ。街の外のほうが安全かも知れません。夜になる前に街を離れたほうがいいですよ」
「分かったわ」
「これからもローズウォーター・チェーン店をよろしく」
わたしはおじさんの声を背中で聞いて店を出た。

↓３７へ

２０

この扉の向こうに行かないとすると、今まで通り過ぎてきた登り階段か下り階段を進むことになるわね。どっちに進もうかしら。

▼登り階段を進む　——————　↓３０へ
▼下り階段を進む　——————　↓３３へ

２１

「あ、じゃあいいです。どうも……」
主人が怖いので、わたしは素直にあきらめることにした。あとずさるように店を出る。
「ふう。なんだったのかしら、あのおやじ。化物のほうがよっぽど怖くないわ」
わたしは扉を閉めると、吐息をついて小声で言った。だって本当に怖い顔なんだもん。
さて、と。次はどうしようかしら。

↓７５へ

22

階段を登って行くと、扉があった。わたしはその扉を開け、さらにその先に進んでみた。……のだけど、わたしはそこで立ち止まってしまった。扉の向こう側は、かなり広いホールだったんだけど、なんと、その広いホールには、いくつもの棺桶(かんおけ)が並んでいたの。わたしはびっくりしたのと恐怖でつい止まってしまった。

たぶん、この棺桶(かんおけ)のなかのひとつにドラキュラが眠っていると考えられる。そのほかは……ドラキュラの仲間だとしたら、いっせいにかかってこられたら、……わたしには勝ち目はない。

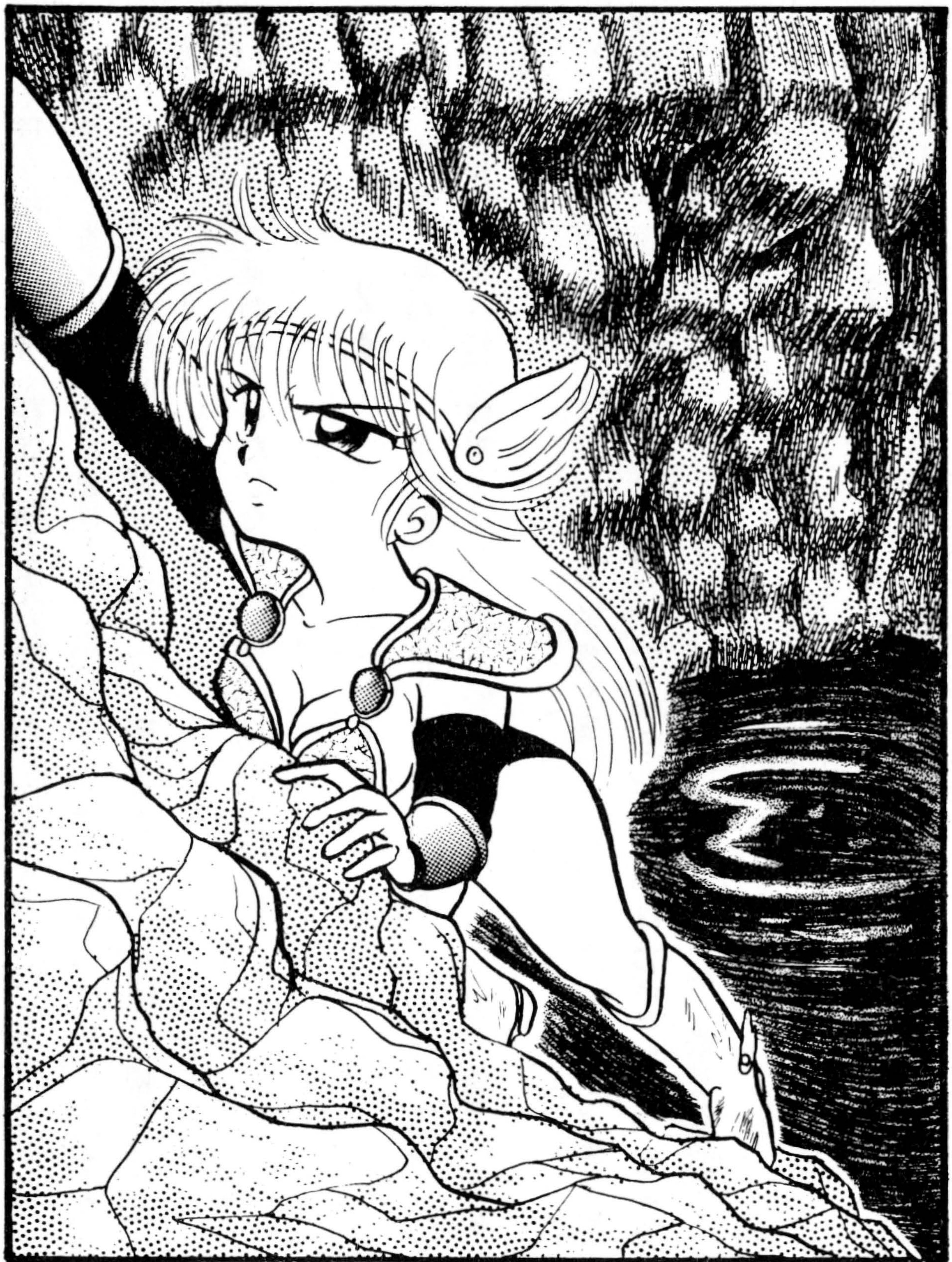
↓32へ

23

膝(ひざ)の辺りまでで潜るのは止まった。わたしは意識を脱出することのみに集中させ、不気味な感触のことを頭からなんとか追い出した。その試みは完全にではなかったが成功し、かすかに気を楽にすることができた。

わたしは穴を登り始めた。昆虫を踏み、壁まで歩いた。登って脱出するため、手掛かりのある壁を探した。円形の昆虫プールを1周することはなかった。しかし、靴の底が潰れた昆虫の体液で濡れ、滑った。片手を昆虫のプールについた。突きさされるような感触とぬめりとした感触が同時に左の手の平に発生した。すぐに起きると壁に手を擦りつけるよう

22～23



23▶　わたしは、壁に手を擦りつけるようにして穴を登り始めた。滑る靴は、つま先を壁にめりこますようにした。

にして登り始めた。滑る靴は、つま先を壁にめり込ますようにした。格闘の末、なんとか脱出に成功した。**(コナミレディの体力ポイント、マイナス5)**へたりこみながら、靴の裏を草で何回も擦(こす)った。嫌な感触の残る左手を切り捨てたい気分だった。

しばらくして使命を思いだしたわたしは、城へと足を向けた。

↓3へ

24

わたしは強く跳ねると、半回転して天井をさらに蹴った。一瞬にして狼男の上空からの好位置を得た。右腕に前体重を込め、落下の加速と合間って狼男の脳天を直撃……するはずだった。

しかし、狼男の反応速度はわたしの予想を遙かに上回っていた。彼は腕を軽く上げただけでわたしの攻撃をブロックしたのだ。**(コナミレディの体力ポイント、マイナス2)**

これで勝機は失った。わたしはそう判断すると、狼男の攻撃に転じる前に窓から外に飛び出した。

↓36へ

25

ざわ、と、何かが動く気配がした。さっきまで通行人の全くなかった通りだ。わたしは

24～25

物音がした方向に向き、身構えた。

暗闇の中に人影が見えた。わたしはほっと吐息をつき、その人影に話しかけてみるつもりで近づいた。

「きゃっ！」わたしはその人影に近づき、相手を確認すると同時に飛び上がってしまった。なんと、その人影は自分の腐った肉体を引きずって歩いていたの。顔と言わず身体と言わず腐ってぼこぼこになった皮膚からは、白いうじが大量にのたくっている。

わたしは目を背けると、近づいてゾンビの反対に向かって走った。

――とたんに何かにぶつかった。ずるりという感触があった。ぶつかった肩がぬるりとなま温かい液体で濡れた。ぶつかったひょうしに落ちたうじが地面と、そしてわたしの身体に降ってきた。

「きゃあ！」わたしの顔を覗(のぞ)き込むようにして、ゾンビの崩れ落ちた顔が目の前にあった。目玉がずるりと落ち、真っ黒な穴が見えた。白いものが蠢(うごめ)く。

わたしは思わずゾンビをつき飛ばすと、身体をはらってうじを落とした。あとずさるとうじの潰れるぷちぷちという音が聞こえてくる。わたしは一目算に街の外に逃げ出した。

↓55へ

26

「しかし、このわし、シモンを捕らえているこのドラキュラ様を倒すことはできまい！」

部屋に反響する声は、笑い声を含んだ声でセリフを続けた。

「そんなことはないわ！　わたしは絶対にあなたを倒して、シモンさんを助け出して見せる！」わたしは、どこから聞こえてくるのか分からないその声に叫びかえした。

「わたしはこの城の最上階にいる。逃げも隠れもせん。早くやって来るがいい」

ドラキュラの声は、あくまでも余裕しゃくしゃくだった。

「まってなさい！　今行くわ！」わたしはさっき開かなかった扉を押した。敵を倒して封印がとけたらしく、扉は容易に開いた。そのままさっきの登り階段目指して走る！

↓
38へ

27

この教会は小さな街にしては大きなもので、ゴシック建築のとげとげしくも美しいカテドラルだ。古くさい街並みから突出した塔は美しいし、街並みと合わせての眺めも悪くない。わたしはしばらく、うっとりと教会の表を飾るステンドグラスを眺めた。聖母に抱かれた赤子のイエスを描いた色ガラスの集合体は、夕焼けの赤い光を受けて幻想的に輝いていた。

わたしは首飾りを入手しているか？
▼入手している――――――↓１１へ▼入手していない――――――↓１２へ

２８

しかしわたしは、ほぼ反射的に身体を動かしていた。無意識のうちにわたしの膝頭を狼男の腹にえぐり込ませていたのだ。
狼男は苦し気にうめくと、わたしを放した。これをチャンスと見て取ったわたしは、逃げずに追い打ちをかけた。
並の人間とは比べものにならないくらいに強化されたつま先を、狼男のみぞおちに叩き込んだのだ。
↓６７へ

２９

闇の中、わたしは洞窟の入り口までやってきた。緩やかな傾斜でくだっている洞窟は、まったく先が見えない。わたしの目は人間よりもよく見えるし、暗いところでもある程度見えるようになっているけど、それでも怖いことにはかわりない。
わたしは洞窟に一歩踏み込もうとした。
バシッ！　しかし、わたしの身体は次の瞬間はじき飛ばされてしまっていた。何か洞窟

の入り口にはバリヤーのようなものがはってあり、封じ込められているようだ。封じ込めたものは――あの城にあると考えるのが普通だろう。
その時、地面がぱっくりと割れてわたしの身体は落下した。
➡7へ

30

わたしは最初の分かれ道、登り階段にあるところまで戻り、その階段を登って上の階へ進んだ。
➡22へ

31

「情報店《ローズウォーター》」と看板のあるその店に入ってみると、よく太ったおじさんが「いらっしゃいませ」とわたしを迎えてくれた。
わたしがここに来た理由を話すと、おじさんはこう言った。
「うちは良心的な店ですが、ちゃんとお代はいただきますよ。弾丸と引き換えで情報をお売りしますが……どうしますか?」
弾丸15個で情報をひとつ売ってくれるらしいけど……。どうしよう?
▼情報を買う ―――――― ➡13へ
▼買わない（弾丸が足りない） ➡19へ

３２

ぎぎっ。何かが軋む音。この中のどれかが動いたのかしら。でもいっぱいあり過ぎてどれが動いたのか分からない。
このまま脅えて立ちつくしていても仕方ないわ。ひとつひとつ開けて確かめてみよう。
わたしはそう決心すると、まず手近なところにあった棺桶のふたを開けた。
なかは、からっぽだった。わたしは息をつくと、次のふたに手をかけた。今の棺桶がからっぽだったことがわたしを大いに力づけた。確かめていけば不安は少なくなっていくに違いない。

↓４６へ

３３

階段を下ってみると、扉に突き当たって終わった。この扉に入らなければ戻る以外にない。もちろん、扉の向こうに何があるのか分からない。
扉の向こうに進んでみるか？　それともさっきの階段の入り口まで戻るか？

▼扉の向こうへ進む ——— ↓４９へ
▼戻る ——— ↓１０へ

３４

扉を開けたとたん、強い光がわたしの目を射た。

次の瞬間、またもとの暗さに戻る。いまの放電？　強い光に一瞬安全装置が働いたわたしの目が再び急速に暗さになれると、その扉の向こうは小さな部屋で、異様な機械が四方の壁を埋めつくし、中央に巨大なベッドがあることが分かった。
そして、今その巨大なベッドに横たわっていたものが起きようとしていた。身体中に縫い目のある醜い巨人、ベッドにいるのは、まさしくフランケンシュタインだった。
フランケンシュタインは、どうも身体を動かしづらいらしく、ごくゆっくりと身体を起き上がらせていた。少し動かす度に彼の身体のあちこちにある縫い目がギシギシと鳴る。皮膚に引きつれのようなものができる。縫い目は完全についてはいないようだ。これでは内圧に耐え切れずにそのうち爆発するに違いない。
フランケンシュタインと闘うか？　それともこの部屋から逃げるか？
▼闘う――――――――――↓50へ▼逃げるか――――――――――↓40へ

35

主人の顔は、どんどん凶悪なものに変わってゆき、だんだんと人間ではないものに変貌（ぼう）しつつあった。
――さっき情報屋が言ってたことは本当だったんだわ！
わたしは思わず身構えた。

「女、わしと闘おうというのか？　はっ、むだなことを……」主人は、そう言っている間にも変化していった。身体中に剛毛が拡がってゆき、筋肉がみしみし音を立てて太くなった。衣服ははち切れるように破け、堅い毛に覆われた身体が露出した。
「はっ、はっ……」どんどん早くなる息づかい。鼻面がせり上がり、舌を長く垂らしたその顔は、どう猛な飢えた狼……いや、伝説の狼男そのものだった。

▼闘う————————↓63へ▼逃げる————————↓2へ

36

「くそっ」
窓の向こうから狼男の声が小さく聞こえた。わたしは用心深く武器屋から離れたが、その必要もなかったようだ。狼男が店の外まで追ってくる気配はなかった。
「ふう」わたしは思わず安堵の吐息を漏らした。次の行動に移るとしよう。

↓75へ

37

さて、情報屋を後にしたが、次はどうしようかしら。おじさんの忠告通り街を出たほうがいいのかしら……。

▼武器屋に行ってみる————↓5へ▼教会へ行ってみる　————↓27へ

▼情報屋のおじさんの忠告通り街を出る――――――――――――

↓71へ

38

登り階段まで戻ると、わたしはそのままの階段を駆け登り始めた。シモンさんを捕らえているドラキュラはもう近い。

↓22へ

39

わたしは、怖いけど先に城へ向かってみることにした。早くシモンさんを助け出すに越したことはないもの。

でも、城までは思ったよりも距離があった。目の前に不気味な城の全体が見えたとき、すでに陽はとっぷり暮れてしまっていた。

↓3へ

40

逃げようと思ったその時、気がついた。フランケンシュタインのベッドの向こうに厳重に密封されたケースがある。あれにはいったい何が入っているのかしら。鍵をかけてさらにガムテープで止めたケースを、さらにガラスケースにいれてある。よほど重要なものみたい。あれを手にいれれば闘いは有利になるんじゃないかしら。

でも、あのケースに近づくには絶対にフランケンシュタインの横を通らなければならないし……あきらめてこのまま逃げたほうが安全かも知れない。どうしよう。

▼ケースを奪う ——————— ↓64へ
▼あきらめて逃げる ——————— ↓52へ

41

「この街についての情報ですね？」
「ええ、こんなに静かなのは、なにかおかしいわ。理由を知ってるなら教えて」
「それに関係があるかどうかは分かりませんが……この店の向かいにある武器屋についてですが……」
わたしはすでに武器屋には入っているか？

▼入っている ——————— ↓69へ
▼入っていない ——————— ↓4へ

42

わたしは縫い目を狙って蹴りを放った。命中と同時に、起き上がっていたフランケンシュタインの動きが止まる。今の1発の衝撃はかなり大きなものだったみたい。
蹴りの入った縫目がどくん、どくん、と大きく揺れている。皮膚のひきつれが大きくなってゆく。今の攻撃で過負荷に耐えられなくなったらしい。

↓60へ

43

「たあっ！」わたしの右足が狼男の腹に決まった。つま先がみぞおちをえぐるように突き刺す。まだ2本足で立ったままの狼男にとって、みぞおちは急所であるはずだった。

狼男はもんどりうって倒れる。わたしはさらに追い打ちをかけた。

ジャンプして倒れた狼男の上空にくると、両膝(ひざ)を折って膝(ひざ)を下に向ける。そのまま落下にまかせるだけで、狼男は腹にさらに大きな衝撃を受けた。

わたしの足は強化筋肉でできている。膝(ひざ)は並の武器に勝るほどの強度をもっている。つま先も同じだ。この連続攻撃を受けて立ち上がれる者がいるとは思えない。

↓67へ

44

さっきの部屋から離れ、フランケンシュタインが追ってくる様子がないことを確かめてわたしはやっと心を落ち着けることができた。

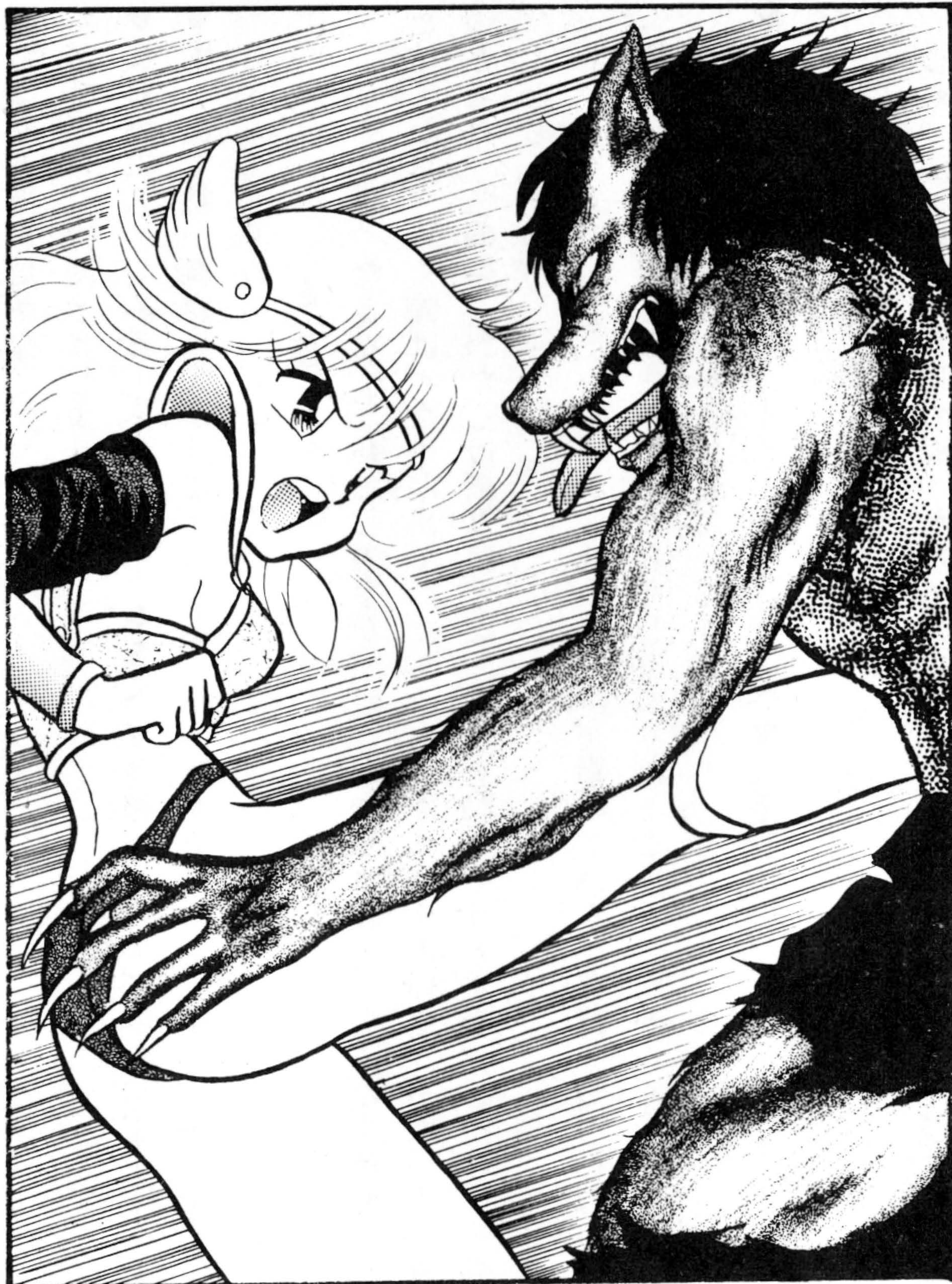
とにかく、あの部屋からは他に出口はなかったはずだから、この城の主人と闘うには通り過ぎてきた登り階段か下り階段を進む必要があるようね。

↓48へ

45

教会なんて結局あんなものなのね—。なんか感動して損しちゃった。でも首飾りもらっ

43～45



43▶　「たあっ！」わたしの右足が狼男の腹に決まった。つま先がみぞおちをえぐるように突き刺す。

てちょっと得したかな。
さて、と、次はどうしようかな。

▼武器屋に入ってみる ——— ↓5へ
▼情報屋へ入ってみる ——— ↓31へ
▼街を出て城か洞窟に向かうことにする ——— ↓71へ

46

——そう思ったとたん、わたしの手が、がっとつかまれた。今ふたを持ち上げようとした棺桶（かんおけ）から、青く骨ばった手が出てわたしの右手をつかんでいる。冷たい手。骨がごつごつと当たって痛い。わたしは振りほどこうと手を動かそうとする。しかし、その細い手はびくともしない。
「ふっふっふっふ……」棺桶（かんおけ）から低い笑い声が響いている。右腕をつかむ力が増す。
「放して。姿を現しなさいよ！」わたしは振りほどこうとしながら叫ぶ。
わたしは、にんにくを入手しているか？

▼入手している ——— ↓57へ
▼入手していない ——— ↓68へ

47

じめっとしめった感じの濁った空気の中、わたしは城の奥へと進んでゆく。城内はロウ

ソクで明かりがつけられており、闇ではない。ただし、その細い明かりも濁った空気で拡散され、まるで霧の中を進んでいるように感じた。
　壁づたいに進んでいるのだが、実際に壁には手を触れていない。コケだかカビだかがぬるぬるするので気持ち悪くて触る気がしない。時折落ちてくる水滴もねばついていて、まるで胃液のようだ。何か巨大な生物の体内を歩いているような気分。ヤダなあ。
しばらく進んでゆくと、このまま進む廊下と、登り階段に先が分かれた。どっちの通路もこれ以上悪くならない代わりに、よくもならない。どっちに行こうかしら。
▼このまままっすぐ進む――――↓９へ▼階段を登る――――↓２２へ

４８

途中、通り過ぎてきた登り階段か下り階段を進んでみようと思う。どっちに進もうかな。
▼登り階段――――↓３０へ▼下り階段へ――――↓７４へ

４９

わたしは扉を開いた。扉の向こうには、明かりが全くないの。完全な闇だわ。淀んだ空気はここでさらに濃くなっているみたい。圧力さえ感じる臭気が鼻を突いてくる。
アンモニアに似た悪臭は、長く嗅いでいると気がおかしくなってしまいそう。

普通の人間よりも暗視がきくはずのわたしでさえ、この闇を透かし見ることはできない。わたしは闇の中に一歩踏みだした。床が抜けているということはないみたい。
両足が扉を越えたその時だった。
背後で扉が音を立てて閉まった。廊下のロウソクの明かりさえない闇。わたしはとっさに扉を開けようとしたが、押しても引いても扉はびくともしない。どうも鍵に呪いがかけてあるみたいだわ。

↓8へ

50

しかし、どうやって闘ったらいいのかしら。……縫い目に攻撃を集中するか、それとも大きな頭に攻撃を集中するか。そのどちらかね。攻撃方法としては、縫い目を狙ったほうが簡単だけど……。

▼縫い目を狙って攻撃する ――――↓42へ
▼頭を狙って攻撃する ――――↓58へ

51

奥へ進んでゆくと、扉に突き当たった。扉の向こうへ行かなければ、引き返す以外にない。どうしよう。

▼扉の向こうへ進む ――――↓34へ
▼進まないで、戻ることにする ――――↓20へ

52

別にケースの中身がなくてもドラキュラを倒せないことはないわよ。
ここでフランケンシュタインと闘ったほうがダメージを受けるかも知れないし……。
わたしは自分にそう言い聞かせると、ケースのことはあきらめて部屋から逃げ出すことにした。
フランケンシュタインはまだベッドから離れていなかった。追ってくる様子もない。

↓44へ

53

わたしは空を切る音が十分近づくのを待ってから、かがんで2度目の攻撃をよけた。近くにいるはずの見えない敵に、拳とつま先で連続攻撃を繰り返す。
敵も何度か反撃してきて、わたしは腕と足に幾つか浅い傷をつくった。しかし、確実な手応えが3度続き、どさりと倒れる音と共に、部屋を包み込んでいた邪悪な殺気が消えた。
「ふうっ。なんとか勝ったみたいね……」
わたしはあらくなった息と一緒にため息をつき、胸をなでおろした。
「ふっふっふ。素手でこいつを倒すとは豪気な娘よの」
「誰！　どこにいるの！」わたしは突如部屋に響き渡った声に再び身構えた。

「わしはここにはいない。身構えても無駄なことじゃ」その声は笑いながらそう答えた。

↓26へ

54

「きゃあ!」突然手を引っ張られ、わたしは思わず悲鳴をあげてしまった。

「おとなしいいい子だ。さぞかし血もおいしいことだろう……」

なんと、ドラキュラはわたしのことを人間の女の子だと思って血を吸おうとしたの。わたしは驚いてあばれたけど間に合わなかった。ドラキュラの蒼白な顔が近づく……首にひやりと冷たいものも感じ、次に痛みが走る。**(コナミレディの体力ポイント、マイナス3)**

「む、おまえは人間ではないな!」ドラキュラは青白い顔をさらに白くすると、つかんでいた右手も放して飛び退いた。

わたしはこのチャンスを逃しはしなかった。ひるんだドラキュラは隙だらけで、わたしの右足は彼の腹部を直撃した。

↓143へ

55

いくらアンドロイドでも、女性の感情をインプットされたわたしにはゾンビは気持ち悪い存在だった。しばらく思考がまとまらないくらいに混乱していたが、なんとか気を取り

直した。城か洞窟に向かうことにしよう。街の近くにいても仕方がない。
▼城へ向かう ↓3へ ▼洞窟へ向かう ↓29へ

56

「いいのですか？　こんなものをいただいてしまって……」
わたしが恐縮して聞くと、神父様はニコリと笑みを浮かべてこう言った。
「案ずることはありません。神はいつもあなたとともにいます」
わたしが感動していると、神父様は表情を変えぬまま……。
「ときにお嬢さん、この豪華版聖書をお買いになりませんか？　今ならお安くしときますよ」
「結構です」わたしは何か汚いものでも見てしまった気分でそう言うと、教会を飛び出した。
↓45へ

57

わたしは、さっきのフランケンシュタインとの戦いで得たにんにくを取り出し、棺桶（かんおけ）の中に放り込んだ。青く細い腕は現れたときと同じように唐突にその中に消えた。不気味な悲鳴が棺桶（かんおけ）をゆるがす。がたがたと揺れた後、まるで爆発するようにふたが飛んだ。



57▶　コウモリがよたよたと１匹、中から飛び立ち、ぼんと爆発すると、そこにはマント姿の人影が現れた。

コウモリがよたよたと1匹中から飛び立ち、力弱く着地し、ぽんと爆発すると、そこにマント姿の人影が現れた。

↓143へ

58

わたしは起き上がりかけたフランケンシュタインの眉間につま先を叩き込んだ。

蹴りはたしかに命中し、わたしは手応えを感じた。

しかし、フランケンシュタインは倒れなかった。ダメージを受けている様子も全くない。相変わらず虚ろな表情でゆっくりと起き上がっている。

フランケンシュタインの目が開かれた。両腕が上がり、わたしのほうに伸ばされる。わたしは蹴りの連続攻撃をその腕に放った。フランケンシュタインの腕に巻かれた包帯が裂ける。どす黒い血がうす汚れた包帯をさらに汚す。しかし、腕の動きは止まらず、フランケンシュタインの表情にも変化は見られない。

フランケンシュタインの腕が急に素早く動いた。わたしの身体を強く打ち、わたしは大きく飛ばされた。**(コナミレディの体力ポイント、マイナス3)**

「だめだわ、パワーが違い過ぎる……」わたしはこの合成人間にはかなわないと悟った。

わたしはあんな化物とは違うわ。そう心の中で叫びながら逃げ出した。

↓44へ

59

「これは確実な情報ですよ。あの洞窟は昔ドラキュラの魔力によって地下迷宮にされたんですが、現在は牢獄になっているんです」
「誰がそこに捕らえられているの？　……もしかして……」
「そう、そのもしかしてです。ドラキュラを倒してトランシルヴァニアを救ってくれた英雄シモンが現在敵の手に落ちてあの洞窟に捕らえられてしまっているのです」
「シモンさんはあの洞窟に捕らえられているのね！」**（弾丸15個マイナス）**
「そうなんです。どうか私達の英雄を救ってください！」

↓66へ

60

フランケンシュタインの縫い目のあちこちからどす黒い血が流れ始めた。縫い糸が今にも切れそうにぎりぎりと唸りを上げる。拡がった傷口から臓物が汚物のようにひり出てくる。真っ黒で、粘液状の血液を滴らせながら。

ばっ！　とはじけたかと思うと、部屋の中は一瞬にして臓物と赤黒の血で彩られた。わたしはとっさにもの影に隠れたので、血のシャワーを浴びずにすんだ。

腹の中で爆弾が爆発したように腹部がえぐられたフランケンシュタインは、それでもまだ息があった。自分の身体を構成していた物体でできた水溜りの中で苦し気に蠢いていた。

フランケンシュタインの身体がずるずると移動してゆく。その口からは今まで聞いたこともないような声が聞こえる。何者かを呪う声。

怪物は力尽きて倒れた。機械に倒れ込み、ガラスケースが床に落ちた。飛び散るガラスの破片と一緒に、小さなケースがわたしのところに飛んできた。

怪物の悲惨な姿を見続けることができなくなっていたわたしは、そのケースに注意を移し、床から取り上げた。鍵とガムテープで厳重に密閉されたケース。わたしはそれをこじ開けた。

ケースの中に入っていたのは、にんにくの欠けらだった。ドラキュラの弱いもののひとつが、このにんにく。わたしはそれをポケットに入れると、怪物の死体から目を背けたまま部屋を出た。**（にんにく入手）**

↓48へ

61

「しかしわしは売らんと言ったものは売らん！　女に売る武器などこの店には置いてない。とっとと出ていけ！」

主人は殴りかかってきそうな勢いで怒鳴った。わたしはなかば反射的に動き、気がつくと店の外に立っていた。

「あー怖かった。……さてと、次はどうしようかしら……」

↓75へ

62

目をつむったドラキュラの顔面に左拳を放つ。――しかし、ドラキュラはその攻撃を明らかに予知していた。右手だけでなく左手までもつかまれてしまった！

わたしはあわてて両手を引き、なんとか左手だけは外すことに成功した。結果的にさっきとかわりがない。どうしたらいいの。

▼右手をつかんでいる手にキック！↓72へ▼しばらく様子を見る ――――↓54へ

63

わたしは狼男が飛びかかってきてもよけられるように大きく間合いを取った。剛毛に覆われていても、見るだけで分かる腿の引き締まった筋肉は、狼男が俊敏に動けることを示している。最初にこちらの攻撃が決まらなければ、恐らく動きで勝てないわたしに勝ち目はないだろう。

どう攻撃をかける？

▼一撃必殺の蹴りを放つ ――――――――――↓43へ

▼ジャンプと同時に渾身の力を込めてパンチ ――――――――――↓24へ

６４

わたしはゆっくりと起き上がるフランケンシュタインを見据えながら、そのベッドの脇を通った。そして、ガラスケースに手が届きそうになったとき、わたしはケースの中身を手に入れたことを確信した。
わたしの肩が化物じみた巨大な手でつかまれるまでは……。
そう、怪物は突然わたしの肩をつかんだ。それも凄まじい力で。普通の人間だったら骨が砕け散ってしまうくらいの力で。
わたしは痛みによる反射行動で無意識のうちに蹴りを放っていた。

↓７０へ

６５

「ほう、逃げるのを観念したか、これでお前の運命もつきたな」
わたしが身構えるのを見て、狼男は不敵に鼻面を歪ませ、そう言った。
次のわたしの行動は我ながら、素早いものだった。狼男が余裕を見せて笑ったその瞬間に思い切り後ろにジャンプしたのだ。そこには大きめの窓があるはずだった。
窓ガラスの破片とともにわたしは外に転がり出た。間髪を入れずに通りを駆けぬける。

↓３６へ

66

「この情報はこれで終わりです。他の情報もお買いなさいますか？　弾丸15個ですよ」
情報屋のおじさんコロリと態度を変えて聞いてきた。もしかしてこのおじさん、ものすごく商売上手なのかも知れない。どうしよう？　まだ情報を買おうかしら。

▼買う――――――――**↓6へ**
▼買わない（弾丸が足りない）――**↓19へ**

67

狼男は倒れたまま、遂に再び動くことはなかった。わたしは改めて自分の戦闘能力を実感した。教授に聞かされてはいたが、これほどの威力があるとは思わなかったのだ。
わたしは気を取り直すと、回りを見回してみた。なにか使えそうな武器はないかと思ったからだ。剣や防具が並んでいる。しかし、小柄なわたしにしっくり合うような武器は見当たらなかった。
ただ、箱の中に厳重にしまわれた十字架を発見することができた。邪悪なものを倒す十字架はわたしにも使えるだろう。それをしまうと、わたしは武器屋を後にした。**（シモンの武器として十字架を入手する）**

↓75へ

68

棺桶(かんおけ)のふたが苦し気な音を立ててずれていった。中には、目を閉じたドラキュラが横たわっている。その唇がにやりと歪んだ。

「望み通り姿を現してやったぞ。さあ、どうするね？　お嬢さん」

「ばかにしてるわ。今に見てらっしゃい」

無防備に横たわっているように見えるドラキュラに直接攻撃をかけようと思うけど、どう攻撃したらいいのかしら。

▼空いている左手でパンチ！——↓62へ▼右手をつかんで手にキック！—↓72へ

▼罠かも知れないので、様子を見る——————————↓54へ

69

「あ、あの武器屋のことね。それならいいわ。他の情報にしてちょうだい」

「そうですか？　べつにそれならいいですけど……それじゃあ洞窟の情報とドラキュラ城のどちらにしますか？」

▼洞窟の情報にする————↓59へ▼ドラキュラ城の情報にする—↓73へ

70

反射的に放った蹴りが、ちょうどフランケンシュタインの真中にある縫い目に命中したのは偶然だったけど、この攻撃は計らずも怪物にかなりダメージを与えた。

怪物は動きを止めていた。わたしの肩をつかんでいる手からも力が抜け、わたしは容易に脱出することができた。

脱出している間に、怪物の縫い目が盛り上がっていた。どくん、どくん、という音と共に大きく揺れている。皮膚に走る引きつれがさらに大きくなる。どうやら衝撃で縫い目が内圧に耐えられなくなってしまったみたいだった。

↓60へ

71

街を出るのと陽が落ちたのは、まさしく同じ瞬間だった。

とたんに、街の中を何かが動き始めた。わたしは木々に隠れて街中を透かし見た。

先程まで通行人さえなかった街を、人影が動き回っていた。――ただし、尋常な人間ではないことは明らかだった。人影はそれぞれ何かを引きずっていた。

引きずっているのは、腐った己(おのれ)の肉体だった。街を動き回っているのはゾンビなのだ。

わたしは気持ち悪くなって目を背けた。

↓55へ

72

攻撃は見事に決まった。わたしの右手をつかんでいたドラキュラの手は痛みに力を緩めた。すかさず右手を引き、さらに左拳をドラキュラの腹部に叩き込む。
攻撃が決まって苦し気にうめいたドラキュラは、次の瞬間コウモリに変身していた。

↓143へ

73

「このトランシルヴァニアはまたもや危機に直面しています。この街がこのように活気のない街になってしまったのもそれが原因です」
「いったい何があの城に起こったの？」
「私達の英雄シモンによって倒されたはずのドラキュラがまたもや復活してしまったのです。もうそんなことはないと思っていたのに……。その上シモンはドラキュラの手に落ちてしまいました。」**（弾丸15個マイナス）**
「だからわたしが来たのよ。わたしがドラキュラを倒すわ」
「そんなことはきっと無理ですよ。……ああ、シモンさえ無事なら……」

↓66へ

74

わたしは、ふたつ目の分かれ道、下り階段のあるところまで戻り、その階段を降りて下の階へ進んだ。階段は扉で終わっており、わたしはそのままその扉を開けた。

↓49へ

75

さて、次はどうしようかな?

▼情報屋に入る ―――――― ↓31へ

▼教会に入る ―――――― ↓27へ

▼街を出て城か洞窟に行ってみることにする ―――――― ↓71へ

76

「それじゃあ、コナミマン君、頼んだよ。地球の未来はきみの双肩にかかっているのだ」

「はいっ!」オレの肩に世界が……すごいなあ。がんばるぞお。

「きみの第一の使命は江戸時代へ飛び、ゴエモンを助けることじゃ。さあ、行くのじゃ」

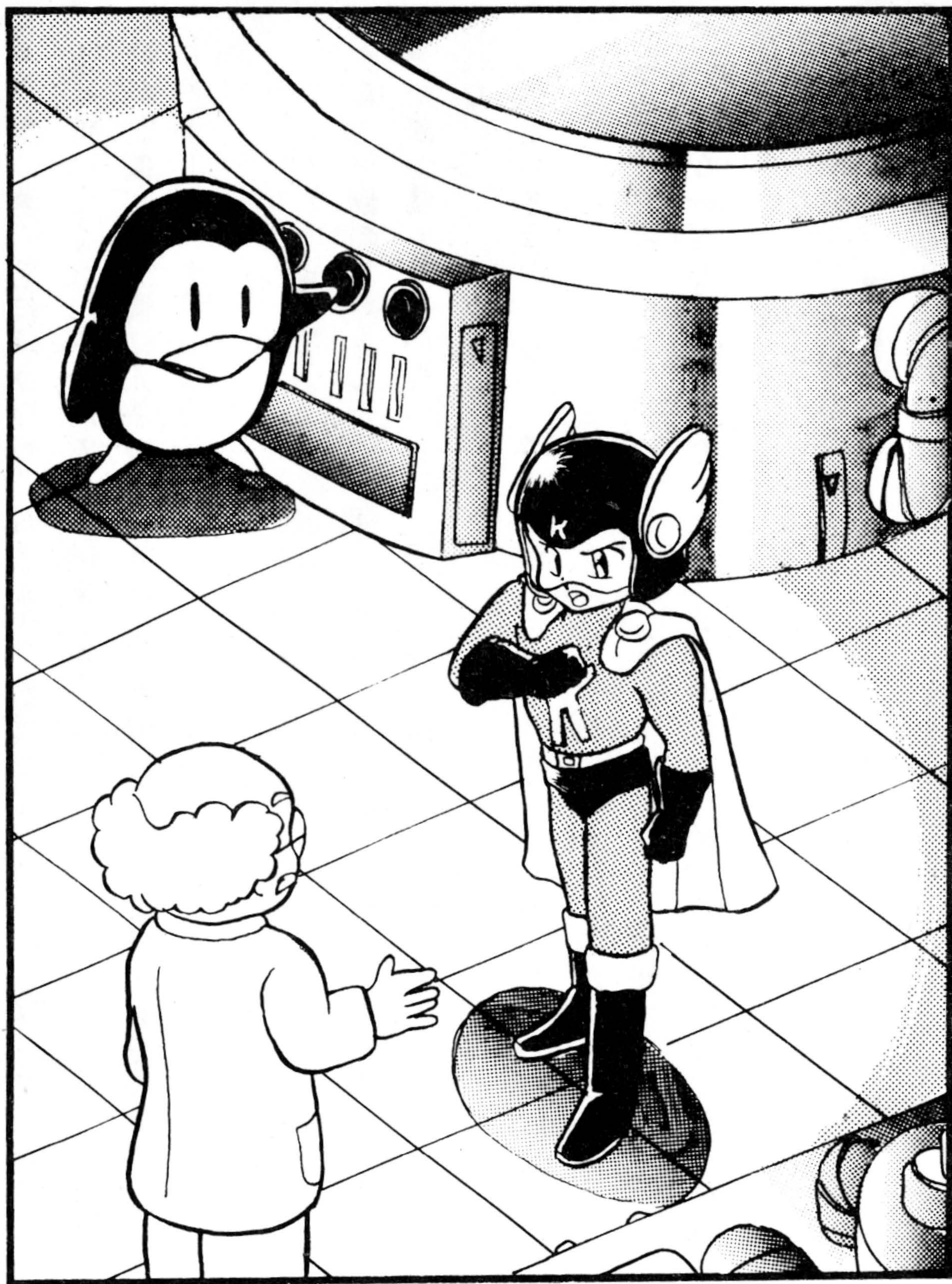
俺は教授に、次元転送機なるものに案内された。これで江戸時代に行けるのだ。

「次元転送には苦痛がつきまとうかも知れんが、そこはがまんしてくれたまえ」

「え、い、痛いんですか?」

「だーいじょうぶじゃ。ほれ、きみの肩には世界の運命が……」

７４～７６



76▶　「それじゃあ、コナミマン君、頼んだよ。地球の未来はきみの双肩にかかっているのだ」

「そうだ。僕の肩には世界が。行きます。教授、江戸時代に転送してください！」
「よく言ってくれた。それでは転送するぞ」
「はい」俺が転送機に入るのを見届けて、教授はスイッチを入れた。
「うぎゃ——っ！」

↓85へ

77

夕食の準備のためらしい煙が何本も登ってる街は、意外なくらい静かだった。まだ陽が落ちてもいないのに、ほとんどの店はすでに閉まっているし、通行人の姿も見られない。
「いったいどうなっちゃってるのかしら……。煙が立ち登ってるわりには家々からも物音が聞こえてこないし……まるで何かに脅えて声を潜めてるみたい」
口に出してみて初めて思い出した。シモンに振りかかった魔の手はこの街にも届いているのではないだろうか。だとしたら、考えなしに行動するのは危険だわ。慎重に行動しなくちゃ。

↓17へ

78

「お客さんも好きだねえ。それじゃあ入りますよ」

主人はそう口元をほころばせながら言うと、振り壺に再びサイコロを投げ込んだ。オレは、一瞬主人の目が口元とは裏腹に鋭く光ったのを見たような気がした。
「それじゃあ今度はどうしますか？」
▼丁にする ——————— ↓109へ ▼半にする ——————— ↓119へ

79

「いらっしゃい。うちはサイコロ賭博（とばく）の店「ろんろん」です。一回の掛け金が弾2個で、勝ったら弾丸10個が手に入りますよ。どうです？　やりませんか」
▼サイコロ賭博（とばく）をやる ——————— ↓89へ ▼やらないで主人と話をする ↓113へ

80

「ひょえー。忍者となんて闘ったって勝てないよー」
オレは、我ながら情けないがくるりと向きを変えて逃げ出した。
「ふっふっふ。逃がさんぞ」シュッと風切る音が聞こえたかと思うと、次の瞬間忍者は目の前に現れていた。
「ひえー」また180度回転する。
「ぎゃー」また前に現れた。だめだ。逃げられない。闘うしかないのか。

「ちくしょうー。闘ってやるぜ。忍者だろーがよーしゃしねーからな。覚悟しろよー！」

「ふ。虚勢を張りおって。目に物見せてくれるわ」

↓90へ

81

「おう、買ってくれるか。にいさんふとっぱらだねえ。おいら好きだなぁ、そういうの」

「いいから、いいから……その情報ってやつを教えてよ」（弾丸15個マイナス）

「悪ぃ悪ぃ。あんな、よく聞けよ。この城下町に的屋があるだろう？　あの店はゴエモンが捕まってからできたんだ。どうやらそのワルダーって奴に関係があるらしい。賭博もイカサマらしいな。的屋の主人を絞ってみな。何か役に立つかも知れねえぜ」

「ふーん。そうか。的屋が……。分かった。あんがと」

↓101へ

82

「やあ、ご苦労だったねえ、コナミマン君。それにゴエモン君も。ちょうど先程コナミレディもシモンを助けて戻ってきて、第二の目的地、マイキーワールドに旅立ったところじゃ。悪いが、きみたちも休んだら第二の目的地、コングワールドに向かってくれたまえ」

「教授、あの次元転送機、無茶苦茶な苦痛があるじゃないですか！」

「そうでござるよ」オレがシナモン教授に苦情を言うと、ゴエモンが相づちを打った。

「そうかね？　別にコナミレディは何も言ってはおらんかったがのう……女の子のコナミレディさえ……」
「あ、教授、冗談ですよ、冗談。オレがあんなもので弱音を吐くわけないじゃないですか。気にしないでください」
「そうでござる」オレは教授の台詞を途中で奪い取って、笑ってごまかした。ゴエモンも全く同じ反応をする。こいつもお調子者らしいな……。オレはゴエモンに対して親近感を感じた。
「そうか、それはよかった。それじゃあ休んだら、コングのことを頼んだよ」
「「はいっ！」」
（ここで体力ポイントか、または弾丸を補充することができる。補充できる数は15ポイント。弾丸だけ15ポイント増やしてもいいし、コナミマンとゴエモンの体力を5ポイントずつ増やして、弾丸を5ポイント増やしてもかまわない。ただし、体力ポイントは30より多くすることはできない）

↓200へ

81～83

83

「おーしおーし、あんちゃんふとっぱらだね。これがバナナの束だ。持っていってくんな」
武具店の主人はいきなり機嫌よくなってオレの肩をぽんぽんと叩くと、バナナの束を渡

してくれた。なんだか妙に重たいバナナの束だ。しかしこんなの武器になるんかいな。本当に。**（コングの武器として、バナナの束入手。弾丸25個マイナス）**

↓105へ

84

「あー災難だった。こりゃあ並太抵のことじゃ城に入ることはできないなあ。いったん町へ行くことにしよう。町で何か情報を入手することができるかもしれないし、気分を変えて挑戦してみれば城にも入れるかも知れない」

オレは町へと向かった。

↓92へ

85

「くそー。すげー痛いじゃんかよー」

なんだかぐにゃぐにゃした空間を通ったかと思ったら、次の瞬間オレは教科書やテレビドラマでお馴染みの江戸の町に降り立った……つもりだったんだけど、こけてしまった。それにしても次元移動中の苦痛はすさまじいものだった。教授はあんなに痛いなんて言わなかったじゃないか。これから何度も味わうことになるかと思うと憂鬱になるなー。

さて、と、気を取り直してゴエモンを助け出さなければ。情報によればゴエモンは城に閉じ込められているはずだ。城はここから見える。このまま飛び込む前にこの城下町で情

報を集めるのもいいかも知れないな。

▼城へ向かう ――――――――↓115へ
▼情報集めをする ――――――――↓103へ

86

オレは見張りの侍がひとりで巡回してくるのを待ち、飛びかかった。
「きさま、何者だ！ ……なにをする！」侍が剣を抜こうとする。
「でやっ、させるか」剣をにぎりかけた手にキックをお見舞いする。そして、左のジャブで牽制してから右ストレート！ 見事にワンツーパンチが決まった！
侍がダウンすると、オレはそいつの服を奪って着た。侍が風邪をひくかも知れないが、そこまで気にすることはない。
「よし、これで侍に変装できたぞ。これで入り口から入れるだろう」
オレは完璧に変装したことを確認し、入り口へと向かった。

↓98へ

87

この町の医者に来るのは初めてだったっけ？

▼初めて ――――――――↓99へ
▼前に来たことがある ――――――――↓107へ

88

城には厳重な警戒がしかれてあった。ひとつしかない入り口にも見張り番が何人もいて中に侵入できないようになっている。

忍者に再び的屋の主人の格好をさせると、オレはその従者のふりをして中に入った。

「ほら、成功したじゃないか」

城内で、見張りの目の届かないところに入るのを待って、オレは忍者に耳打ちした。忍者は裏切りによって殺されるのではないかという恐怖で震え上がっている。

「元気を出せ。ゴエモンを助けだしたらすぐに自由にしてやるから」

その時、ひゅんと風を切る音が聞こえた。……そして、忍者の声を再び聞くことはなくなった。

忍者の喉で、深々と突きささった風車が回っていた。

↓122へ

89

「それじゃあ、入ります！」

主人は振り壺を取ると、サイコロふたつを投げ込み、それを伏せた。

「さあ、お客さん、丁か半か、どちらにしますか？　え？　丁と半が分からない？　だから素人は困るんだよなあ。丁は偶数のことで、半が奇数のこと。この壺の中のふたつの

サイコロの目の合計を予想するんですよ」

▼丁にする――――――――↓109へ▼半にする――――――――↓119へ

90

オレは忍者を目の前にして身構えた。忍者は動きが素早い。並の攻撃では勝てないだろう。いったいどう闘ったらいいだろうか。

▼いったん逃げるように見せかけてフェイントをかける――――↓135へ

▼なんでもいいから、がむしゃらに突っ込む――――――↓95へ

91

「なんでえ、買わねえのかい？　いけねえよ、そりゃあ、考え直したほうがいいぜ。……考え直さない？　……だめだな、そりゃあ、お前ぇにゴエモンを助けるなんてできっこねえぜ。おらおら、買わねえんなら帰った帰った」

情報屋の主人は、買わないと言ったとたん態度を豹変させた。なんだかよく分からんがこれが江戸っ子ってもんかも知れない。まあいいや。オレは情報屋を後にすることにした。

↓101へ

92

城から町中に戻る途中、どうやら城からやって来たらしい馬に先を越された。馬に乗っていたのは侍で、馬はオレを抜かしてそのまましばらく走ると、的屋の前に止まった。侍は的屋に入ると、すぐにまた出てきて馬に乗り、城へと戻っていった。侍は賭博をやりに来たわけでもなさそうだし……あの城と的屋は何か関係があるのだろうか……。

↓103へ

93

確か近くの川に小さな船があったな。あれをうまく見張りに見つからずに使えたら、堀を泳がなくてもすむな。まだ少し寒い時期だし、できれば泳ぎたくないよなー。さすがに船なんか運ぶのは大変だろうし、見張りに見つかってしまう可能性も高い。どうする？

▼船を運んでくる ————↓127へ
▼泳いで堀を越える ————↓114へ

94

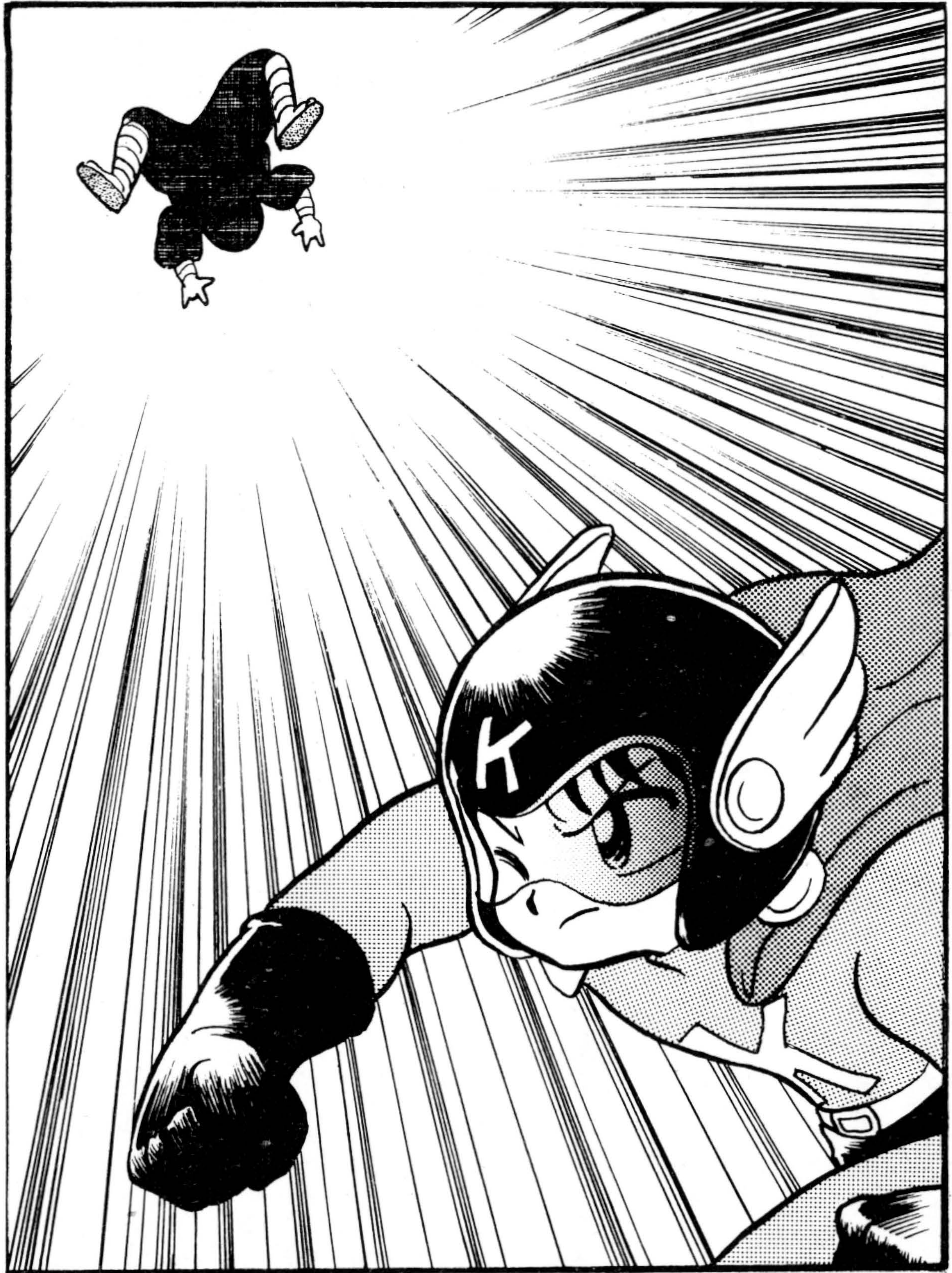
「よし、それじゃあお前、城を案内してくれ。お前があの城でゴエモンを閉じ込めてるやつの仲間だって事は分かってるんだ」

「そ、それだけは勘弁してください。私が殺されてしまいます」
「ほう……もう1発喰いたいらしいな」
「わ、分かりましたよ……だけど忍者に素手で殴りかかる奴なんて普通いないよなー」
「なんか言ったか？」
「い、いえ、なにも。それじゃあ城に向いましょう」
忍者はすでにオレのことを恐れている。はっはっは、当然のことさ。これで城に行くことができるぞー。ゴエモンを助けるのも近い！

↓88へ

95

「でやぁーっ」
オレは、こんな攻撃をしてくるとは予想もしてなかった忍者の驚き顔に、渾身の力を込めた右拳を叩き込んだ！
「どひゃー」
忍者は情けなくも悲鳴を上げて後ろにふっ飛ぶ。
どんなもんでえ。オレは強い！
「ま、待ってください、待ってください、なんでも言うことを聞きますから……」
さらに攻撃してとどめを刺そうと思ったが、思い留まることにした。どうやらこいつは



95▶「でやぁーっ！」オレは、忍者の驚き顔に、渾身の力を込めた右拳を叩き込んだ！

96〜97

役に立ちそうだ。

↓94へ

96

変装しようにも服も何もないので、仕方なくオレは手近の家に侵入すると、服を拝借した。拝借したんだよ、用が終わったら後で返すよ。多分。正義の味方たるこのオレがこんなことをしなければならないとは……良心が痛むぜ。こら、この本を読んでるお前、信用してないな。まあいい。今はとにかく城に侵入するのが先だ。

――お見せしたい商品があるのです。こう言って商人のふりをしたオレは、簡単に城内に入れた。これで後はゴエモンを探して助け出すだけだ。

ヒュッ！　もう必要ないだろうと思って変装を解いたオレの顔のすぐ脇を、何かが空を切って飛んだ。頬（ほお）をかすめて柱に突きささったそれは、風車だった。

↓122へ

97

「そうだよそーだよ。そーでなくっちゃいけねえ。うちは武器屋なんだからな。ほれ、まねきねこを持っていけ」

武具店の主人は買うと言ったとたんに機嫌よくなって手に乗るくらいの小さなまねきねこを渡してくれた。**（ゴエモンの武器として、まねきねこ入手。弾丸25個マイナス）**

しかしこんなものを武器にするゴエモンってのはどーゆーやつなんだろーなー。

↓105へ

98

「ややっ、くせもの！」

これで余裕で入れるな。そう思って入り口にやってきたのだが、そこにいた見張り番はオレの顔を見てそう言った。なんでやー。

「待てよおい、仲間、仲間じゃないか」警戒してる見張り番にこう声をかけてみる。

「何が仲間だ、そんな変な仮面をつけた侍がいるわけがない！　そこに直れ！」

しまった！　仮面をつけたままだったんだ。いつもつけてるんで、メガネじゃないけど顔の一部のようになってしまって気がつかなかった。こりゃやばい、逃げろ！

「あ、こら、待て！」ひえー、おっかけてくるよー。この侍の袴走りづらいよー。くそ、脱いじゃえ。……オレは足を絡めそうになりながら袴を脱ぐと、追ってくる侍に投げつけた。追っ手も袴なので早く走ることはできないようだ。いつもの服装に戻ったオレは、簡単に追っ手から逃れることができた。

うーん、これじゃあ変装の手はもう使えないなあ。堀から侵入してみることにしようかな。——どうしよう。

▼堀から侵入する ———————— ↓93へ
▼しない ———————— ↓84へ

99

「そうでっか……ゴエモンさんを助けにねえ……残念ですが私は役に立ちそうな情報を持っちゃいねえですよ。でも喜んで協力させていただきますよ。この弾丸を持っていってくださいよ。がんばって一刻も早くゴエモンを助け出してくださいよ」
いやー、医者にこの世界に来た訳を話してみたら、弾丸をくれた。**(弾丸5個プラス)**ふとっぱらだなー。得しちゃったぜ。

↓112へ

100

しかし矢八は今にも斬ってくる。どうやって逃げたらいいんだ。

▼とにかく剣をよけ、フェイントをかけて逃げる ———————— ↓130へ
▼闘うと見せかけて逃げる ———————— ↓140へ

101

さて、情報屋を出て、次はどうするか。
とりあえず、武具でも買いに行こうか、それとも…？

▼武具店に入る ――――――――――↓141へ▼的屋に入る――――――――――↓79へ
▼医者に入る――――――――――↓87へ▼城に向かう ――――――――――↓115へ

102

「ゴエモン！」オレは思わず声を上げた。なんと、そこには小さなおりがあって、その中にゴエモンが閉じ込められていたのだ。
「待ちたまえ、コナミマン君」
とっさに駆け寄ろうとしたオレの前に、ひとりの男が立ちふさがった。その男は、じじいと男たちを部屋から下がらせた。部屋の中はオレとゴエモンと3人だけになった。
「誰だ、お前は！」
「この江戸の町を支配しているのはこの俺、度留形(ドルガタ)平次様だ！」
「な、なんだとおっ！」
↓132へ

103

町には色々な店がある。どこかに入って話を聞いてみることにしよう。
▼武具店に入る ――――――――――↓141へ▼的屋へ入る――――――――――↓79へ
▼情報屋に入る ――――――――――↓136へ▼医者に入る――――――――――↓87へ

104

オレは構わず前の般若面男に突進して行った。
「ふ、退治してくれよう桃太郎！」
しかし、それは全くの自殺行為でしかなかった。般若面男はゆっくりと剣を振ったがなぜかオレはその攻撃をよけることができなかったのだ。まるでハエがとまりそうで全く下手そうに見えるその攻撃に……む、無念だ……。

GAME OVER

105

「ついでだから教えてやるが、となりの情報屋の情報は買っておいたほうが得だぜ。その後は的屋に行ってみな。どうもあんがとな」
オレは武具店を後にした。

↓121へ

106

「きさま、ゴエモンを諦めて逃げるのか！」
巨大度留形平次は、オレが背中を向けたのを見て驚きの声を発した。ここでオレが逃げるとは全く想像していなかったらしい。そしてその驚きは、オレが求めていた隙を生んだ。

オレは振り向きざまにパンチを放った。一撃必殺の威力を誇るパンチは、巨大度留形平（ドルガタ）次の身体が壁を破るくらいにふっ飛ばした。
大地をゆるがして倒れた度留形（ドルガタ）平次は、二度と起き上がることがなかった。➡134へ

107

さっき弾丸をくれた医者は、今度は閉まっていた。なんでえ。またなにかもらえるかと思ったのに。それじゃあどうしようかな。

▼武具店に入る――――➡141へ▼的屋に入る――――➡79へ
▼情報屋に入る――――➡136へ▼城へ向かう――――➡115へ

108

よし、この隙に逃げよう！　オレはこれをチャンスと見て取ると、四つん這いになって仲間割れしている間をすり抜けた。
「奴が逃げたぞ！」男たちのひとりが、俺が逃げ出したことに気づいて叫んだ。しかし、もう遅いんだよ！。へっへっへ。オレはそのまま走り、正面にあった扉から部屋に入った。
「あっ！　その部屋は……」うろたえた男たちの声が聞こえてくる。
そして、オレは小さなおりに閉じ込められたゴエモンを発見した。

男たちが中へどやどや入ってこようとすると、太い声がそれを止めた。
「ええい、こんな子供ひとり捕らえられん愚か者どもが、入ってくるでない。こいつは俺が倒す！」
その声が発したひとりの男が、俺の前に立ちはだかった。
「オレは度留形（ドルガタ）平次だ。ゴエモンは渡さん」

↓132へ

109

「お客さん残念でしたねえ。サイコロの目は半。はずれです」（弾丸2個マイナス）
的屋の主人は振り壺を開けて言った。くそ。

↓125へ

110

オレは的屋を後にした。さあ、次はどこに行くことにするかな。

▼武具店に入る ——↓141へ
▼情報屋に入る ——↓136へ
▼医者に入る ——↓87へ
▼城へ向かう ——↓115へ

111

「なんでえ。買わねえのかよ。しけたやろーだなぁ。ひやかしだけなら早く帰ってくんな。

商売の邪魔でい！」
「ひょえー」
武器を買わないと言うと、すさまじい剣幕で追い出されてしまった。

↓121へ

112

「しかし、あんたけったいな格好してるねえ。それが最近の流行なのかい？　でも趣味悪いっすよ」
医者は、オレの姿をしみじみと眺めてそう言った。くそっ。余計なお世話だ。オレはこの姿が気に入ってるんだい！
オレは医者に礼を言うと、外へ出た。次はどうしようかな。

▼武具店に入る――――↓141へ▼的屋に入る――――↓79へ
▼情報屋に入る――――↓136へ▼城へ向かう――――↓115へ

113

主人と話す前に、オレは情報屋で主人の情報を買っているか？

▼買っている――――↓131へ▼買っていない――――↓123へ

114

「ぎょ……ぎょえー」と叫び出しそうなところを慌てて押さえた。もう春も近いってのになんでこんな水がつめたいんだよ！。こんなんありかよ。
しかし今引き返すわけにはいかない。ちょうど巡回がやって来てしまったのだ。このまま泳いで渡るしかないな。
ざばっ！　目の前で水しぶきが上がった。なんだ？
水をかくオレの足に何かが当たった。水を透かして影が見える。動いている。巨大な何かの影——円を描いて影がオレの回りを回る。目の前の水が盛り上がった。黒い三角形のものが水面に現れる。
「うぎゃー、な、なんでこんな堀にサメがいるんだ！」オレはとうとう叫んでしまった。見張りが駆け付けてくる音が聞こえる。前にはサメ、闘って勝てるはずはない。まだ岸からあまり離れていなかったのを幸いに、オレは水から上がった。

↓129へ

115

さて、城までやって来たが、どうやって入ったらいいだろう。ひとつしかない出入口は見張りが厳重で、そのほかは広くて深そうな堀によって阻まれている。

物影に隠れて見張りの目から逃れているのもそう長くは続かないだろう。巡回しているのでそのうち見つかってしまう。早く作戦を決めて実行したほうがいい。

▼堀をなんとかして越え、石壁から中に侵入する――――↓93へ

▼町人か侍に変装して、見張りをだまくらかして中に入る――――↓139へ

116

逃げようと思うが、すっかりと四方八方を囲まれている。透き間を目指して駆け抜けようとすると、すぐに透き間に新しく変な奴が増える。全く逃げられない。

▼闘って強行突破する――――↓104へ▼しばらく様子を見る――――↓124へ

117

素手でだが、矢八を迎え撃とうと決心したその時だった。

「これ、矢八よ、待ちなさい」突然矢八の向こうから声が聞こえた。脳天気な老人の声だ。

「なんだ、あのじじい」オレは思わずそう言った。

「なんだとこのガキ！」

それを聞いて、矢八が怒った。続いて老人の回りにいるふたりの男が台詞(せりふ)を言い始める。

「ひかえおろう！」「このお方をどなたと心得る」「先の副将軍」「水戸納豆光國公にあらせ

１１６～１１７



117▶　「ひかえおろう！」「このお方をどなたと心得る」
「先の副将軍」「水戸納豆光國公にあらせられるぞ！」

られるぞ」ふたりの男は交互に叫ぶと、最後に声を合わせて言った。
「ひかえおろう！」
中央のじじいは、かっかっか……と脳天気に笑っている。オレはあれくらいの台詞(せりふ)ひとりで言えよなー、と考えていたが、矢八が怒るので口には出さなかった。
どうやらこのじじいたちはオレを平伏させようとしてるらしいが……どうする？
▼恐れ入って平伏する ——— ↓128へ ▼気にせずに闘う ——— ↓138へ

118

「うわー」オレは叫びながら逃げ回った。走りながら部屋中に目を走らせる。なにか武器になるものはないか……。
しかし、オレの判断は所詮(しょせん)無理なことだった。巨大度留形(ドルガタ)平次はその大きさによる巨大な歩幅でどんどん近づいてきて、オレに逃げられる訳がなかったのだ。
オレは、奴の持つ巨大な剣の餌食になってしまった。

GAME OVER

119

「お客さん残念でしたねえ。サイコロの目は丁。はずれです」**（弾丸2個マイナス）**

的屋の主人は振り壺を開けて言った。くそ。

↓125へ

120

矢八が現れたところからちょっと進んだら、また変な奴が現れやがった。女のように派手な着物を着て、般若(はんにゃ)の面をかぶったごつい男が、薄布で頭を覆っている。
「ひとーつ、人の世の生き血をすすりぃ、ふたーつ、ふらちな悪業ざんむわい!……」
な、なんだなんだ、この変態男は……。オレがひるんでいると、後方から馬の蹄の音が近づいてきた。
「暴れんぼう将軍登場!」馬に乗った男はそう叫ぶと、そのまま走っていってしまった。
「なんなんだ、いったい……」

↓142へ

121

さて、武具店を出たけど、次はどうしようか。武具店のとなりには情報屋があるけど……賭博(とばく)のできる的屋も向かい側にある。

▼的屋に入る――↓79へ ▼情報屋へ入る――↓136へ
▼医者に入る――↓87へ ▼城へ向かう――↓115へ

122

「誰だっ！」オレは風車が飛んできた方向に叫んだ。
「ふ。そういうお前こそ何者だ。けったいな格好しやがって。……俺はこの城の用心棒、風車の矢八だ！」
「うるさいっ！　人がどんな格好しようと勝手だろ。オレはコナミマンだ」
「コナミマン？　変な奴だな。……まあそんなことはどうでもいい。この城に侵入してきた奴はこの俺が斬る！」
矢八は剣を抜いて向かってきた。どうする？

▼闘う ——————➡117へ▼逃げる ——————➡100へ

123

「なんだあ？　話をしろだあ？　お前ぇここをどこだと思ってやがんでぇ。情報が欲しいんだったら情報屋に行きゃあいいじゃねえか。ここは賭博(とばく)をやるところだ。ばかにすんじゃねえ。とっとと帰りやがれ」
的屋の主人は何か情報を教えてくれる気はないらしい。ばかにされたと思ってすごい剣幕で追い出しにかかってくる。とりつくしまもない。

➡110へ

124

様子を見始めると、すぐに事態が変わった。
「こいつは俺が裁くのだ」「いいや私だ、この遠山桜は正しい！」「桃太郎が斬ってくれる！」「いや、この仕事、われら仕事人に任せていただこう」「この長七郎のことを忘れてはおるまいか」「オレは次郎長だ」「親分、親分！」「がってんだい」……「暴れんぼう将軍登場！」……。
俺を囲んでる男たちは、誰が俺を倒すかで仲間割れを始めたのだ。そして、また馬が走ってきて駆け抜けていった。

↓108へ

125

「残念でしたねえ。もう一度やりますか？」
的屋の主人は、ニヤリと笑ってそう言った。どうする？

▼もう一度やる――↓78へ
▼もうやめる――↓133へ

126

オレは絶妙な素早さで度留形(ドルガタ)平次の股下をくぐりぬけた……と思ったのだが、ヤツの股下は思っていたよりも短かった。奴はこれ以上ないくらい完璧な日本人体型だったのだ。

股下をくぐりぬけるのに思ったよりも手間取り、蹴りを食らってしまった。**（コナミマンの体力ポイント、マイナス5）**

しかし、いったん背後に回ってからの勝負は、圧倒的にオレの方が有利だった。オレは、ためらうことなく必殺のパンチを放った。巨大度留形（ドルガタ）平次はオレの一撃をくらい、壁を破ってふっ飛んだ。……そして、二度と起き上がることはなかった。

↓134へ

127

ぜえはあ、ぜえはあ……。なんとか船を運んでくることができた。見張りにも見つからなかったからよかったんだけど、やっぱり船をひとつ運んでくるというのは疲れる。思いっきり体力消耗してしまった。**（コナミマンの体力ポイント、マイナス3）**

さて、と、見張りがやってこないうちに堀を渡っちゃおう。

なるべく音を立てないようにしなきゃいけない。見張りに見つかったらやばいもんね。そおっとそおっと、船をこいでゆく。……よかった。見張りに気づかれることなく石壁までたどりつくことができた。次の問題は、この石壁を登ることだ。

↓137へ

128

「へへーっ！」オレは慌ててじじいの前に平伏した。

「それでいいのだ。かっかっかっか……」じじいはかんに触る声で笑った。
「飛車さん、角さん、この子供を度留形（ドルガタ）の親分の所まで連れてゆきなさい」
「はっ」「はっ」男たちはステレオでじじいに答えると、オレを両側から押さえて歩き始めた。どうやらオレを度留形（ドルガタ）の親分とか言うやつのところに連れていこうとしてるらしい。
度留形（ドルガタ）とは何者だろう……そう考えている間に、オレたちはある部屋にやってきていた。
そして、そこにいたのは……。

↓102へ

129

足を水面から離した直後、サメの巨大な鼻面が水面に現れ、ずらりとキバの並んだあごが噛み合わされる。ひょー、危機一髪。
「何者だ、そこへ直れ！」やばい、見張りが来た。ここはひとまず逃げよう。
「待てっ！」オレは後ろを振り返ることもなく疾走した。見張りの声は段々小さくなってゆく。見張りの姿――羽織り袴（はかま）では、このオレの速さについてこられないのだ。
見張りを充分に引き離し、オレはやっと安心することができた。ああ、疲れた。**（コナミマンの体力ポイント、マイナス2）**
近くの川から小船を運んできて再度堀に挑戦してみるか？

▼挑戦する――――↓127へ▼しない――――――↓84へ

130

「ひょえっ！」
紙一重でなんとか剣をよける。
「あっ！」オレは矢八の後ろを指差して叫んだ。
「なんだ？」へっへっへ。引っ掛かった。オレは矢八が後ろを振り返った隙に脱兎のごとく逃げ出した。
「あ、こら待て！」矢八がだまされたことに気づいてオレを呼び止めたが、もう遅い。オレは逃げることに成功した。

↓120へ

131

「賭博（とばく）はやらない。オレはお前がイカサマをやってることを知ってるからな」
「なんだと……どこでそれを……いや、証拠はあるのか？」
「そのサイコロを見せてみろ」オレは精一杯ドスのきいた声を出すと、主人の手からサイコロを奪い取った。ニヤリと笑い、サイコロを嚙む。
「いでっ！」なんだよこのサイコロ、堅くって嚙んでも割れないじゃんか。
「どうかしたんですか？　早く証拠を見せてくださいよ」主人が勝ち誇って笑う。くそ。
「こんちくしょー！」かっとして台を叩きつける。ばきっ。

「げ」「やった！」主人とオレは同時に声を上げた。台の板が割れ、その下に数個のサイコロがあったのだ。これで丁半を操作してたに違いない。
「ほーら、どうした。証拠だぜ」オレは勝ち誇って笑う。
「そこまでばれてちゃ仕方がねえ。命は貰うぜ！」
的屋の主人は、突然たからかに笑うと衣服を脱ぎ捨てた。どじゃーん。次の瞬間主人は忍者の格好に早変わりしていた。

▼闘う――――↓90へ▼逃げる――――↓80へ

130～132

132

「お前がワルダー様に刃向かうものだということは分かっている。ゴエモンは渡さん。奴を助けたくば俺と闘え、俺を倒すことができたらゴエモンは自由にしてやろう」
度留形平次（ドルガタ）はそう言うと、剣を抜いてこちらに歩みよって来た。その身体がどんどん大きく膨れ上がってゆく。奴の着ている羽織り袴が膨れ上がる身体に対応しきれなくなり、はち切れてしまう。
「ひょえー……」オレは思わず見入ってしまった。度留形平次（ドルガタ）が身長3メートル以上あるモンスターに変化してゆくさまは、SFX映画が足元にも及ばない臨場感たっぷりのものだったのだ。



132▶　度留形(ドルガタ)平次の身体がどんどんと膨れ上がってゆく。羽織り袴(はかま)が対応しきれなくなり、はち切れてしまう！

「コナミマン、ゆくぞ、覚悟しろ」巨大度留形平次はどこからか巨大な剣を取り出し、覆いかぶさるようにして襲いかかってきた。
どうやって闘ったらいい？
▼度留形平次の股下をくぐり、背後から攻撃をかける——↓126へ
▼この部屋に武器がないか探し、見付けたらそれで闘う——↓118へ
▼ゴエモンを諦めて逃げるように見せかけ、不意を突いて倒す——↓106へ

133

「そうですか。ありがとやんした。いつでもお越しください。これからも「ろんろん」グループをよろしく」——↓110へ

134

がちゃり。オレは度留形平次の死体から牢の鍵を探し出し、ゴエモンを救出した。
ゴエモンは、最初なぜオレが彼を救ったのかが分からなくていぶかしんでいたが、オレがシナモン教授に託された使命とワルダーの野望を話すと、協力を快く承知してくれた。
話をしている間に、度留形平次の子分たちがやってくる物音が聞こえてきた。この世界での目的も果たしたことだし、オレは通信機でシナモン教授に連絡を取ると、次元転送し

てもらった。
「ひえーっ！」「うぎゃーっ！」子分たちが駆け付ける中、オレとゴエモンは音声多重で叫びながら次元転送された。

↓82へ

135

オレは早速作戦を実行に移した。逃げるように見せかけて……振り返る。
「あ…あれ？　なんで忍者さんこっちにいるんだよ。フェイントかけたんだから引っ掛かってくれなくちゃ困るじゃないか」
「あほかお前は」ばきっ！
「ぐえっ！　くそー、力いっぱい殴ったなー。痛ぇじゃねえか。そっちがその気ならこっちにも考えがあるぞ。覚悟しろよ！」**（コナミマンの体力ポイント、マイナス3）**
怒ったオレにとって、忍者は敵ではなかった。「ま、待ってください、なんでも言うことを聞きますから…」

↓94へ

136

「そうか、ゴエモンを助けようってのかい。うん、いい情報があるよー。弾丸15個と交換するけど、その情報、買うかい？」

情報屋に入ってみると、妙に陽気なおやじがこう言ってきた。どんな情報かは、買ってみないと分からない。どうする？　買ってみるか？

▼買ってみる――――↓８１へ
▼買わない――――↓９１へ

１３７

うんせ、うんせ……。石と石の間のわずかな透き間に手と足をかけ、少しずつ登ってゆく。こんなとき忍者だったら楽なんだけどなあ……。
「あれ？　透き間がない……」がちょーん。何と石壁の上のほうには透き間が全くと言っていいほどなかったのだ。これじゃあ登ることなんてできないじゃないか。
　ずり、ずりずりずりずり……。
「うぎゃーっ！」手が痺(しび)れて透き間につかまってることができない！　オレは石壁を滑り落ちてしまった。……ざっぱーん。
「何者だ！」うわっ、見張りに見つかっちゃった。早く逃げなくちゃ。オレは全速で堀を泳ぎ渡り、なんとか見張りがやってくる前に逃げ出すことができた。

↓８４へ

１３８

オレは横で頭を下げている矢八の腰から剣を抜き取った。

「な、なにをする！」矢八はうろたえた。
「水戸納豆だかひきわり納豆だか知らねえが、オレの邪魔するんだったらたたっ斬ってやる！」オレはじじいと矢八に交互に剣を向けて威嚇しながら言い放つ。
「やめろ、このお方はこーもんさまにあらせられるぞ！」ステレオで声が聞こえてきた。
「知るか！」オレはここにいた4人をばったばったと斬り倒し、血で汚れた剣を捨てて先を急いだ。

↓120へ

139

では、どちらに変装しようか。

▼町人に変装する――――↓96へ
▼見張りの侍に変装する――――↓86へ

140

「くそー、やってやるー！」
オレは矢八に向かって走った！
「いい度胸だな、とうっ！」うわー、こいつ全然ひるまないよー。オレはなんとか剣をよけると、作戦失敗と判断して逃げ出した。……いや、逃げ出そうとしたのだが、矢八は思ったよりも素早くそれを察知し、俺の前に回り込んできてしまった。くそ、逃げられない。

闘うしかないのか。

↓117へ

141

「あんだぁ？　何か情報をくれだぁ？　うちは武器屋だぞ。そんなこたぁとなりの情報屋に行って買え！」

「そうですか。それじゃどうも」

「おいこらっ！　おいらをばかにしとるんか？　武器買ってけよ、おい」

「そうですねぇ。どんな武器をおいてるんですか？」

「おう、まずはまねきねこ。これをゴエモンが持つと小判を投げられるようになんだぜ。それと、バナナの束。こいつを投げて敵をやっつけることもできるんだぜ。価格は両方とも弾丸25個だよ。どうだい？」

▼まねきねこを買う──────────↓97へ

▼バナナの束を買う──────────↓83へ

▼どちらも買わない──────────────────↓111へ

142

次に現れたのは、なんだか足より50センチくらい長い袴(はかま)をはいたふたり組。それぞれこんなことを言い始めた。



142▶　かんざしを手で回すやつ。しゃみせんの弦を鳴らすやつ…etc。いつの間にやらオレは囲まれてしまっていた。

「お前ぇは見てねえって言っても、この、遠山桜が見てるんでい！」
「大岡越前守さま、おなーりー。……一件落着！」なんだか意味の分からないことをぶつぶつ言うやからがどんどん集まってきた。いったいなんなんだよー。
かんざしを手で回すやつ。しゃみせんの弦を鳴らすやつ。影の軍団、と書かれた旗を背負ってるやつ……いつの間にやらオレは囲まれてしまっていた。
▼闘って強行突破する ——→104へ▼逃げる ——→116へ
▼しばらく様子を見てみる ——→124へ

143

「わしにダメージを与えるなど、こしゃくなやつめ。覚えておれ！」
ドラキュラは捨て台詞を残すと、コウモリの姿でどこへともなく飛び去った。
わたしはふと、ドラキュラが眠っていた棺桶の中を見た。
「あら、この鍵は……」中には、ひとつの大きな鍵があった。
「この鍵がきっとシモンさんを閉じ込めてる鍵ね。土で汚れてる……やっぱりシモンさんは洞窟に閉じ込められてるんだわ！　早く洞窟にいかなきゃ！」
　わたしは洞窟に今まで行ったことがあるか？
▼ある ——→159へ▼ない ——→188へ

144

あれぇ。この通路もまたふたまたに分かれてる。迷っちゃったのかしら。今度はいったいどっちに進んだらいいのかしら。……マイキー君にもそれは全く分からないと言うし、シモンさんも見当さえつかないと言っている。わたしが判断するしかないわね。

▼右に進む――――――――⬇158へ▼左に進む――――――――⬇162へ

145

シナモン教授のもとでちょっと休んだわたしたちは、すぐ次の目的地、マイキーワールドに飛んだ。

次元転送機によって送られてきた世界は、20世紀の海辺の片田舎という雰囲気の土地だった。ここからの眺めを見るかぎり、ワルダーの手が及んでいるとは考えられない。

すぐ目の前に洞窟の入り口でもある小屋が見える。シナモン教授から得た情報によれば、その洞窟の中にマイキー君は捕らえられているはず。わたしたちは不意に攻撃されないように警戒しながら、その小屋に入った。

⬇161へ

146

わたしはスケルトンに向かって突進した。スケルトンはすぐに自分の肋骨を外し、わた

しに投げつけた。――しかし、わたしはその攻撃を予想し、ジャンプしてよけた。
……つもりだった。
なんと肋骨はわたしの動きに合わせて飛ぶ方向を変えたの！　わたしはよけきることができずに、左足にダメージを受けてしまった。**（コナミレディの体力ポイント、マイナス5）**
「レディ！　大丈夫か！」シモンさんが駆け寄ってくるのが見えた。
「え、ええ。なんとか。これくらいだったら……」
シモンさんは、さらに攻撃を仕掛けようとするスケルトンにムチを走らせた。――すさまじい速さで衝撃を与えたムチはスケルトンの間接をばらばらにするほどの威力を持っていた。

↓170へ

147

「それじゃあシナモン教授のところに戻りましょう」
わたしがそう言うと、マイキー君が反対してきた。
「ちょっと持って。僕のパチンコがこの地下迷宮のどこかに隠されてるんだ。それを探し出してからにしたい」
早くシナモン教授のところに戻って次の目的地へ向かいたい。でも、マイキー君の武器を探し出すことができるならば、そのほうが有利だとも思う。どうしよう。

▼パチンコを探す ――――――↓193へ▼このままシナモン教授のもとへ　↓160へ

148

シモンさんは十字架を3発連続で怪物に向けて放った。**(弾丸3個マイナス)**
十字架の持つ聖なる力は、わたしたちの考えていた以上の効果をもたらした。
十字架が命中した3点を中心に、怪物はまばゆい光に包まれた。……そして、その光が徐々に消えてゆき、平常に戻ったとき、怪物がいた位置には元通りの海賊船の残骸があるだけだった。

↓168へ

149

「いやあ、ご苦労じゃった、レディ。それにシモン君と、マイキー君も。ちょうどさきほどコナミマンもふたり目の仲間、コングを助け出して戻ってきて、第三の目的地、イースター島へ向かったところなんじゃよ。
悪いが、充分に休みを取ったら次の目的地、地獄へ急いでくれ。そこで月風魔が待っているはずじゃ」
「はい、分かりました」
(ここで体力ポイントか、または弾丸を補充することができる。補充できる数は20ポイン

ト。弾丸だけ20ポイント増やしてもいいし、コナミレディとシモンとマイキーの体力を5ポイントずつ増やして弾丸を5ポイント増やしても構わない。ただし、体力ポイントは30より多くすることはできない）

↓１６４へ

１５０

「ごめんなさい。こんな罠にかかっちゃって……」
「あら、そんなこと気にしないわよマイキー君、安心して」
マイキー君は落し穴に落ちてしまったことを気にしているらしく、さっきの分かれた道に戻る途中で突然わたしとシモンさんにあやまった。
「そうだ。お前のせいじゃない。お前は前に立って俺たちを危険から救ってくれたんだ。恥じることじゃない」
「ほら、シモンさんもああ言ってるじゃない。気にしないでいいわよ」
「うん。そうする」マイキー君もシモンさんの言葉には大いに力づけられたようだった。
わたしたちはさっきの分かれ道まで戻ってきた。今度は左へ進んでみる。

↓１６２へ

１５１

いくら暗視がきくといっても、こう真っ暗ではほとんど先なんか見通せない。洞窟は一

本道だから迷うことはないけれど、歩を進める度に響く靴音と時折響く滴の垂れる音がとっても不気味。早くシモンさんを助けられればいいのに。

洞窟は重そうな鉄扉に行き当った。わたしはすかさずさっき手に入れた鍵を鍵穴に差し込んでみた。

ぴったり。がちゃりと音がして錠が上がった。わたしは扉を開けて叫んだ。

「シモンさん、いますか！」

しかし、返事が返ってくるどころか、狭い牢獄の中には人の気配さえなかった。

その時、すさまじい殺気を感じた！　その方向に振り向いたが、それよりも早く、冷たく鋭利な刃物がわたしの首筋にあてられていた。

↓165へ

152

「シモンさんの言う通りよ。早く逃げましょう。シモンさん、頑張って」

わたしはマイキー君の手を引いて洞窟の出口へと急いだ。背後でシモンさんのムチの音が響く。――わたしとマイキー君が脱出した後、しばらくたってシモンさんが右肩から血を流して出てきた。**（シモンの体力ポイント、マイナス15）**

「シモンさん！　大丈夫？」わたしは思わず叫び、シモンさんに駆け寄った。

「ああ、大丈夫だ。こんなのかすり傷だよ」

「そんなこと言って。こんなに血が流れてるじゃない。わたしは看護婦の能力も持ってるんですからね！」

↓172へ

153

「お姉ちゃん、危ない」
マイキー君が突然わたしの身体を押した。そして、その直後、わたしの立っていたところになにか白いものが飛んできた。シモンさんも身体を低くしている。
なんと、飛んできたものは骨だった。ブーメランのようにわん曲した肋骨のようだ。
がちゃり、がちゃり……なにかがここに近づいてくる。
「スケルトンだ！　やばいよ、こいつ凄く強いんだ！」マイキー君が叫んだ。
洞窟の奥のほうから歩いてくるそいつは、名前の通り白骨だった。白骨が近づいてくるのだ。さっきの攻撃から見て、そいつが敵であることは間違いない。

▼闘う――――↓190へ▼逃げる――――↓163へ

154

洞窟はやがてふたまたに分かれた。右と左に進むことができる。通路を間違えて進むとどこへ行きつくのかは、マイキー君にも分からないということだった。

▼右に進む ――――――――― ↓195へ▼左に進む ――――――――― ↓162へ

155

敵は、いた。そしてさらに、その敵の向こうには小さなおりがあった。

「マイキー君！」わたしはおりの中の小さな人影を見て叫んだ。その人影はわたしの声に反応して顔を向けた。

――やっぱり！　そのおりに閉じ込められていたのは、予想通りマイキー君だった。マイキー君はわたしたちを見て一瞬いぶかしげな顔をしたが、すぐにこう叫んだ。

「僕を助けに来てくれたんだね。だったらそいつと闘う前に僕をこのおりから出して！　そいつは僕が倒したい！」

マイキー君はああ言っているけど、どうしよう。人間の身体に牛の頭を持つ奇怪な姿の敵はそのおりの前に立ちふさがっている。先に倒したほうがいいように思えるけど……。

▼先に敵を倒す ――――――― ↓189へ▼先にマイキー君を助ける ―― ↓197へ

156

わたしはイチかバチか、首飾りの十字架の力を試してみることにした。首飾りを外して、海賊船の怪物に投げつけた。

そして、奇跡は起こった。怪物に向かって飛ぶ首飾りは、その途中でまるで白熱するように輝きだし、怪物に届いた時まるで爆発したように光が炸裂した。
そして、そのまばゆい光が収まったとき、そこには元通りの海賊船の残骸があるだけだった。

↓168へ

157

しかし、闘うと言ったってどうやって闘ったらいいのだろう。この怪物とわたしたちでは、大きさに天地の開きがあるのだ。なにか飛び道具でも使わないことには、わたしたちは敵にダメージを与えることすらできないだろう。

▼シモンの武器として十字架を持っていて、それを飛ばして闘う　↓148へ
▼なにも飛び道具はないが、とりあえず向かっていってみる　↓185へ
▼なにもないので、やっぱり諦める　↓198へ

158

「きゃあ！」わたしは思わず悲鳴を上げてしまった。なんと、その通路の先には蛇の住みかがあったの。いくらわたしだって、何十匹もいる蛇は気持ち悪いわ。
わたしたちは今来た通路を逃げ戻りながら、追ってくる蛇たちと闘わなくてはならなか

った。蛇は幸いにも毒蛇ではなかったが、何回か咬まれてしまい、わたしたちはダメージをこうむってしまった。**(コナミレディ、シモン、マイキー3人の体力ポイントを、それぞれ2ポイントずつマイナスする)**

↓182へ

159

さっきの封印が解かれているかどうかは分からなかったが、そのままこの城にいても仕方がないので取りあえず洞窟に向かった。

闇夜の森を洞窟に向かって走るのは、なかなか背筋が凍るような気分だったが、途中に邪魔者が現れることもなかったので、すんなり洞窟の入り口までやってくることができた。

さっきの罠に気をつけながら洞窟の入り口を調べてみると、封印は解かれていた。わたしは警戒しながらも、洞窟に入っていった。

↓151へ

160

「大丈夫よ。もう3人もいるんだし。4人目の仲間を助け出すほうが先決よ」

「うーん。心細いなあ。いつもあれを使って闘ってきたから……」

「大丈夫、大丈夫。ねっ、早くシナモン教授のところに戻ろっ。ねえ、シモンさんもそう思うでしょ」

「あ、ああ」
「分かったよ。別にパチンコがなくたって闘えるもんね。お姉ちゃん、シナモン教授のところにいこう」
「うん。そうしよっ！」
わたしが通信機を取り出したその時だった。

↓１５３へ

１６１

小屋の中は、がらくたが転がっていて雑然としている。わたしはすぐに地下迷宮への入り口を発見することができた。
この地下迷宮は通路が狭いので、どちらかが先に入らなくちゃならない。
「俺が先に入ろう。何がいるか分からん。俺が前に立ったほうが安全だろう」
「どっちでもおんなじだわ。後ろから襲ってくるかも知れないし……」
「そうだな……それじゃあレディの意見に従うことにしよう」
どうもレディって呼び名が定着したみたい。……でも、どうしようかしら。
▼わたしが先に入る――↓１７７へ
▼シモンさんに先に入ってもらう↓１９４へ

162

しばらく進んでゆくと、また道が分かれていた。今度も先は右と左で、どちらもどんなところに続いているかは分からない。どちらに進む？

▼右に進む ―――――― ↓178へ
▼左に進む ―――――― ↓144へ

163

「待って、このままあいつに背中に見せたら骨を投げて攻撃されるだけだよ」
「それじゃあどうやって逃げたらいいの」
「僕に任せてくれれば大丈夫だよ」マイキー君は自信たっぷりに笑った。
「それは危険だ。俺が後で守ろう。君たちが先に逃げてくれ」
マイキー君の言葉を聞いて、シモンさんが反論した。ふたりで意見が分かれてしまった。
いったいどっちにすればいいんだろう。

▼マイキー君の意見 ―――――― ↓173へ
▼シモンさんの意見 ―――――― ↓152へ

164

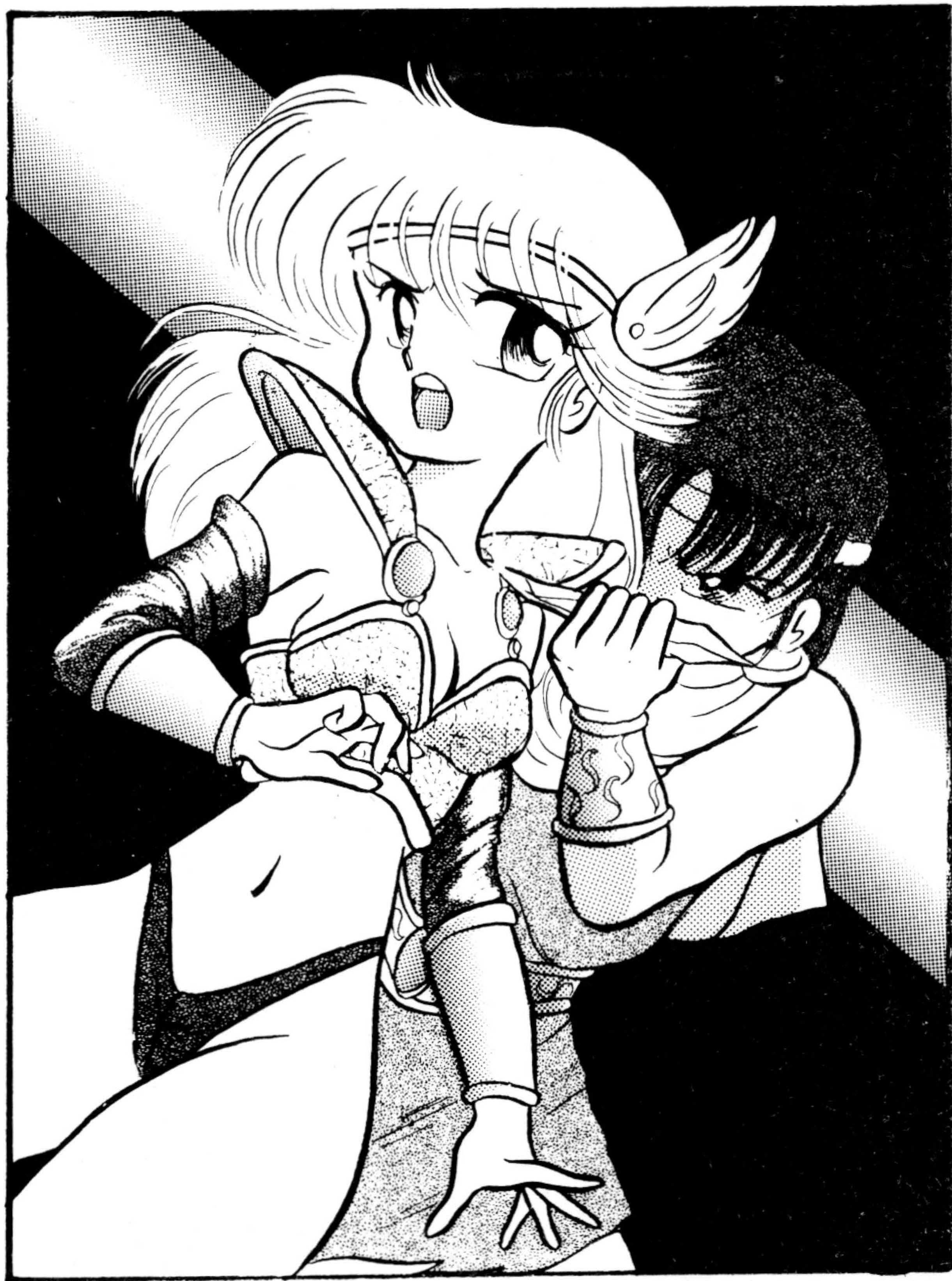
第三の目的地。そこは、まさしく地獄だった。大気には妖気が渦を巻き、雲のない空が見えない。地は起伏が激しく、平担な地が見当らない。歩を進める度にいやらしい昆虫が

がさがさと逃げて行く。
本当に血の池なのかは分からないが、あちこちに真っ赤な液体を溜めた沼のようなものがある。とげとげしい竹ばかりが生えている山も見える。あれがさしずめ針山というところだろう。鬼が群れているということこそないが、日本の地獄絵にかなり重なるイメージがある。ああいった地獄の世界をひろめた人は、本当にここにやってきていたのかも知れない。

↓１７６へ

１６５

「きゃっ！」わたしはその冷たさに思わず声を上げてしまった。
「女か。誰だ、ドラキュラではないのか？」
「あなたがシモンさんなの？　わたしはコナミレディ。あなたを助けにきたのよ」
「おれを助けに……？　本当なのか」
「地球はワルダーに狙われているわ。ワルダーの魔力でドラキュラも復活したの。みんなで力を合わせないとワルダーを倒すことはできないわ」
「そうか。きみを信じよう」シモンさんはそう言うと、わたしの首から刃物を外してくれた。見てみると、ひじょうに長い時間をかけて石を削り出したものらしかった。
「力を合わせるだと、そうはさせんぞ！」ほっとしたその瞬間、洞窟の入り口のほうから



165▶　「女か。誰だ？」「あなたがシモンさんなの？　わたしはコナミレディ、あなたを助けにきたのよ」

ばさばさという音が急速に近づいてきて、聞き覚えのある声がそう言った。
「ドラキュラめ！」シモンさんが恨みを込めた声で叫んだ。

↓１８１へ

１６６

わたしとシモンさんが戦闘態勢に入るよりもはるかに早く、マイキー君がパチンコで弾丸を飛ばしていた。
たて続けに放たれた3発の弾は、正確に餓鬼の腹部に命中し、餓鬼は悲鳴を上げると逃げていってしまった。**（弾丸3個マイナス）**
「さすがだな」シモンさんがマイキー君の肩に手を置いて言った。
「へへへ……」マイキー君は照れ笑いを浮かべる。

↓２７１へ

１６７

わたしが手伝ってなんとかしなくちゃ。このままじゃシモンさんがやられちゃう。
でもどうしたらいいのかしら。

▼ドラキュラの後ろに回りこんで攻撃する――↓１７９へ
▼ドラキュラの正面から直接攻撃する――↓２０１へ

168

怪物は十字架の持つ聖なる力によって完全に消え去ったようだ。わたしたちは警戒しながらもその海賊船の残骸に入ってみることにした。
海賊船のなかは、本当にあれ果てた残骸そのものだった。この中にパチンコが隠されているとは思えなかったけど、なんと、本当に発見することができちゃった！
宝物を集めた一室があったの。そして、その宝物の山の中にパチンコは隠されていたの。海賊船はもう怪物に変わることはないようだし、わたしたちはパチンコだけ取ってシナモン教授のもとに戻ることにした。その方が海賊の霊も安らかに眠れるに違いない。**（マイキーの武器としてパチンコ入手）**

↓180へ

169

ドラキュラは二度と起き上がることはなかった。わたしとシモンさんは改めて向かい合うと、自己紹介とともに握手した。
シモンさんはふと思いついて、ドラキュラの遺骸のマントをどけてみた。
「やっぱり。俺のムチを持ってやがった。これさえありゃあ俺に敵はないぜ。さあ、さっき言ってたシナモン教授のところまで連れてってくれ。早く仲間を助けだしてワルダーを倒そう」

シモンさんはムチを腰につけると、そう言った。わたしたちはシナモン教授と連絡を取り、次元転送機で教授の研究所へと戻った。

↓１８６へ

１７０

「やったわ！」「やったね！」わたしとマイキー君で同時に歓声を上げた。

「すごいなあ、おにいちゃん。スケルトンを一撃でばらばらにした奴なんて見たの初めてだよ。こいつはアンデッドモンスターだから、呪いを解かないかぎり完全に倒すことはできないけど、これでしばらく動けないはずなんだ……でも、僕だってパチンコさえあればやっつけられたんだよ！」

「そうか……うん、それじゃあやっぱりパチンコを探しに行くことにしようか」

「えっ！　本当？」シモンさんの台詞(せりふ)に対しての、マイキー君の喜びようといったら……。

「分かったわ。探しに行くことにしましょう」わたしだけそれに反対する気にはなれなくなってしまったわ。

↓１９３へ

１７１

「あなたなら倒せるのね。分かったわよ。おりから出したげるから任せたわよ！」

シモンさんがやられてしまっては、マイキー君のいう通りにするしかない。わたしは彼

を先に救出するよう行動を開始した。

↓197へ

172

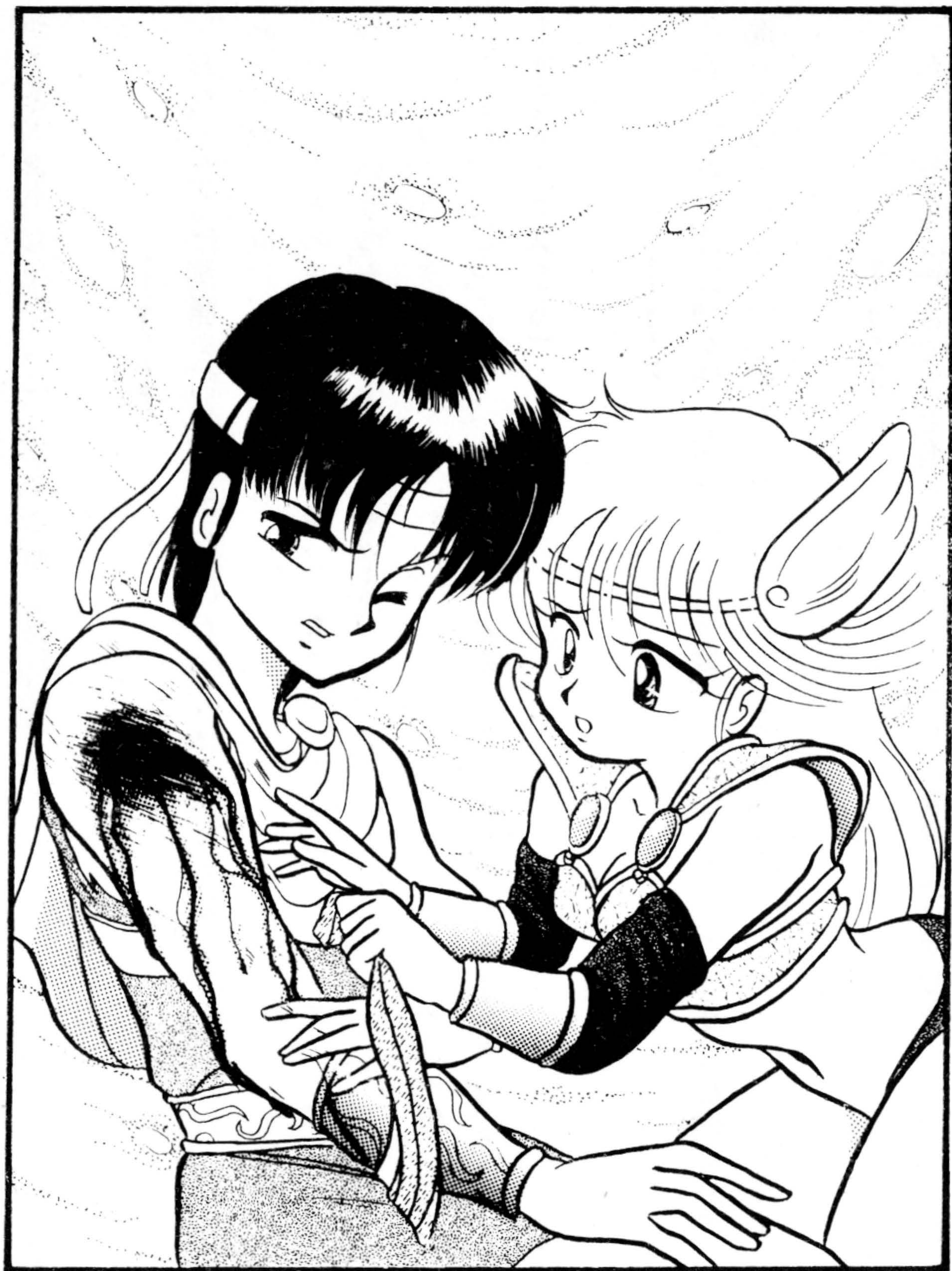
シモンさんの傷はかなり深かった。わたしは自分のバンダナを裂いて血止めに巻いた。
「早くシナモン教授のところにもどって治療しましょう」わたしは急いでシナモン教授と連絡を取り、次元転送してもらった。

↓149へ

173

マイキー君はわたしが危ないというのも聞かないで、スケルトンに向かっていった。
マイキー君は大丈夫だと言っていたが、とてもそうだとは思えない。私とシモンさんもスケルトンに立ち向かうことにした。
スケルトンは自分の肋骨を1本外すと、向かってくるマイキー君に投げた。マイキー君は反射的にパチンコを使う姿勢をとってしまった。……それで逃げるタイミングを外してしまった。マイキー君にスケルトンの肋骨が直撃した！ **（マイキーの体力ポイント、マイナス20）**
「マイキー君！　大丈夫？」わたしは思わず叫んだ。
「……うっ、うん。大丈夫だよ……」マイキー君はよろけながら答えた。しかしその答は、

172〜173



172▶　シモンさんの傷はかなり深かった。わたしは自分のバンダナを裂いて血止めに巻いた。

マイキー君のおなかににじんでる血を見れば分かる。

↓190へ

174

わたしたちは洞窟を引き返して逃げた。背後で大砲を撃つ音が響いた。海賊船の怪物がわたしたちに向けて撃ったのだ。

わたしたちのまわりで激しい爆発が起こる。直撃はしないものの、爆発によって小石がはじけ、いくつも身体に当たってくる。

かなり大きなダメージを受けたが、わたしたちはマイキー君を助け出したところまで戻ってきた。**(コナミレディ、シモン、マイキーの3人の体力ポイントを、それぞれ2ポイントずつマイナスする)**

↓184へ

175

わたしたちは怪物を倒し、その死体を調べて、マイキー君の閉じ込められているおりの鍵をみつけだし、マイキー君を救出することに成功した。

↓147へ

176

わたしたちは無言で歩を進めていた。あまりに異様な世界なため、圧倒されて言葉をつ

174～177

むぎ出すことができないの……。とにかく、この世界を支配しているボスがいる場所は分かっている。3キロほど先に見える鬼の顔の形をした山だ。……たぶんそこに月風魔さんも捕らえられているのだろう。

「待て」わたしの後ろを歩いていたシモンさんがわたしの肩をつかんで止めた。

「どうしたの？」

「なにかが……来る」シモンさんがそう言った瞬間、地面の起伏の向こうから何かが飛び出してきた。手足が異様に細く、腹だけが異常なまでに出っぱっている。餓鬼と言う化け物に違いない。

マイキーの武器としてパチンコを入手しているか？

▼入手している――――――――――――――――→166へ

▼入手していない（または弾丸が3個以上ない）――――――→192へ

177

前に立って進み始めたわたしに、何者かが襲いかかってきた。そいつは不意に殴りつけてきて、わたしは肩にダメージをおった。**（コナミレディの体力ポイント、マイナス3）**

「きゃあっ！」敵は洞窟の暗闇に紛れているので、どんなやつかも分かんない！

「大丈夫か！」シモンさんがわたしのことを案じてくれている。でも今はそれどころじゃ

ない。目の前の見えない敵を倒さなければ！
「レディ、先のほうで広くなってるみたいだ。あそこまで行けないか？」
「分かったわ。やってみる。」
わたしはキックを連続で放って牽制しながら、前方のホールへとつき進んだ。
その試みは成功した。わたしたちはホールに出て、一緒に闘えるようになったの。

⬇155へ

178

なんと、この通路もさらに道がふたつに分かれていた。うーん、迷っちゃったのかなあ。

▼右に進む――――⬇154へ
▼左に進む――――⬇187へ

179

わたしは、ドラキュラに気づかれないように後ろに回りこもうとした。
「そんな見えすいた手で勝てると思ったのか」だけど、ドラキュラはわたしの行動などとうに予測していたみたいだった。ドラキュラは右手をわたしに向けた。
――閃光。わたしは左肩に強烈な痛みを感じて後ろに飛ばされた。**（コナミレディの体力ポイント、マイナス5）**
しかし、以外にも次に聞こえてきたのはドラキュラの苦痛のうめき声だった。ドラキュ

ラがわたしに注意を向けた隙にシモンさんが攻撃をかけたのだ。わたしはなんとか起きると、シモンさんに注意を奪われているドラキュラの背中に蹴りを放った。今度の攻撃は、確実にヒットした。シモンさんの攻撃も続けて受けたドラキュラは、苦し気にうめくとばたりと倒れた。

↓169へ

180

「それじゃあシナモン教授のもとに戻りましょう」
「うん!」「そうだな、それがいいだろう」
今度はみんなの意見が一致した。わたしは通信機でシナモン教授に連絡を取ると、次元転送をかけてもらった。

↓149へ

181

「さっきは不覚を取ったが、今度はそうはさせんぞ」ドラキュラはそう言うと、わたし達の目の前に実体化した。
「いままで生かしておいたのが間違いだったのだ。まずシモン、お前から血祭りに上げてやる」ドラキュラはそういうと、右手をシモンさんに向けて伸ばした。
次の瞬間、驚くべきことが起こった。ドラキュラの右手から閃光が走り、シモンさんの

身体を貫いたのだ！（**シモンの体力ポイント、マイナス5**）
「ぐっ、たしかに俺を生かしておいたのは間違いだったぜ。お前は俺が倒す！」
シモンさんの叫びが洞窟に轟いた。石を削り出したナイフを手にドラキュラに飛びかかる。――再びドラキュラの右手が閃光を発した。閃光はシモンさんの持っているナイフに命中し、ナイフは宙を飛んだ。シモンさんはどう見ても圧倒的に不利だった。
わたしは十字架を入手しているか？（弾丸を1個以上持っていなければないに進む）
▼入手している――――↓**191へ**▼入手していない――――↓**167へ**

182

わたしたちは、なんとかさっきの分かれ道に戻るまでに蛇たちを振り切ることができた。そして、今度はさっきの蛇の巣に行かないように反対の左の通路を選んで進んだ。
↓**162へ**

183

「うおおっ！」シモンさんはスケルトンとの至近距離まで一気に走ると、全身のばねを使ってムチを走らせた。
絡みつかずに打ち据えるだけムチはすさまじいまでの打撃力を持っていた。一撃でスケ

ルトンの間接がばらばらに離れてしまったのだ。

⬇170へ

184

「それじゃあシナモン教授のところに戻りましょう」
わたしがそう言うと、今度は誰も異を唱えることなく、帰ることになった。
通信機で連絡を取り、わたしたちは時空を転送された。

⬇149へ

185

わたしは首飾りを入手しているか？
▼入手している ――――⬇156へ
▼入手していない ――――⬇198へ

186

「いやあ、ご苦労じゃった、レディ。それにシモン君も。ちょうどさきほどコナミマンも最初の仲間、ゴエモンを助け出してコングワールドへ向かったところじゃ。
充分に休んだら、悪いが次の目的地、マイキーワールドへ向かってくれたまえ。シモン君と協力すればマイキー君を比較的楽に救出することができるじゃろう」
「分かりました」

（ここで体力ポイントか、または弾丸を補充することができる。補充できる数は15ポイント。弾丸だけ15ポイント増やしてもいいし、コナミレディとシモンの体力を5ポイントずつ増やして、弾丸を5ポイント増やしてもかまわない。ただし、体力ポイントは30より多くすることはできない）

↓１４５へ

１８７

わたしたちは、やっと今までの分かれ道ばかりの洞窟とは違う展開のところへ出ることができた。

「うわあ、凄ぇや！」

マイキー君は、眼前にあるそれを目撃して、感きわまった声を出した。

確かに、それは凄いものだった。なんと、洞窟につながった入江に隠された海賊船の残骸だったのだ。

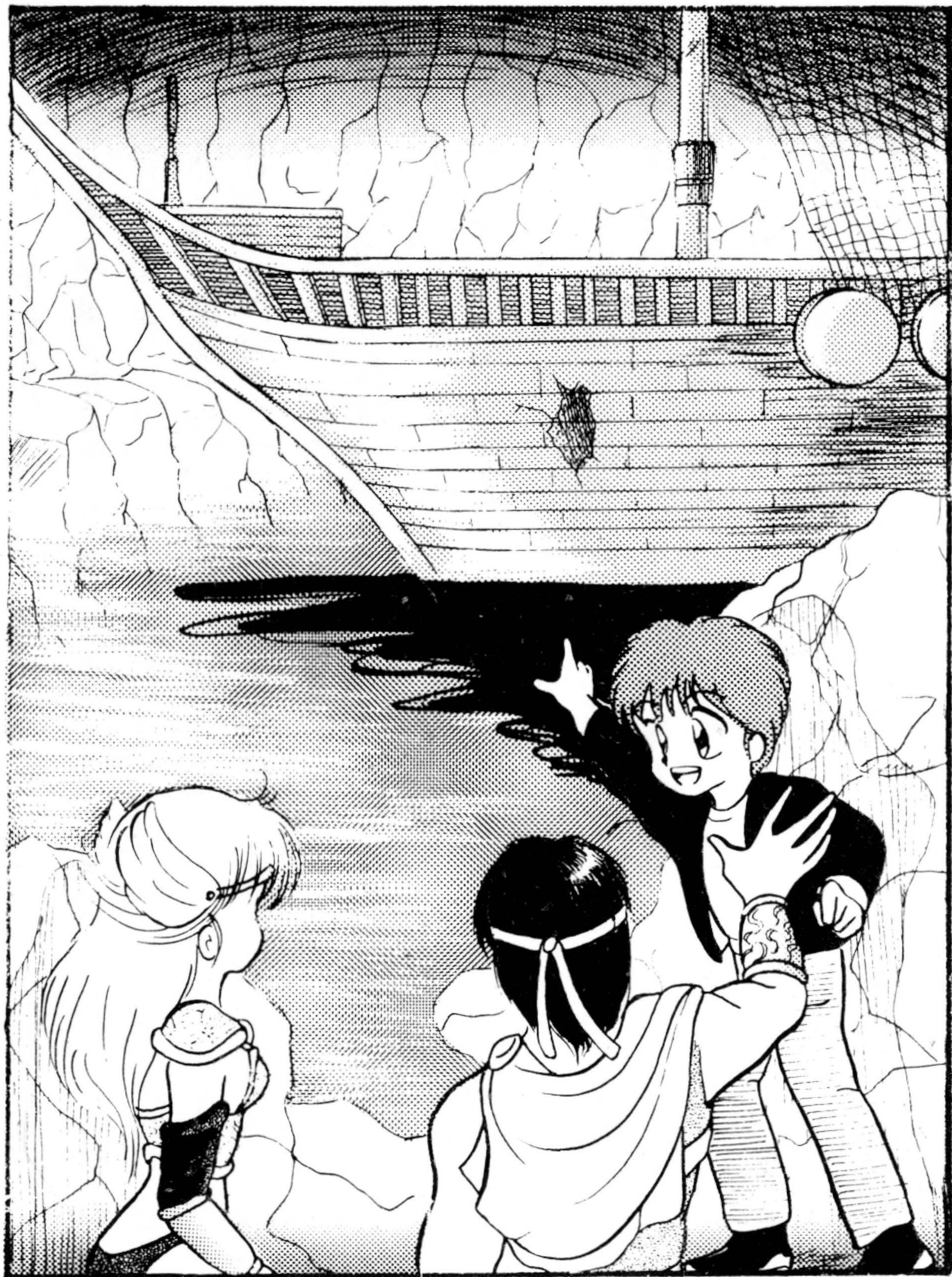
「中に入ってみよう！　あの中にパチンコが隠されているに違いないよ！」

「待て！　様子がおかしい」勇んで海賊船に向かおうとするマイキー君を、シモンさんが止めた。……その時、海賊船が振動を始めた。

「な、なんだ……」振動がどんどん激しくなってゆく。その振動が頂点に達したとき、驚くべきことが起こった！

↓３９７へ

187



187▶　確かに、それは凄いものだった。なんと、洞窟につながった入江に隠された海賊船の残骸だった。

188

わたしは急いで城を出ると、闇夜の森を駆け抜けて洞窟へと急いだ。
さいわい、洞窟までの道のりには邪魔ものは現れなかった。真っ黒の口を開いている洞窟の入り口まですんなりやってくることはできたが……。洞窟の中は真っ暗で、城にあったようなロウソクの明かりさえない。わたしの目は人間の目より暗視がきくようになっているけども、やはりなんとなく暗闇は尻ごみしてしまう
これでシモンさんを助け出すことができる。わたしは決心すると、そう自分にいい聞かせ、洞窟に入った。

↓151へ

189

「マイキー君を助けてる間に攻撃される危険性がある。先にあいつを倒すぞ！」
シモンさんは、そう叫ぶと、ムチで敵に攻撃をかけた。
「だめだよ。そんな攻撃じゃこいつは倒せない！」マイキー君が叫ぶ。
マイキー君の言った通りだった。ムチを振ろうとしたシモンさんは、振り上げたままの姿で動かなくなってしまった！
「そいつは睨(にら)んで相手を麻痺させることができるんだ！　すぐ回復するけど……」
「そういうことは先に言ってよ。もう！」

十字架を入手しているか。（弾丸を3個以上持っていなければないへ進む）
▼入手している ――――――――――― ↓196へ
▼入手していない ――――――――――― ↓171へ

190

それでは、どう闘ったらいいだろう？
▼わたしが前に立ち、一撃必殺のキック攻撃！ ――――――― ↓146へ
▼シモンさんに前に立ってもらい、わたしとマイキー君で援護する ――――― ↓183へ

191

わたしは街で入手した十字架のことを思い出した。いままで気づかなかったなんてバカみたい。ドラキュラの弱いものと言えば十字架に決まってるじゃない。
「シモンさん、これを使って！」わたしはシモンさんに十字架を放った。
彼は十字架を受け取ると、それをドラキュラに投げつけた。反射的にドラキュラは十字架をつかむ。その時、十字架は白熱した。強い輝きにドラキュラは目を背け、十字架を投げ捨てる。十字架をつかんでいたドラキュラの右手は、醜く焼けただれていた。
「これでとどめだ！」シモンさんは十字架を拾い上げると、まだ目を押さえているドラキュラの顔面に十字架を押し付けた。**（弾丸1個マイナス）**

ドラキュラの悲鳴が長く尾を引いて響き渡った。ドラキュラはどさりと倒れ、肉の焼け焦げる音と共に、マントの中の肉体が消えていくのが分かった。

↓169へ

192

シモンさんが、わたしたちの誰よりも早くムチを取り出した。

しかし、それを走らすよりも早く、餓鬼はわたしたちに石つぶてを投げてきたのだ。石つぶてはマイキー君に向けて放たれたものだった。

「あぶないっ！」わたしは考えるよりも先にマイキー君をかばっていた。

「キャアッ！」背中に痛みが走る。「お姉ちゃん！」**（コナミレディの体力ポイント、マイナス5）**

「くそっ！」シモンさんは次の瞬間ムチを走らせた。素早い攻撃は2度3度と続き、怒りをモロにぶつけられた餓鬼はすぐ絶命していた。

「お姉ちゃん、ありがとう」

「いいのよ。これくらいなんでもないわ」

↓271へ

193

わたしたち3人は、改めて洞窟の奥に向かって進み始めた。洞窟の中は暗いが、マイキ

ー君が懐中電灯を持っていたのでそれほど不自由することはなかった。
懐中電灯の明かりだけを頼りに洞窟内を進むのは、心細くもあったが、シモンさんと、それにマイキー君もいるので、最初にシモンさんを助けに行くときを思えばよっぽど気が楽だった。

↓１５４へ

１９４

「うわっ！」突然、前に立っていたシモンさんが声を上げた。
「どうしたの？　シモンさん！」
「やられた、暗闇に紛れて敵が不意打ちをかけてきた。前にホールが見える。そこまで走るぞ。ついてこい！」シモンさんは早口で叫ぶと、駆け出した。わたしも後を追う。**（シモンの体力ポイント、マイナス３）**
シモンさんのいう通り、わたしたちはホールに出た。

↓１５５へ

１９５

この通路は行き止まりになっていた。それだけではない。なんと落し穴が仕掛けられてあったのだ。先頭に立っていたマイキー君がおっこちかけて、なんとかへりにつかまった。わたしとシモンさんで引っ張り上げて脱出することができたが、余計な体力を消費してし

まった。**（コナミレディ、シモン、マイキーの3人の体力ポイントを、それぞれ2ポイントずつマイナスする）**

↓150へ

196

この時、奇跡が起こった。シモンさんの持っていた十字架がまばゆいばかりの閃光を発したかと思うと、彼にかかっていた呪縛が解けた！

「すげえ！」マイキー君が叫ぶ。本当に。わたしも叫びたいくらいだった。

シモンさんはムチの攻撃を十字架攻撃にかえ、ブーメランのようにして十字架を放った。

敵の怪物は十字架が当たる度にすさまじい悲鳴を発し、3発目が命中したとき、どっと倒れた。

「やったあ！」鮮やかな逆転勝ちだった。怪物に起き上がる気配はない。

↓175へ

197

わたしはジャンプして一気におりまで近づくと、おりの鍵に蹴りを放った。期待通り、鍵はこの一撃で壊れた。我ながらすごいキック力。

「すごいや、お姉ちゃん！」マイキー君は顔全体で大きく笑みを作ると、おりから外に飛び出した！

１９６〜１９９

「こいつはのろまだから動き回って目をくらましちまえばいいのさ」
マイキー君はそう言うと、おりの格子を利用してまるで子猿のように縦横無尽に動き回った。その言葉通り、あきれたことにのろのろとマイキー君の動きを追っていた敵の化物は、目が眩んでばったりと倒れてしまった。
「やったね！」マイキー君は右手でVサインを作って見せた。シモンさんも驚いてきょとんとした表情をマイキー君に向けていた。

↓１４７へ

１９８

「だめだ。やっぱり勝ち目はないわ。逃げましょう」
わたしはふたりに言った。マイキー君は悔しそうな表情を見せたが、確かに勝てないことを認め、パチンコを諦めることに同意した。
わたしたちは洞窟を引き返して逃げ戻ったが、海賊船の怪物は追ってくる気配さえ見せなかった。まあ、迫ってこようと思っても細い洞窟に入ってこれるわけなどないのだが……。
わたしたちは、行きに比べると楽に戻ることができた。

↓１８４へ

１９９

オレは地下のボタンを押した。エレベーターは音もなくすうっと降りると、瞬きほどの

間に地下についた。

↓214へ

200

オレとゴエモンは、絶叫を響かせながら第二の目的地、コングワールドへやってきた。やっぱり次元転送の苦痛にはすさまじいものがあるよ。なんか前よりも苦痛が増してみたいだったし……あの教授、意地悪して更に苦痛がひどくなるように調整したんじゃないだろーな。見ればゴエモンが余りの苦痛に倒れている。オレは彼を起こしてやることにした。

「うわっ、ここはどこでござるかっ？」

起きたゴエモンは驚いて聞く。それはそうだろう。ここは僕の時代よりもさらに未来だ。江戸時代に住んでいたゴエモンが都会に驚くのは当然のことだろう。オレはゴエモンに、自分に分かるかぎりのことを説明した。……しかし、ゴエモンは安心するどころか、さらに落ち着かなくなってしまったようだ。こんなんで協力してコングを助け出すことなんかできるのかなあ。

↓250へ

201

ドラキュラはいまシモンさんに注意を奪われている。わたしが近づくのにドラキュラは全く気がつかなかった。

200〜201



201▶　わたしの回し蹴りと、シモンさんの右ストレートをドラキュラにヒットさせたのは同じタイミングだった。

わたしが回し蹴りをドラキュラの腹部にヒットさせるのと、シモンさんが右ストレートをドラキュラの顔面にヒットさせたのは全く同じタイミングだった。
ふたりの攻撃を同時に受けたドラキュラは、苦痛のうめき声をあげて地に倒れた。

↓169へ

202

「待ってくれよー、ゴエモーン!」
オレはゴエモンを追い始めたが、すぐにパトカーがオレの前に立ちふさがった。

▼強行突破する ―――――― ↓215へ
▼止まる ―――――――――― ↓252へ

203

オレは床を転がり、追ってくる弾丸から逃げながらレーザーガンを3発続けて打った。
(弾丸3個マイナス)
狙いは正確だった。最初の1発で警備員は銃を手放した。2発目が右肩を貫き、3発目が腹部を貫通して奴はよろめいた。
しかし、よろめいただけだった。なんと、その男はまだ死ななかったのだ。銃を手放したため打ってくることはできないが、不気味ににじり寄ってくる。

▼さらにレーザーガンを撃つ――――――――――――――――↓242へ
▼やめる（または弾丸が2個以上ない）――――――――――↓265へ

204

「おりゃあ！」ごん！「……痛ぇーっ！」
なんてこった。足を蹴ってバランスを崩そうと思ったのだが、蹴ったとたんにオレの足に痛みが走った。警備員はびくともしない。まるで鉄柱でも蹴ったみたいだ。**（コナミマンの体力ポイント、マイナス5）**
警備員は口元に不快な笑みを浮かべ、余裕の表情で見下ろしている。だめだ、こんな奴にひとりで立ち向かったって勝ち目はない。とっとと逃げちまおう！　↓259へ

205

「さてと、それじゃあシナモン教授のところに戻ろう」
「うほうほ」「そうでござるな」
「あ、コング」オレはシナモン教授に連絡を取る前に、あることを思い出した。
「うほ？」コングはなんだ？　という感じで聞き返す。
「これからちょっと苦しいと思うことがあるかも知れないが、我慢してくれよ」



205▶　シナモン教授と連絡が取れ、次元転送が始まった。
「うわーっ！」「どしぇーっ！」「うぼーっ！」……。

「う……うほ？　うっほっほっほ」コングは任せてくれとでも言いた気に笑った。オレとゴエモンは心配の表情で顔を見合わせた。

シナモン教授と連絡が取れ、次元転送が始まった。

「うわーっ！」「どしぇーっ！」「うぼーっ！」

↓217へ

206

オレは取り調べを受けることもなく、いきなり留置場に入れられることになった。

「なんだー、このやろー、警察権力の横暴だぞー！」オレは、いつもは余り使うことのない、ちょっとむづかしい言葉を使って訴えたが、全く効果がなかった。

くそ、このままじゃコングを助けることができない……そう考えた時、奥のほうからうおーと叫ぶ声が聞こえてきた。警官が、なんだなんだとうろたえ始める。……あの声は……ゴエモンだ！

——ドッカーン！　すさまじい音がした。キセルを振り回したゴエモンが一方の壁を壊して入ってきて、反対側の壁を壊して走り抜けていったのだ。どうやらあいつはまだ混乱しているらしい。

警官はあまりに異常なできごとに混乱している。ゴエモンを追おうとする者、逃げ出す者、オレにはあまり注意を向けていないようだ。逃げられるかも……。

▼この隙に逃げる ―――――― ↓254へ▼様子を見る ―――――― ↓225へ

207

コングが先に飛び出した。巨大な身体ながらも、敵のボスのレーザー砲乱射をうまくよけている。

ちゅどーん。流れ弾がエレベーターの操作装置を破壊する。油断していたオレは爆発に巻き込まれてしまった。**(コナミマンの体力ポイント、マイナス4)**

吹き飛ばされるようにしてエレベーターから転がり出る。

オレはレーザーガンを入手しているか？

▼入手している ―――――― ↓238へ

▼入手していない（また弾丸が2個以上ない。レーザーガンがあっても使わない） ―――――― ↓247へ

208

もう夕方を過ぎている。このビルがどのような目的で作られたものかは分からないが、中に人間はあまりいないようだった。

オレは入り口から堂々と中に入った。予想通り、警備員がすぐに駆け付けてくる。

「きさま、もうこのビルは閉鎖しているんだぞ。帰れ！」
オレがやってくるのを予想していたはずだから、警戒は厳重なはずだ。しかし、まさか正面から入ってくるとは思わなかっただろう。裏口のほうが警備が厳重だろうと予想して、オレは正面から入ったのだ。そのオレの予想は的中したらしい。こいつ以外の警備員は見られない。
さて、どうやってこいつを倒すか。
▼正面から対決する――――↓258へ▼フェイント作戦――――↓231へ

209

コングの武器としてバナナの束を入手しているか？
▼入手している――――↓236へ
▼入手していない（また弾丸を5個以上持っていない）――――↓249へ

210

オレはビルの受け付けに置いてあるインフォメーション・コンピューターを操作した。このビルの中を調べる。
結果は、最上階、地下、そしてちょうど真ん中の40階が怪しいと分かった。その階のイ

ンフォメーションが表示されないのだ。
オレはすぐにエレベーターに乗った。さて、どこへ行くか。……あれ？ 最上階へはこのエレベーターでは行けないようになっているようだ。その階のボタンがない。地下か40階に行くしかないか。どっちに行く？

▼地下へ向かう――――**↓199へ**▼40階へ向かう――――**↓233へ**

211

「これでとどめだ！」オレは叫びながらレーザーガンを撃った！
光条はまっすぐにアンドロイド警備員の頭に伸び、貫いた。**（弾丸1個マイナス）**
さすがに頭は、アンドロイドの急所でもあった。レーザーが頭を貫通したとたんに、奴の動きがおかしくなった。オレのいる方向が分からなくなったようで、見当違いの方向を歩き回り、壁や武器の山にぶつかる。しばらくして頭からほとばしる火花の量が最高潮に達すると、アンドロイドは両手で自分の頭を押さえた。まるで頭痛がするとでもいうように頭を押さえ続けたアンドロイドは、結果として、自分の力で頭を砕いてしまった。
そして、アンドロイドはばたりと倒れると、絶命した。
ふう。オレは溜めていた息を一気に吐いた。
疲れる闘いだった。今までいちばん強い敵だった。オレはしばらくそこに座り込んで

休んだ後、再び仲間の武器を探してみることにした。今度は手早く。
ゴエモンの武器のまねきねこ、コングの武器のバナナの束。この両方を持っているか？どちらかを持っていない場合は、持っていないものを選んで進む。両方持っていない場合は、どちらかを選んで進む。

▼まねきねこを持っていない　↓255へ
▼バナナの束を持っていない　↓246へ
▼両方持っている　↓213へ

212

階段を登って最上階へやってきたオレは、そこで異常なものを見た。
部屋の中央に、いびつな形の機械が浮いていた。巨大な、全長3メートル以上ある機械のかたまり。大まかにいうと逆三角錐のような形をした浮遊機械の底の、いちばん床に近い頂点には巨大な口径のレーザー砲塔がある。
逆に、上の部分には盛り上がったところがあり、中枢部らしい機械群がかたまっているようだ。
「ダレダ！」浮遊機械は、オレに気づいた。半回転してこちらを向く。同時にレーザー砲もこちらを向いている。
オレはレーザーガンを入手しているか？

▼入手している ———————— ↓239へ
▼入手していない（または弾丸を5個以上持っていない。入手していても使わない） ———— ↓262へ

213

それじゃあここには用はないな。他に敵がやってくる前に早くここから出ようっと。
オレはアンドロイド警備員の死体を中に放置したまま鉄扉を閉めると、電子ロックをめちゃくちゃに押して閉めた。

↓248へ

214

「うおー、うおー」地下に来たとたん、猛獣の叫び声が聞こえてきた。
「コング！」オレは思わず声を上げた。そこには巨大なおりに閉じ込められたコングがいたのだ。
「オレはお前を助けに来たんだ」オレはコングの叫び声に消されないように大声で叫んだ。それでやっと聞こえたようで、コングはおとなしくなると、「うお？」と何か聞きたいような表情を見せた。
オレはシナモン教授に受けた使命のことをコングに話した。コングに人間の言葉が分か

るのかどうかはオレには分からなかったが、いちいち相づちを打っていたので理解してくれたんだろう。

さて、コングのおりだが、電子ロックによって厳重に閉じられている。オレは電子ロック解除装置を入手しているか？

▼入手している ――――↓241へ
▼入手していない ――――↓235へ

215

「コナミマンだな！　止まれ」パトカーの中から数人の警官が踊り出た。みんな手に銃を構えている。くそっ、これじゃあ強行突破なんてできやしない。パトカーの上を乗り越えたとたんに撃たれちまう。

▼止まる ――――↓252へ
▼闘う ――――↓263へ

216

オレは、さっき警察署で入手した電子ロック解除装置を早速使った。ヴィーンという電気的な小さな振動音がしばらく続くと、やがてカチリという音と共に鉄扉が重々しく開き始めた。

↓243へ

217

「いやあ、ご苦労じゃったのう、コナミマン君。それにゴエモン君とコング君もな。ちょうどさきほどコナミレディもふたり目の仲間、マイキーを助けだし、第三の目的地にある地獄へ向かったところじゃ。……悪いが、きみたちも休んだら次の目的地、モアイワールドへ向かってくれたまえ」
「うほほーっ、うほうほ！」突然コングが騒ぎだした。どうやら次元転送機の苦痛について文句を言っているらしい。しかし、教授にはコングが何を言っているのか分からない。
「そうか、コング君、がんばってくれるか。ありがとう。わしは嬉しいよ！」
「うほーっ！　うほうほ！」オレには否定しているのが分かる。しかし、教授は全く分からず、〝頑張る〟とおたけびを上げているようにしか聞こえないのだ。オレとゴエモンはコングの心中を察してなだめてやった。
「それではモアイを早く助けてきてくれたまえ。コナミマン君！」
「はい」

(ここで体力ポイントか、また弾丸を補充することができる。補充できる数は20ポイント。弾丸だけ20ポイント増やしてもいいし、コナミマンとゴエモンとコングの体力を5ポイントずつ増やして、弾丸を5ポイント増やしても構わない。ただし、体力ポイントは30より多くすることはできない。)

↓330へ

218

オレは全身の力を溜めてジャンプした。日々の訓練と、履いているパワーブーツのお陰で3メートルくらいはジャンプすることができる。

ボスの上部に着地。ここはさすがにレーザー光線の死角だ。オレはほっとすると、拳を振り上げ、中枢機械群に振り下ろした。……いや、振り下ろそうとしたのだが、ボスがこう言ったので止めざるを得なくなった。

「イイノカ、ワタシヲハカイスルト、こんぐヲタスケダスコトガデキナクナルゾ」

「くそ……。ひきょうな……」

↓266へ

219

レーザー光線が左足をかすめ、小さな痛みが走ったが、それ以外の攻撃を全てよけ、オレは必殺のパンチをボスのレーザー砲塔に叩き込んだ。

砲塔が沈黙する。今攻撃を続ければ倒せる！

↓249へ

220

どごーん！　地響きのような音が最高潮に達したとき、扉を破壊して何かがこの部屋に飛び込んできた。

「ゴエモン！」オレはあまりの驚きに声を上げずにはいられなかった。扉を破壊して入ってきたのは、なんとキセルを振り回して錯乱したように走るゴエモンだったのだ。どうやら彼のキセル攻撃はすさまじいパワーを秘めているらしい。

ゴエモンはオレの呼び掛けに気づかずそのまま突進すると、ボスの身体に突っ込んだ。その次の瞬間にはボスの身体にゴエモンの身体大の穴が開いていた。

ゴエモンはそれで力つきたらしく、へたり込むようにして止まった。……しかし、今のゴエモンの攻撃によって、ボスは致命的な被害を受けていた。

↓264へ

221

「やったあーっ！」「うほほほほいっ！」オレとコングの喜びの声があわさった。

これでこの世界での使命も完全に果たすことができたのだ。コングにとっても、自分を閉じ込めていた仇敵を倒したのだから、嬉しいのだろう。コングが嬉しさのあまり抱き付いてこようとしたので、さっきの悪夢を思い出し、オレは慌ててよけた。コングも最初は不満そうな顔をしていたが、すぐさっきのことを思い出したらしく、頭をかきながら笑った。

「それにしてもゴエモンはどうしたんだろうなあ」オレはふと彼のことを思い出した。

——その時だった。

どっかーん！　すさまじい音とともに壁をぶち破って、キセルを振り回したゴエモンが現れた。
「ありゃ？」ゴエモンはオレを認めると、ひょうし抜けしたように止まって言った。
「もうボスは倒しちゃったの？　それにコングも助けちゃったのでござるか……」
「はっはっはっ……」「うっほっほっほ……」オレとコングは大声で笑った。
「へっへっへっへ……」ゴエモンは照れ隠しに笑ってごまかした。

↓205へ

222

その後もボスは執拗に襲ってきた。最初の一撃でかなりダメージを受けたオレには、もはやよける力が残されてはいなかった。

なんのダメージも与えられずに負けちまうなんて……。ちくしょ……う……。

GAME OVER

223

オレは走った！　奴がレーザーを撃ってくるのを予想し、かわしながら。

それでも、接近するまでに至近距離をレーザーが6回通過し、ダメージを喰ってしまった。**（コナミマンの体力ポイント、マイナス4）**

接近と同時に、一撃必殺の例のパンチを繰り出した。走った勢いに乗って放った一撃目で砲塔は沈黙した。
さらに2回の攻撃を繰り返し、砲塔を完全に潰すことに成功した。手は痛かったが、死ぬよりましだ。

↓266へ

224

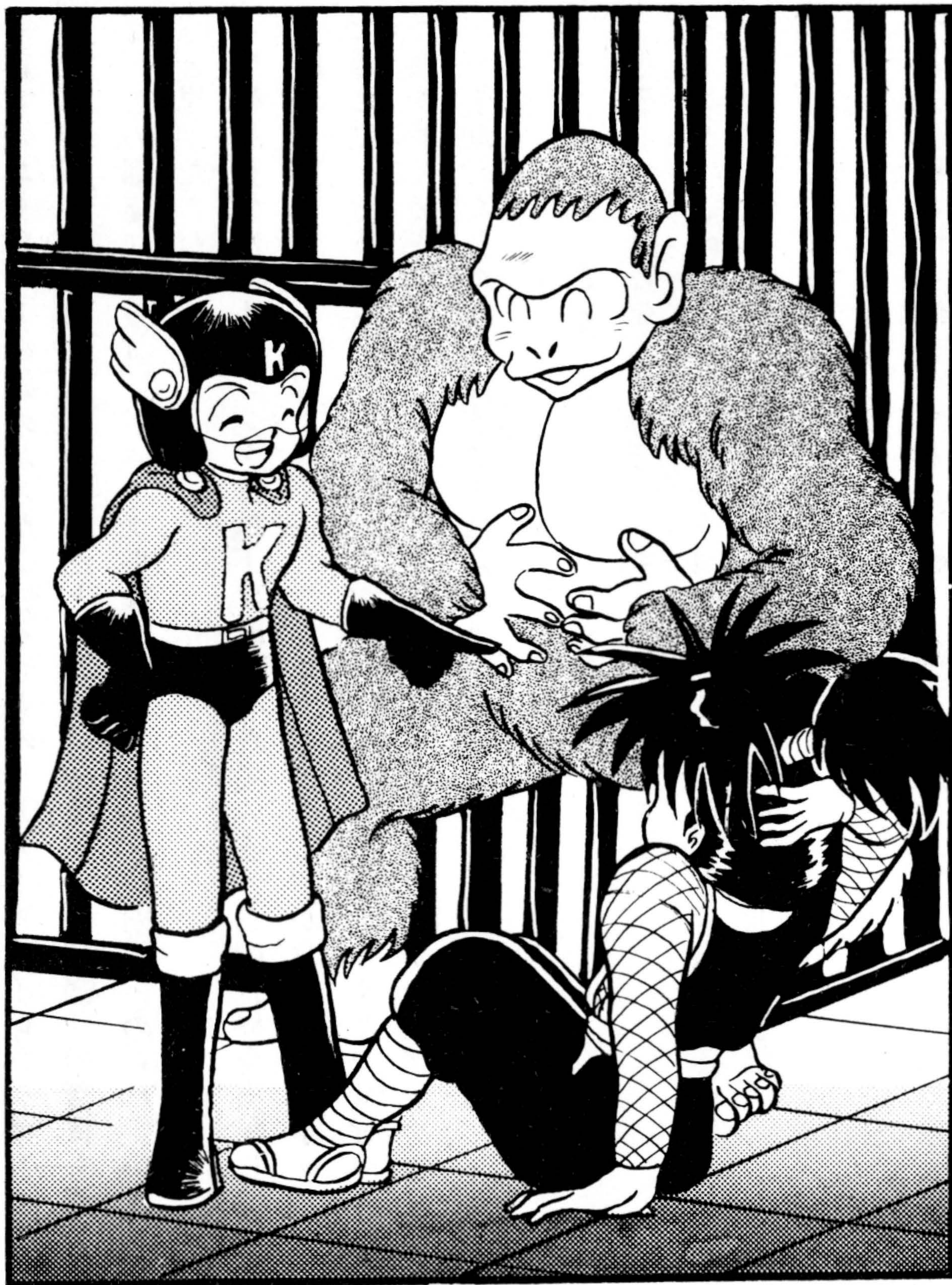
オレが地下のおりからコングを助けだしたところで、ゴエモンは目を覚ました。
「いったいどうしたでござるか……」
「お前なんにも覚えてないのか？　オレたちはお前に助けられたんだよ」
「うーっ、うー」コングも相づちを打つ。
「うーむ。なんにも覚えてないでござる……」
「はっはっはっは……しょーがない奴」「うほっうほっうほっ……」
「へ……へへへへ……」オレとコングに笑われ、ゴエモンは頭をかきかき笑ってごまかすのであった。

↓205へ

225

しばらくすると、警官たちはやっとひとつにまとまった。オレの見張りをひとり置き、

224～225



224▶　「へ……へへへへへ……」オレとコングに笑われ、ゴエモンは頭をかきかき笑ってごまかすのであった。

全員でゴエモンを追い始めたのだ。いくつものパトカーのサイレンが遠ざかってゆく。
オレは、この瞬間こそチャンスだと感じた。一瞬にして見張りの警官を殴り倒したオレは、この部屋にあるコンピュータを操作した。コングが閉じ込められているビルを調べようと思ったのだ。
情報を見付けた！　コングは地下に軟禁されている。この世界を支配しているボスは最上階か。よし。——情報も入手し、ここを出てビルに向かおうとしたオレは、ふと机の上に役に立ちそうなものを発見した。電子ロック解除装置。つまりコンピュータで制御された錠を解くカギのようなものだ。オレはそれを持つと、ビルへと向かった。ゴエモンはコングを助けだしてから探すことにしよう。**（電子ロック解除装置入手）**　**↓２０８へ**

２２６

くそ。どうにもならない。
「コング、この電子ロックのキーコードを知ってる奴がどこにいるか知らないか？」
「うー、うー」コングは残念そうな表情を浮かべながら上を差した。
「最上階にあるんだな？」
「うー」コングは大きく頷いた。
「じゃあそいつを倒してくるまで待っていてくれ」オレはコングにそう言うと、エレベー

ターに飛び乗った。背後からコングの「うっほほほ」と言う声が聞こえてきた。
きっと「がんばってくれ」という意味なんだろう。
そうだ。よく考えてみれば最上階の下の階まで行けば階段で上がれるじゃないか。よし、早速直行だ！

↓２５７へ

２２７

「でやーっ！」オレはかけ声と共にパトカーに突っ込んだ。警官の銃弾が至近距離をかすめてゆく。かすめるだけでも衝撃波でダメージを負ってしまう。**（コナミマンの体力ポイント、マイナス５）**

そして、パトカーにたどりつくと、自慢の右拳をエンジン部に叩き込んだ！——べこん、という音と共に鉄板がぐにゃりと曲がる。エンジンにダメージを与えると、近づくとき以上のスピードで離れる。やがてパトカーのエンジンは暴走し、大爆発を起こす。
オレはパトカー2台を壊した。他のパトカーは逃げてしまったけど、戦果は上々だろう。
しかし、その間にゴエモンは全く見えなくなってしまった。仕方がない。ひとりでビルに向かうとするか。

↓２０８へ

228

「く、くるひい……」
太い腕によって、まるで万力にかけられたようになって、息も絶え絶えになっているのに、コングはしばらくたつまで気づいてくれなかった。
「うそ？　うほほ」
やっと気づいて下ろしてくれたコングが心配そうに聞いてくる。悪気がないのはよく分かるのだが、この怪力にはかなわないなー。ぜえぜえ。
「それじゃあ……はあはあ……この世界を支配してる……ぜえぜえ……ボスを倒しに……ぜえはあ……行こうか」
「うっほほほ！」コングは力強く頷くと、オレをおぶってさっきのとは違うエレベーターに乗った。このエレベーターは最上階まで直通で行けるようになっているらしい。
エレベーターは音もなく登っていった。

↓268へ

229

まあ、ゴエモンは後で探せばいいだろう。先にコングを助け出せば探すのも楽になるに違いない。
オレはそう考えると、ビルに向かって走った。

ビルまでは思ったよりも距離があった。走って体力を消耗してしまった**（コナミマンの体力ポイント、マイナス３）**

↓２０８へ

２３０

「どりゃあーっ！」――ご――ん。体当たりすると、すさまじい音が辺りに響き渡った。鉄扉がびくともしない。それどころかこっちの身体にダメージを受けてしまった。とほほ。**（コナミマンの体力ポイント、マイナス５）**

「きさま、そこで何をしている！」

しまった。今の音で警備員がやってきた。くそー。踏んだり蹴ったりだな。

▼闘う――――**↓２５１へ**▼逃げる――――**↓２６１へ**

２３１

「あっ！　あれはなんだ！」オレは警備員の後ろを指差して叫んだ。

しかし、警備員は後ろを振り返らなかった。

「そんな見えすいた手に乗るか」

し、しまったあ！　こいつはフェイントがきかないいっ！

なーんちゃって。しょうがない。いっちょう軽く料理してやるか。

べきっ。……しまった、次に言う台詞を考えてる間にぶん殴られてしまった。くそ、痛ぇなあ。**（コナミンの体力ポイント、マイナス3）**

↓258へ

232

今入手したレーザーガンを使うか？　レーザーガンを使えば、当然のことながら弾丸が減る。

▼使う ―――――――――― ↓203へ

▼使わない（または弾丸が3個以上ない） ―――― ↓265へ

233

オレは40階にやってきた。エレベーターを出たとたん、巨大な鉄扉にぶちあたる。

「いてーなー。なんだこりゃ」鉄扉には、『武器庫』と書かれたプレートがある。

「おっ、こりゃあついてるねえ。いっちょう武器を頂こうかな」

ラッキー。オレは扉に手をかけた。

↓260へ

234

オレは先に飛び出した。――とたんにボスの砲塔から太いレーザー光線がほとばしる。

とっさにジャンプしてよけたオレの足元に、丸く灼けた穴が残った。
さらに次々と撃ってくるレーザーをなんとかよける。反撃しなければ!
オレはレーザーガンを入手しているか?

▼入手している ―――― ↓209へ

▼入手していない（または弾丸が3個以上ない。レーザーガンがあっても使わない） ―――― ↓249へ

235

うーん。いったいどうすれば開けることができるんだろうか。解除装置がなければ、キーコードを知っていなければ開けることができないのだ。
「うー、うー、うほうほ」おりの中でコングが何か言っている。なんだろう。……何か細長いものの皮をむくような動作を繰り返している。そして、何かを投げる動作……。コングは自分の武器がないかと聞いているのだ。あれば、自分で開けることができると。それに気づくまでに5分近い時間が必要だった。
コングの手話に慣れなきゃどうにもならんなー。
オレはコングの武器としてバナナの束を入手しているか?

▼入手している ―――― ↓267へ

▼入手していない（または弾丸を1個も持っていない）――――――
➡226へ

236

コングがバナナを投げた。続けて3発放たれたバナナは、ボスの巨体を突き抜けるほどの威力を持っていた。

ボスはまるで巨体を支えられないかのようにゆっくりと床に落下した。オレは倒れてくるボスのてっぺんの部分――ボスの中枢機械群を狙ってレーザーガンの引き金を引いた。

光条はちょっとずれて2本。そしてその2本は、両方とも正確に中枢機械を貫いた。

ボスの身体にともっていた光が、倒れると同時に、ゆっくり息を引き取るように消えていった。そして、今やがらくたのかたまりと化したこの世界の支配者は、完全に沈黙したのだ。**（弾丸5個マイナス）**
➡221へ

237

オレは奴のレーザー光線の威力をみくびっていた。直撃もしていないのにこれほどまでにダメージを食ってしまうとは……。**（コナミマンの体力ポイント、マイナス13）**

奴は再び撃ってきた。今度は用心していたので、なんとかよけきれた。今度さっき以上のダメージを食ったら間違いなくやられちまう。

このままではあぶない。あの砲塔を破壊するか、もしくはてっぺんの中枢機械群を破壊しなければ……。

▼レーザーをよけ、砲塔を破壊する ―――― ↓223へ
▼ジャンプして奴の上に登り、中枢部を攻撃する ―――― ↓218へ

238

オレはレーザー光線をなんとかよけながら、コングに当てないことだけを心掛けてレーザーガンを撃った。**（弾丸2個マイナス）**
オレの手元から伸びた2本の光条は、正確にボスのレーザー砲塔を貫いた。その次の瞬間砲塔は沈黙した。今、さらに攻撃をかければ倒せる！

↓209へ

239

オレは撃たれる前に撃った。続けて2発。光条は正確にレーザー砲塔を貫いた。
「ナントイウコトダ、コンナバカナ」攻撃方法を失った敵のボスは、機械なりにうろたえた声を出した。**（弾丸2個マイナス）**
「コングを返してもらおう」オレはレーザーガンを構えたまま言った。
「ソウカ、オマエガこなみまんカ」

236〜239



239▶ 「ドガーン」オレは撃たれる前に撃った。続けて2発。光条は正確にレーザー砲塔を貫いた。

240～241

その時、突然警報が鳴り響いた。
「侵入者接近。侵入者接近！」どうやら、侵入者というのはオレ以外にもうひとりいるらしい。そいつもここに向かってくるようだ。
「マックタク、ドイツモコイツモヤクニタタン……」ボスはにくたらしげに言い捨てる。
——どどどどどどど……。
ふと気づくと、なにやら地響きのようなものが接近してくる。これがもうひとりの侵入者か？　いったい何者なんだ？

↓220へ

240

オレは腹にすさまじい衝撃を感じた。体力が続かなかったオレは、攻撃をよけつづけることができなかったのだ。コングがどうなったのかは分からない。
倒れながらオレは、せめてゴエモンがいてくれたら……そう考えていた。3人で力を合わせれば倒せたのではないか……。そう繰り返し考えている間に、意識が失われていった。

GAME OVER

241

さっき警察署で入手した解除装置が早速役立った。オレが解除装置を作動させると、コ

ングのおりはすぐに開いたのだ。
「うほほほいっ！」
コングは喜びのおたけびを発した。嬉しそうにおりから飛び出て、そしてオレに抱きついてきた。

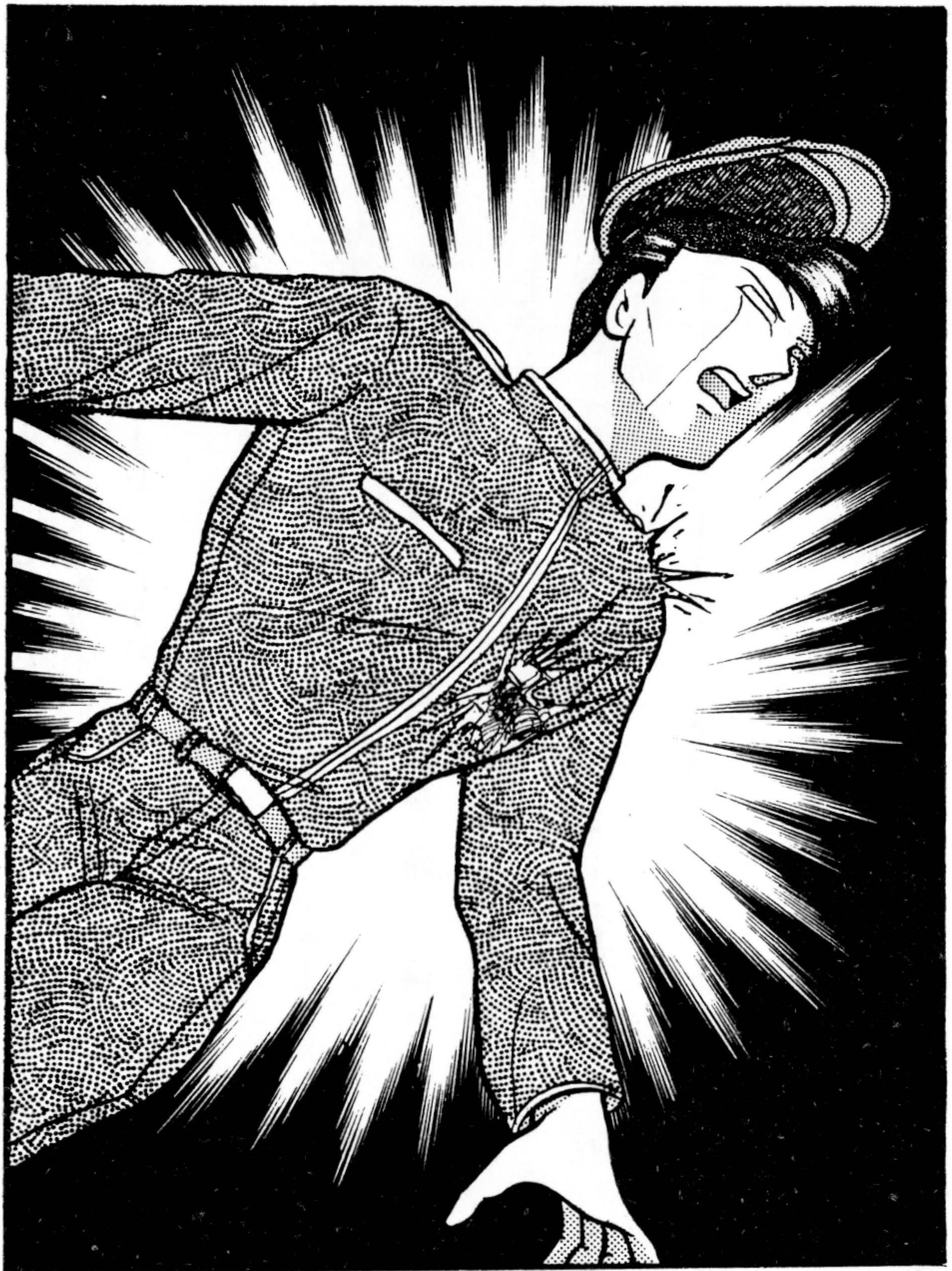
⬇228へ

242

オレはさらに2回続けてレーザーガンを撃った。1発が奴の左肩、そしてもう1発が奴の左腕を貫いた。**（弾丸2個マイナス）**
警備員は大きくのけぞった。焼けただれた銃創から火花が散っている。
「なんだと、こいつはサイボークか！　アンドロイドなのか!?」
オレは思わず声を上げた。
それでレーザーガンはほとんど効果なかったのか。
▼さらにレーザーガンで攻撃する ―――――――――― ⬇211へ
▼やめる（または弾丸が1個以上ない）―――――――― ⬇265へ

243

中は、文字通り武器の山だった。ありとあらゆる武器が所狭しと置いてある。中には本



242▶　オレはさらに２回続けてレーザーガンを撃った。１発が奴の左肩、そしてもう１発が奴の左胸を貫いた。

当にこんなものが武器なのか？　と思いたくなるようなものさえある。
オレはレーザーガンが置かれてあるコーナーを探し出した。その中から自分の手にあったものを慎重に選び出す。よし、これがいいな。**（コナミマンの武器として、レーザーガンを入手）**

他に仲間の使えそうな武器はないだろうか。ゴエモン、コング、そしてモアイの使える武器……うーん。みんな変な奴ばっかりだから何が合うのかよく分からないなあ。特にモアイに使える武器なんてあるかいな。

……なんてことをぶつぶつ呟きながら武器庫を歩き回っていると、突然背後から声をかけられた。

「止まれ！　手を上げておとなしくしろ！」

のんびりと武器を探していたのがまずかった。警備員が駆けつけたのだ。どうやら物音からして背後から銃を向けているらしい。

▼闘う ――――――――― ↓232へ ▼逃げる ――――――――― ↓259へ

244

がつん！　オレはいつもと違う感触にうめいた。警備員を殴ったとたんすさまじい痛みが拳に涌いた。まるで厚い鉄板でもぶん殴ったような……警備員はびくともしていない。

余裕の表情でこちらを見下ろし、あまつさえ笑みまで浮かべている。くそ、かえってこっちがダメージを受けちまった。**（コナミマンの体力ポイント、マイナス４）**

警備員は、不敵な笑みに口元を彩らせ、無言で近づいてくる。こいつはどんな攻撃も通じないのか。

オレは諦めることにした。こんな怪物と闘ったって勝ち目はない。逃げちまおう。

↓２５９へ

２４５

うーん、しょうがないなあ。だめでもともと、体当たりで扉を開けてみるか？

▼やってみる ―――――― ↓２３０へ
▼そんなことしない ―――――― ↓２５３へ

２４６

オレはバナナの束を探し当てた。これならコングが使えるだろう。**（コングの武器として、バナナの束入手）**しかし、何で武器庫に銃と混じってバナナの束なんか置いてあるんだろうな。変な武器庫だなあ。腐ったらどうするつもりなんだろう。

ま、そんなあほなことを考えてる暇はない。またさっきのアンドロイド警備員みたいな奴がこないとも限らない。早くここから出よう。

↓２１３へ

247

敵のボスのレーザー攻撃がこっちも狙ってくる。さすがに機械の攻撃は、こちらの動きをほぼ完全に予想している。このままよけることができるのだろうか。
今オレの体力ポイントは10ポイント以上あるか？
▼ある ———— ↓219へ▼ない ———— ↓240へ

248

それじゃあ他の階に行くことにしよう。……そうだ。よく考えてみりゃあ、最上階へはその下の階までエレベーターで行って、そこから階段で行けばいいんじゃないか。なーんだ。
▼最上階へ向かう ———— ↓257へ▼地下へ向かう ———— ↓269へ

249

ごーん！　大きな音が響き渡った。
コングがボスを殴りつけたのだ。その怪力はボスを一方の壁にぶつけて跳ね返し、反対の壁にぶつけるくらいの威力があった。
「やったあ！」オレは思わず声を上げた。喜びついでに飛び上がり、そのままボスの巨体

に登った。いちばんてっぺんにある中枢装置群を叩き壊すためだ。
オレは全身の力を集め、右拳を装置群に叩き込んだ。
次の瞬間、ボスの身体の中で光っていた光が消えた。機械音も消え、巨大ながらくたと化した機械のかたまりは完全に沈黙した。

↓221へ

250

ゴエモンが落ち着かないのはしょうがないとして、オレたちはコングが捕らえられているという情報があったビルに向かうことにした。
その直後だ。オレたちの向かっている方向から赤い光が多数、明滅しながら急速に接近してきた。
「うわー!」接近してくるのはパトカーだった。しかし、わけの分からないゴエモンの混乱は頂点に達した。
「うぎゃ――っ!」ゴエモンは、持っていたキセルを振り回しながらすさまじい速さでパトカーから逃げ出した。瞬く間の出来事で、止める暇さえなかった。
「待てよ、ゴエモン!」オレは大声で叫んでみたが、ゴエモンは戻ってこない。声が届いたかさえ分からない。パトカーはなおも接近してくるし、どうしようか。

▼ゴエモンを追う――――――――――――――――――――――――↓202へ

▼とにかくパトカーから逃れ、ビルへ――――――――――
↓229へ

251

そいつは、見掛けによらず弱かった。2メートル近くもある巨漢のくせに、オレのパンチ1発で伸びてしまったのだ。ふ。オレが強すぎるってことかな。ふふふのふ。

オレは警備員をはたいて起こすと、電子ロックのキーコードを聞きだし、再び気絶させた。

よーし、これで武器を手に入れることができるぞ。オレは今聞き出したキーコードを電子ロックに入力した。鉄扉はゆっくりと開いてゆく。

↓243へ

252

立ち止まると、警官がわらわらと寄ってきて、問答無用で捕まってしまった。そのままパトカーに乗せられ、しばらくたつとコングのいるビルにほど近い警察署に連行された。このままここから逃げられれば、歩いてビルまでやってくる手間が省けたわけだが、果たして逃げることはできるのだろうか。今までの問答無用の態度からして、釈放されるという可能性はないに等しいだろう。

↓206へ

253

だめだ。このカギはキーコードを知っているか、もしくは解除装置を持っていないことには開けようがない。ここは諦めて他の階に行ってみることにしよう。

↓248へ

254

オレはこっそりと、目立たないようにドアから逃げ出した。警官たちは壁にできた大きなふたつの穴に注意を向けていたので、オレはまんまと逃げ出すことに成功した。
しかし、結果的にオレを助けてくれたゴエモンは、またどこかへ走り去ってしまい、捕えることはできない。
しかたがない。先にビルに向かってしまおう。コングを助けだしてからでもゴエモンは探せるだろう。

↓208へ

255

オレはまねきねこを探し当てた。これさえあればゴエモンが小判を投げる攻撃ができるはずだ。なぜかはよく分かんないけど。
しかし、なんでこの武器庫は銃と混じって、まねきねこなんか置いてあるんだろ。変な武器庫だなあ。まさかこいつに核爆弾が積んであるとかいうんじゃないだろうな。

（ゴエモンの武器として、まねきねこ入手）

ま、そんなあほなこと考えてる暇はない。またさっきのアンドロイド警備員みたいな奴がこないとも限らない。早くここから出よう。

↓213へ

256

銃を構えていたが、オレの速さについてこれなかった奴をまず殴り飛ばす。ひとり目。足元の地面に威嚇（いかく）射撃。オレはジャンプして空中で回転すると、その射撃した奴を殴りつける。ふたり目。

しかし、オレの反撃もここまでだった。3人目に攻撃をかけようと思った瞬間、オレの頭に銃が突きつけられていたのだ。

動きを止めたオレは、問答無用で警察署に連行された。

↓206へ

257

オレは最上階の下の階までやってきた。フロアを歩き回り、登り階段を発見すると、最上階へ向かった。

↓212へ

258

「うおりゃーっ！」

ええいっ、何も考えることはない。こんなザコ、オレの必殺パンチで一撃だぜ。

どこーん。

「うわー……」警備員はオレの一撃を受け、悲鳴を上げながらふっ飛んだ。わっはっは。軽いもんよ。

↓210へ

259

オレはとっさに床を転がった。通り過ぎた床の上をマシンガンの弾丸が追ってくる。間一髪でよけたまま、物影に隠れる。ふー。危なかった。

「出てこい。おとなしくすれば命だけは助けてやる！」

警備員の太い声が部屋に響き渡る。うそつけ。生かすつもりがあるならマシンガンなんか乱射するかよー。

オレはさっき開けた鉄扉までの距離を目で計った。よし、これなら大丈夫だ。

鉄扉と反対方向にものを投げ、同時に扉に向かって走る。物が転がった音を聞いてそちらにマシンガンを乱射する。その間に、オレはまんまと扉を抜けることができた。

すかさず扉を閉め、電子ロックをめちゃくちゃに押す。これで中からは開けられないは

ずだ。……助かったぁ。 ↓248へ

260

オレは喜んで扉を開けようとした。
「ありゃ。カギがかかってやがる……」
その扉に仕掛けられたカギは、コンピュータ制御の電子ロックだ。オレは今までに電子ロック解除装置を入手しているか？
▼入手している ―――― ↓216へ
▼入手していない ―――― ↓245へ

261

今の体当たりのダメージも大きいことだし、無駄な闘いは避けることにした。エレベーターに逃げ込む。間一髪で閉まる。助かったー。 ↓248へ

262

ここままではレーザー砲の餌食になってしまう。なんとかしなくては。
▼ジャンプしてボスの上の部分に逃れる ―――― ↓218へ
▼レーザーをなんとかよけ、砲塔を破壊する ―――― ↓223へ

▼物影に隠れて様子を見る ――― ↓２７０へ

２６３

どうやって闘うか？

▼攻撃をさけながら、ひとりずつ倒してゆく ――― ↓２５６へ

▼パトカーを攻撃して、みんなまとめて倒す ――― ↓２２７へ

２６４

ボスの下の頂点が接地した。そして、そのままぐらりと倒れた。オレはいったん潰されないように離れた。それから中枢部分にすぐに一撃を加えられる位置まで近づいた。

「マ……マテ……。ワタシヲハカイスルト……こんぐヲタスケダス……コトハデキン……ゾ……」

「分かってる。早くコングの救出法を話せ。それが本当だったら助けてやる」

「……こんぐハチカニイル。デンシろっくノきーこーどハ８８５８９４３ダ」

「ありがとよ。……助けてやるとは言ったけどよ。オレにはお前は治せないぜ。じゃあ元気で頑張れよ」

「ソンナ……」

オレはゴエモンを背負ってエレベーターに乗った。そして、まっすぐ地下へ。

↓224へ

265

奴は武器の山からマシンガンを取り上げた。ただの銃よりマシンガンのほうがいいってことだろう。くそ。やられる前にやらなければ。

▼殴りかかる ——————↓244へ
▼蹴りかかる ——————↓204へ

266

その時、フロアをゆるがすほどの大音響で警報が鳴った。
「警告。侵入者接近中、侵入者接近中！」
警報とともにスピーカーはそう言っていた。……いったい誰だ？　侵入者って？　オレはもうここまで来てるし……。他にも侵入者がいるのか。
オレがいぶかしんでいると、扉の向こうから地響きのような音が接近してきた……。
——どどどどどどどど……。

↓220へ

267

オレがバナナの束を渡すと、コングは嬉しそうな顔で「うほほほほい」と笑うと、急に真面目な顔になって狙いをつけた後、バナナを電子ロックに投げつけた。

「もったいない……」しまった、つい本音が。しかし、コングの投げたバナナの破壊力はすさまじいものだった。電子ロックは小さな爆発を起こし、白煙を上げた。**（弾丸1個マイナス）**

「うほほほほい！」コングは喜びの叫びを上げると、ど－んという音と共におりから出てきてオレに抱きついてきた。

↓228へ

268

エレベーターの扉が開いたとたん、レーザー光線が走った。

「ひょえー。よけててよかった」オレたちは最上階についた瞬間から闘いが始まることを予測していたので、ふたりとも端によけていたのだ。

オレは隠れながらフロアの中を見た。

そこに浮いているのは巨大なレーザー砲塔を備えた機械のかたまりだった。こいつがボスに違いない。

さて、オレとコングのどちらから先に飛び出すか。

▼オレが先に飛び出す――――↓234へ
▼コングに先に飛び出させる――――↓207へ

269

オレはエレベーターを地下に向かわせた。いったん登った40階を降りる。このエレベーターは速度が早いので、身体が浮いてしまうような気がする。これが超高速エレベーターって奴だな。
エレベーターは待つことなく、すぐに地下まで降りた。

↓214へ

270

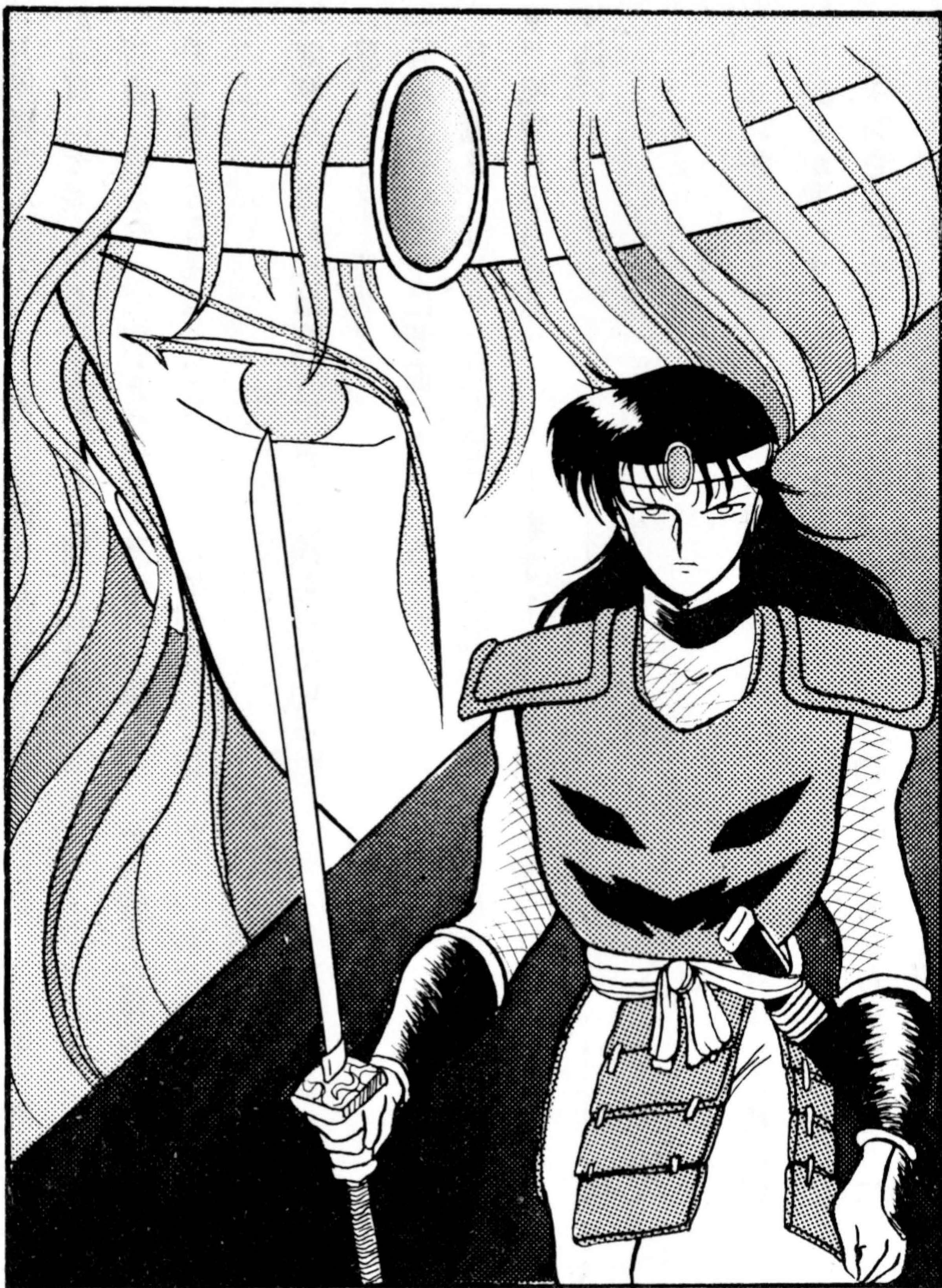
とっさに物影に隠れた。……しかし、ボスのレーザー砲の威力はすさまじく、オレは隠れて盾にしていたものごと吹き飛ばされてしまった。
オレの体力ポイントは15ポイント以上あるか？

▼ある――――↓237へ
▼ない――――↓222へ

271

先へ急ごうと思ったその時だった。
わたしたち3人の前にひとりの若者が立っていた。

２６９～２７１



271▶若者は何も言わずに腰の剣をいた。「月風魔さんなんでしょう？　わたしたちはあなたを助けにきたのよ」

「月風魔さん……?」わたしは何かおかしいと感じながら、シナモン教授に見せてもらった写真にそっくりな、その若者に問いかけた。

若者は答えない。何も言わずに腰の剣を抜いた。その虚ろな視線に殺気が走る。

「月風魔さんなんでしょう? なんで剣なんて抜くの? わたしたちはあなたを助けにきたのよ」

「無駄だ。こいつは魔力によって操られている」

「魔力……? 誰の?」

「恐らくワルダーに間違いないだろう」

月風魔さんはじりじりと近づいてくる。いったいどうしたらいいの?

▼月風魔をとらえる ――――――――↓313へ
▼相手を傷つけないように闘う↓284へ
▼逃げる ――――――――――――――――↓327へ

272

シモンさんは十字架を怪物の頭につきつけた。まだ人間の身体から抜け切れていない怪物は動きが取れず、よけることができない。

シモンさんの手の中で十字架は白熱した。怪物は強い光から逃れるように顔をそむけるが、頬の辺りから肉が焼け焦げてゆく。血肉の焦げるような嫌な匂いがひろがった。怪物

の身体は、まるで全身から空気が抜けてゆくように縮んでいった。
やがてシモンさんは十字架をしまうと、言った。
「こいつの呪いは完全に解くことができない。しかししばらくは動けないだろう。この間に手裏剣を取って行こう」
マイキー君が頷いて手裏剣を取って来た。わたしたちは店の外へ出た。

↓299へ

273

「う……お前たちはいったい誰だ！」
しばらく時間がたち、月風魔さんはやがて目を覚ました。わたしたちを見て声を上げる。
「よかった。呪いが解けたのね」わたしは思わず歓声を上げた。
「わたしたちはあなたを助けに来たの。わたしはレディ……あ、縛ってごめんなさい。今解いてもらうわ」わたしは名乗ると、シモンさんに彼のムチを解いてもらった。
それから、シモンさんとマイキー君を紹介し、月風魔さんがワルダーに操られていたこと、ワルダーの野望と、わたしたちの使命を説明した。
「そうですか。それはすまないことを致しました。私も協力させていただきましょう」
「ありがとう。……この地獄を支配してるやつはどこにいるの？　まずそいつを倒さなきゃ！」

「私が案内しましょう。ついてきてください」
月風魔さんが前に立って歩き始め、わたしたちはついて行くことにした。

↓321へ

274

「お姉ちゃん。コンディションはオールグリーンだよ！」
「オーライ。それじゃあ行くわよ！」ナビシートについたマイキー君が手伝ってくれ、私はビッグバイパーを発進させた。
エンジンがスタートすると、身体の奥から伝わってくるような振動と、ジェットの鈍いうなりが聞こえてくる。ジェットのうなりは急速に激しくなってゆき、最高潮に達したとき操縦桿（かん）を引いた。
強烈なGが身体をシートに押さえつけた。意識が遠くなり、目を開けているのさえ困難になる。コンピュータが操縦を継続してくれなければわたしたちは宇宙のも屑（くず）となっていただろう。——宇宙に行くことさえできなかったかも知れない。
激しいGに長い間耐えた後、ビッグバイパーの船外モニターには大気に邪魔されない、紛れもなく満天の星が映された。

↓294へ

275

月風魔さんの姿が完全に消えてしまって、わたしたちは3人で相談した。
「月風魔さんがあんな状態なんて……いったいどうしたらいいのかしら……」
「本当にあの人も仲間なの？　なんだかすごく怖い顔してたよ」
「ああ、マイキー君それは間違いない。彼はただワルダーに操られてるだけなんだ。……とりあえず、彼を捕えることができれば俺になんとかできるかも知れない」
「本当？　シモンさん」
「ああ、ただ、どうやって彼を捕えるかが問題なんだ……」
「ねえ、こんなところで話し合っててもしょうがないから、とにかくあの山に向かって歩こうよ」
「そうね、とりあえず先に進みましょう。歩きながらでも話しはできるわ」
マイキー君の意見にしたがい、わたしたちは先へ進むことにした。

↓286へ

276

敵機は5機。ワルダーの護衛戦闘機だ。
シモンさんの担当しているレーザー、そして月風魔さんの担当しているミサイルがいっせいに火を吹いた。2本の光条と4発のミサイルは、次の瞬間4機の敵機を撃墜していた。

残りの1機はいまので錯乱したのか、猛スピードでツインビーに突進して来た！
「だめだ、レディ、今からじゃ攻撃しても巻き込まれる！」
シモンさんの声が通信装置から聞こえてきた。
「まだ手はあるわ。マイキー君、がんばって！」
「オーケー！」
モニターに映る敵機が眼前に迫る。あわや衝突……その瞬間、マイキー君がボタンを押した。ツインビーの機体両側にある腕の、右腕の方が伸び、敵機の鼻面に当たった！ぐしゃりという音が船内を伝わってきて敵機は潰れ、ふっ飛んだ。
後方を飛ぶコナミマンさんたちのビッグバイパーの活躍する暇もなく、敵機はすべて消滅した。

↓290へ

277

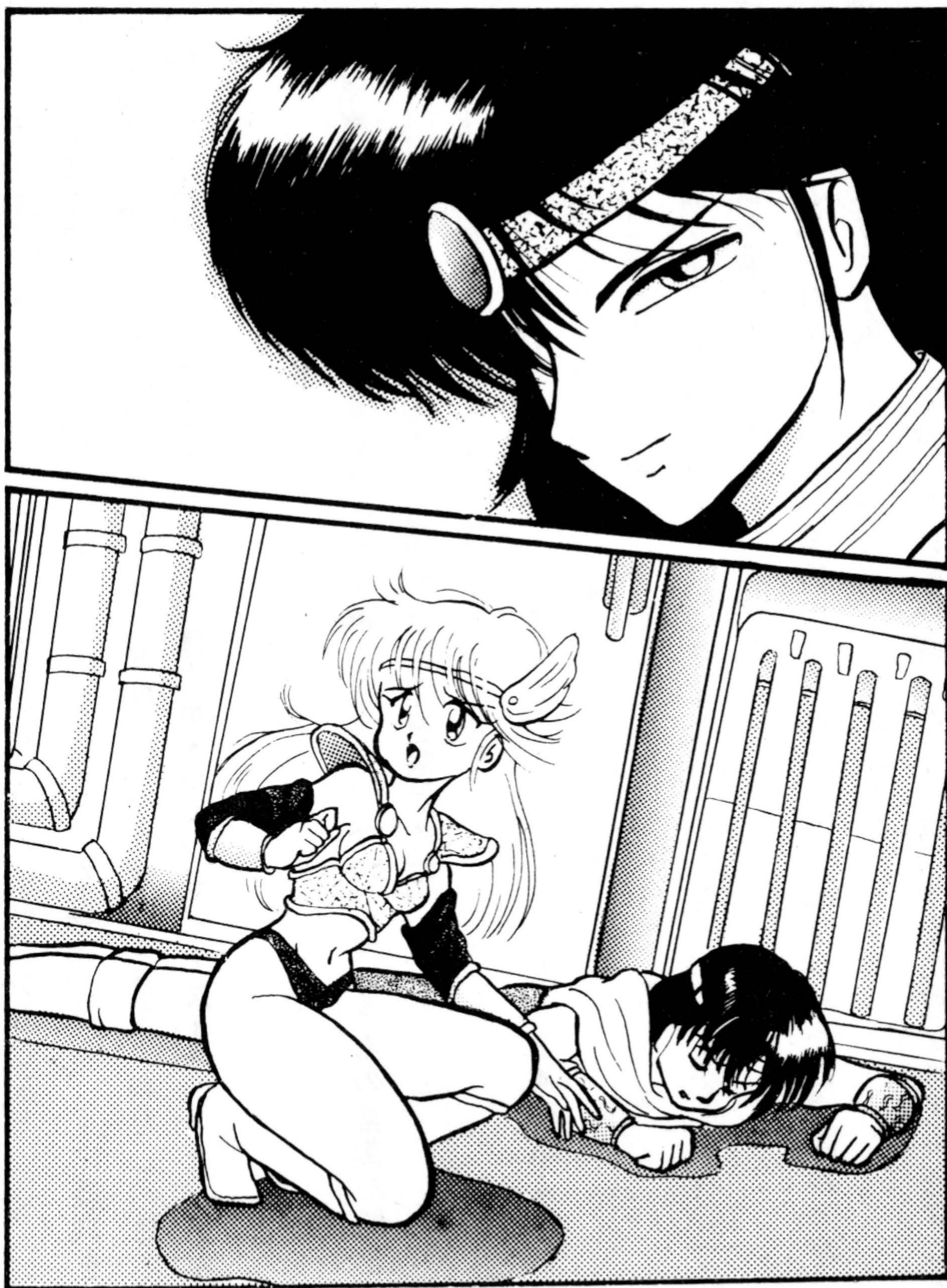
「えいっ！」わたしは巨大いも虫に蹴りを喰らわせた。
表面の皮が柔らかく、わたしの足はずぶりと、いも虫の身体にめりこんでしまった。
「やだ、気持ち悪い！」どろどろといも虫の体液が流れてきて、足が汚れちゃう。
げるるる……。その時、いも虫の身体がぱくりと割れて、小さな生き物が顔を出した。
……どうやら、いも虫の体内に寄生していたらしい小鬼は、私に視線を向けてにやりと笑

った。足を抜こうとしても抜けない。小鬼がわたしの足をつかんでる！
――シモンさんがムチで助けてくれるのが、少しでも遅かったら、足に怪我をしたくらいではすまなかっただろう。危機一髪の瞬間、ムチが走ってきて、わたしの目の前で小鬼の頭がはじけた……。（コナミレディの体力ポイント、マイナス４）

↓２８８へ

２７８

月風魔さんの宇宙服を着る動きが一瞬止まった。今のシモンさんの言葉が的を射ていたのだ。――しかし、月風魔さんは再び宇宙服を着始めた。
「待てよ、月風魔！　そんなことはオレがさせない……ぐっ！」
再びシモンさんは月風魔さんにつかみかかった。……しかし、月風魔さんは目にも止まらぬスピードでシモンさんの腹に一撃をくらわしていた。
シモンさんは崩れるように倒れた。わたしは駆け寄ろうとした……。
「レディ。君が来るなら私は君まで眠らせなくちゃならない。どうか来ないでくれ。これでも子守り歌を歌うのは結構苦手なんだ」
月風魔さんはヘルメット以外の宇宙服を着終えると、エアロックに歩み寄った。彼はそこでわたしに笑いを向けると、ヘルメットをかぶった。
「待って！」わたしがエアロックに駆け寄ったときは、すでに彼がエアロックに入って気



278▶「レディ、君が来るなら私は君まで眠らせなくちゃいけない。これでも子守り歌を歌うのは結構苦手なんだ」

２７９～２８０

圧を下げ始めた後だった。厚くて窓の無い扉の向こうから空気の流れ出る音が聞こえてくる。
「それじゃあ……」……そんな声が聞こえたような気がした……。
船外のエアロック扉が開く音がして、そして閉まった。
わたしは頬に冷たい液体が流れるのを感じていた。膝が砕け、床に膝と手をついた。
床に水滴が落ちるのが見えた。

↓３２９へ

２７９

わたしたちの前に、またもや気色の悪い怪物が出現した。とりあえず人間の姿をしたその敵は、文字通り地獄の責め苦を受けたのか、顔の肉が溶けたように崩れていた。
そいつは槍のような武器を持ち、こちらにやって来る。どうしよう？

▼マイキーの武器としてパチンコを持っていて、それを使う ―― ↓３２５へ

▼持っていない。（弾丸を2個以上持っていない。あるいは使わない）―― ↓３１７へ

２８０

わたしはヒートガンを撃った。立て続けに5発。熱線はエンマ大王の顔に命中する。

（弾丸5個マイナス）

エンマ大王が痛みにうめいたとき、月風魔さんに変化が生じた。めまいがしたように膝

をついた。
「む……私は……いったい……」
「月風魔さんの呪いが解けたわ！」私は思わず歓声を上げた。エンマ大王が悔し気な表情を浮かべる。月風魔さんはわたしたちに気づくと、状況を把握した。

↓303へ

281

「待って、シモンさんこの人の言ってることに嘘はなさそうだわ」
「ああ。オレもそう思う」
「ねえ、こいつに月風魔さんのところまで案内させようよ」
「そうだな、それがいい」シモンさんは怪人にとどめを刺すのを止めると、マイキー君の意見の通りに怪人に月風魔さんのところまで案内させた。
怪人は思ったよりも従順だった。怪人はこちらの注文通り無傷で月風魔さんを捕まえられるよう案内してくれたので、月風魔さんを捕えたわたしたちは、そいつを自由にしてあげた。
月風魔さんは暴れてうーうー唸るばかりで、話しをすることすらできない。
「オレに任せてくれ、レディ」シモンさんはそういうと、縛りつけた月風魔さんの前に立った。

↓296へ

282

わたしはエンマ大王の向こう脛を思い切り蹴った。まるで大木を蹴ったような衝撃があった。**（コナミレディの体内ポイント、マイナス5）**
しかし、効果は確かにあった。エンマ大王は痛みにうめくと、仰向けに倒れた。
――その時、月風魔さんに変化が生じた。

⬇318へ

283

シモンさんの武器として十字架を入手しているか？　ただし、弾丸が3個以上なければ使用することはできない。

▼入手している――――――――――――――――――――⬇298へ
▼入手していない（または弾丸が足りない）――――――――⬇308へ

284

シモンさんのムチが空を切り裂いた。それはすさまじいスピードで月風魔さんの身体を捕らえ、がんじがらめに絡みついて動きを封じた。
月風魔さんは暴れまわるが、ムチは少しもゆるまず、わたしたちは月風魔さんを傷つけることなく捕えることができた。

「どうするの？　シモンさん」

「オレに任せてくれ。彼にかけられた呪いは解くことができるはずだ」

↓296へ

285

私はエンマの足元までやってくると、次の瞬間膝蹴りをエンマの脛に決めていた。

エンマの足はまるで巨木のように太かったが、私の膝蹴りの破壊力はそれをものともしなかった。

エンマの膝の骨は完全に砕け散っただろう。奴はもんどりうって倒れた。このまま攻撃を決め続けることができれば、エンマを倒すことができる！

↓310へ

286

しかし、わたしたちは話しを続けることはできなかった。行く手にまた新たな敵が現れてしまった。今度は、巨大ないも虫のような怪物。たいして強くはなさそうだが……。シモンの武器として十字架を入手しているか？

▼入手している ↓315へ

▼入手していない（または弾丸を2個以上持っていない。入手していても使わない場合） ↓277へ

２８７

月風魔さんは剣でエンマに斬りかかった。……しかし、どうやらエンマはその攻撃を予想していたようだった。向かってくる月風魔さんに思い切り息を吹きかけたのだ。

すさまじい強風があたりを渦巻いた。月風魔さんは吹き飛ばされて地に打ち据えられてしまった。**（月風魔の体力ポイント、マイナス10）**

現在マイキーの体力ポイントは20ポイント以上あるか？

▼ある ――――――――↓３１２へ▼ない ――――――――――↓３００へ

２８８

「あ〰ん、気持ち悪かった……」

わたしはぶるっと身震いを感じて、思わず呟いた。

いも虫を倒したわたしたちは、そのまま先を急いだ。わたしとしては、早くいも虫の死骸から立ち去りたくもあった。

道を進んでゆくと、ふたつに分かれていた。どちらから目的の山にたどりつけるのかは見当もつかない。どっちから進もうか。

▼右へ進む ――――――↓２７９へ▼左へ進む ――――――――↓３１９へ

289

エンマ大王との闘いを終えたわたしたちは、改めて月風魔さんと手を取りあって喜びあうと、シナモン教授に連絡を取った。

これで仲間はみんな助け出すことができた。コナミマンさんの方も終わっていれば、ヒーローが全員揃う！

わたしたちはシナモン教授の研究所に次元転送された。

↓322へ

290

敵機を撃墜してやっとひと息つけると思ったら、またマイキー君が叫んだ。

「またもやレーダーに反応有り。今度のはひとつだけど大きいよ！」

「本当！……とうとうワルダーのところまでやってきたんだわ……」

わたしの呟きに、機内が静まりかえった。

↓311へ

291

シモンさんの手から十字架が2発放たれた。回転しながら飛ぶ十字架は、独眼独頭の肉をえぐり取ってめり込んだ。もう一方の十字架は、ひとつ目の水晶体を直撃する。

独眼独頭の苦痛のうめき声があたりをゆるがす。**（弾丸2個マイナス）**

十字架が独眼独頭の中で白熱した。傷口から光が漏れて、それと分かる。光が段々強くなるのと一緒に、その叫び声も激しくなってゆく。
瞬間、光が爆発した。……そして、奴のいた空間には何も残っていなかった。十字架の聖なる力で呪いを解かれたのだろう。

↓３２０へ

２９２

「こんな攻撃ではあの戦艦を破壊することはできない」
通信機から、だし抜けに月風魔さんの声が聞こえてきた。その声には、何かを決心した響きがあった。わたしは悪い予感がして、機をワルダー戦艦の攻撃の死角に飛ばすと、マイキー君に操縦を任せて攻撃シートに向かった。
月風魔さんのミサイル攻撃シートには、すでにシモンさんがやってきていた。
月風魔さんは今宇宙服を着ている最中だった。
「何をする気だ、月風魔！」シモンさんが月風魔さんにつかみかかった。
「離せよ」月風魔さんは答えようとしない。穏やかにシモンさんの手を払いのけただけ。
「月風魔。オレには分かるぞ。お前の考えてることが……お前あの戦艦にひとりで突っ込んで行くつもりだろう！」

↓２７８へ

293

もお、やんなっちゃう。また分かれ道だわ。もう山も目の前だっていうのに……いったいどっちに進めば山につくのかしら。

▼右に進む ――――――――――――――――――――― ↓302へ
▼左へ進む ――――――――――――――――――――― ↓323へ

294

「お姉ちゃん、レーダーに何か映ってるよ！　敵かも知れない」

ナビゲーター席でレーダーを見ていたマイキー君が声を上げた。

「敵だわ！　戦闘に入るわよ！　シモンさん、月風魔さん、攻撃、お願いね！」

わたしは、攻撃シートについてるふたりに指示を送ると、機を急速旋回させた。

▼ビッグバイパーに乗っている場合 ――――――――――――――――――――― ↓309へ
▼ツインビーに乗っている場合 ――――――――――――――――――――― ↓276へ

295

「よくここまで来たな」突然、わたしたちは影に包まれ、上空から声が降ってきた。

「しかし月風魔は渡さん」

わたしたちに覆いかぶさるようにして立っていたのは、なんとエンマ大王だった。身長

5メートルに及ぶとも思われる巨体が私達の前に立ちふさがり、その足元には、月風魔さんの姿があった。
ヒートガンを使うか？　しかし弾丸が5個以上なければ使用することはできない。
▼使用する――――――――――――――――――――――――――――↓280へ▼使用しない――――――――――――――――――――――――――――↓316へ

296

それからシモンさんが始めたことは、わたしには理解できないものだった。
シモンさんは口元で何か呪文のようなものを呟きながら、胸で十字を切った。――それを何度も続けてゆくと、月風魔さんに変化が生じてきた。
月風魔さんは苦し気に暴れまわった。彼を縛っているムチがぎしぎしと音を立て、今にも切れそうだ。
「大丈夫なの？　シモンさん……」わたしはおそるおそる聞いてみた。
「大丈夫だ。すぐに収まる」
シモンさんの言葉通り、月風魔さんはすぐにおとなしくなった。力が抜けたようにぐったりとしている。
「これで呪いは解けたはずだが……」シモンさんは呟くように言った。
↓273へ

297

わたしが買わないと言ったとたん、店の主人の態度が豹変した。
いや、豹変したのは態度だけではなかった。
身体中に深い亀裂が走った。水が沸騰するときのような気泡が皮膚にいくつも発生した。腹が痛むように身体を折ると、背中の一部が盛り上がり始め、血がにじんできた。
「ぐおおおお……」絞り出すような声が主人の口から漏れる。
「下がっていろ」シモンさんがわたしとマイキー君の前に立った。
背中の盛り上がりがさらに大きくなり、主人の身体全体がおこりにかかったように震える。そして次の瞬間、その背中が爆発した。一瞬にして視界が真っ赤に染まる。
背中から血の固まりをどろどろ滴らせた不気味な顔が生えていた。真っ黒な口が開き、笑いを形造る。肉の裂ける音が大きくなり、背中の裂け目が大きくなってゆく。腕が出てきた。血管や神経繊維が絡みついている。血管が切れさらに血が飛び散る。神経が切れたとき、元の人間の身体がぴくりと震えた。
「くそっ、悪霊め」シモンさんは呪文を唱え始めた。手で十字を切っている。
シモンの武器として十字架を入手しているか？

▼入手している　――――　↓272へ
▼入手していない　――――　↓304へ

２９８

シモンさんの放った十字架がエンマ大王の肉をえぐった。**（弾丸2個マイナス）**
十字架の持つ聖なる力が肉を焼き焦がす。
「ぐおお……」エンマ大王の苦痛のうめき声が響きわたる。左腕、右肩、腹部に受けた十字架はかなりのダメージを与えているようだ。
次の攻撃で勝敗が決する！

↓３１０へ

２９９

「さあ、先を急ごう」シモンさんが、まださっきの怪物のショックから抜け切らない私の肩を抱いて進み始めた。わたしはさっきの怪物のあまりの不気味さにちょっと錯乱状態に陥ってしまったのだ。
なんとか正常に戻ったわたしは、シモンさんに肩を抱かれていることに気づいて恥ずかしく感じた。もしかしたら顔が赤くなっていたかも知れない。

↓３２８へ

３００

マイキー君がエンマに闘いを挑んだ。
しかし、わたしたちの中でいちばん戦闘能力が低い彼の試みは無謀でしかなかった。マ

イキー君は、エンマに向かって突き進む途中で巨大な手に捕まれてしまった。
「マイキー君！」私は思わず叫んだ。……しかし、どうすることもできなかった。
エンマの握力は凄じいものだったに違いない。マイキー君の顔が苦痛に歪んだ。
……そして、マイキー君の断末魔があたりにこだました。
エンマが手を緩めて、マイキー君の身体は落下した。……しかし、マイキー君が再び起き上がることはなかった。私の意識は切れたように暗黒に包まれた。

GAME OVER

３０１

シモンさんのムチがエンマ大王の足に絡みついた。エンマ大王はバランスを失って後ろに倒れる。わたしはすかさず頭の方にまわりこむと、一撃必殺の蹴りをお見舞いした。
エンマ大王のテンプルを直撃した蹴りは大きなダメージを与え、苦し気なうめき声が漏れた。
——その時、月風魔さんに変化が生じた。

↓３１８へ

３０２

分かれ道を右に進んだわたしたちは、しばらく険しい道を進むことになった。気味の悪

いぐねぐねと回る道の先で目的の山はどんどん近くなってゆく。
「どうやらこの道でよかったみたいね」わたしは安心してふたりに言った。
「あ、ついたみたいだよ。お姉ちゃん！」マイキー君が前を見て叫んだ。
マイキー君の言う通り、わたしたちは鬼の顔の形をした山の麓（ふもと）にたどりつくことができた。

↓295へ

303

「君たちはエンマを倒そうと言うのだな。私も協力しよう」
月風魔さんは腰の剣を抜いて、私達の戦列に加わった。

↓283へ

304

わたしはさっき手に入れたヒートガンを乱射した。ケケケ……と笑う不気味な怪物に連続で叩き込む。
しかし、怪物は死ななかった。弾丸は瞬く間に尽きた。**（弾丸数0）** 既に両腕が出現し、服を脱ぐように全身が現れようとしている。
「だめだ、レディ。こいつにかけられた呪いは俺にも解くことができない。逃げよう！」
シモンさんが叫び、わたしたちは店を飛び出した。

店の中から不気味な笑い声が伝わってくる。どうやら外までは追ってこないようだ。

↓299へ

305

「仲間も揃ったことじゃし、これであとはワルダーを倒すのみじゃや。苦しい闘いになるだろうが、これで最後じゃや。くれぐれも気をつけて頑張って欲しい。ビッグバイパーとツインビーの修理が終わり次第、二手に分かれて――今までの組み合わせのままでいいじゃろう――発進してくれたまえ。わしからは以上じゃ」

「教授！」

「なんじゃや、コナミマン」

「教授、オレたちも1度くらい女の子と一緒に行動したいよ！」

「何を言っとるんじゃや。……ん、なになに、ビッグバイパーとツインビーの修理が完了したのかね？　そうか。どうもありがとう。」

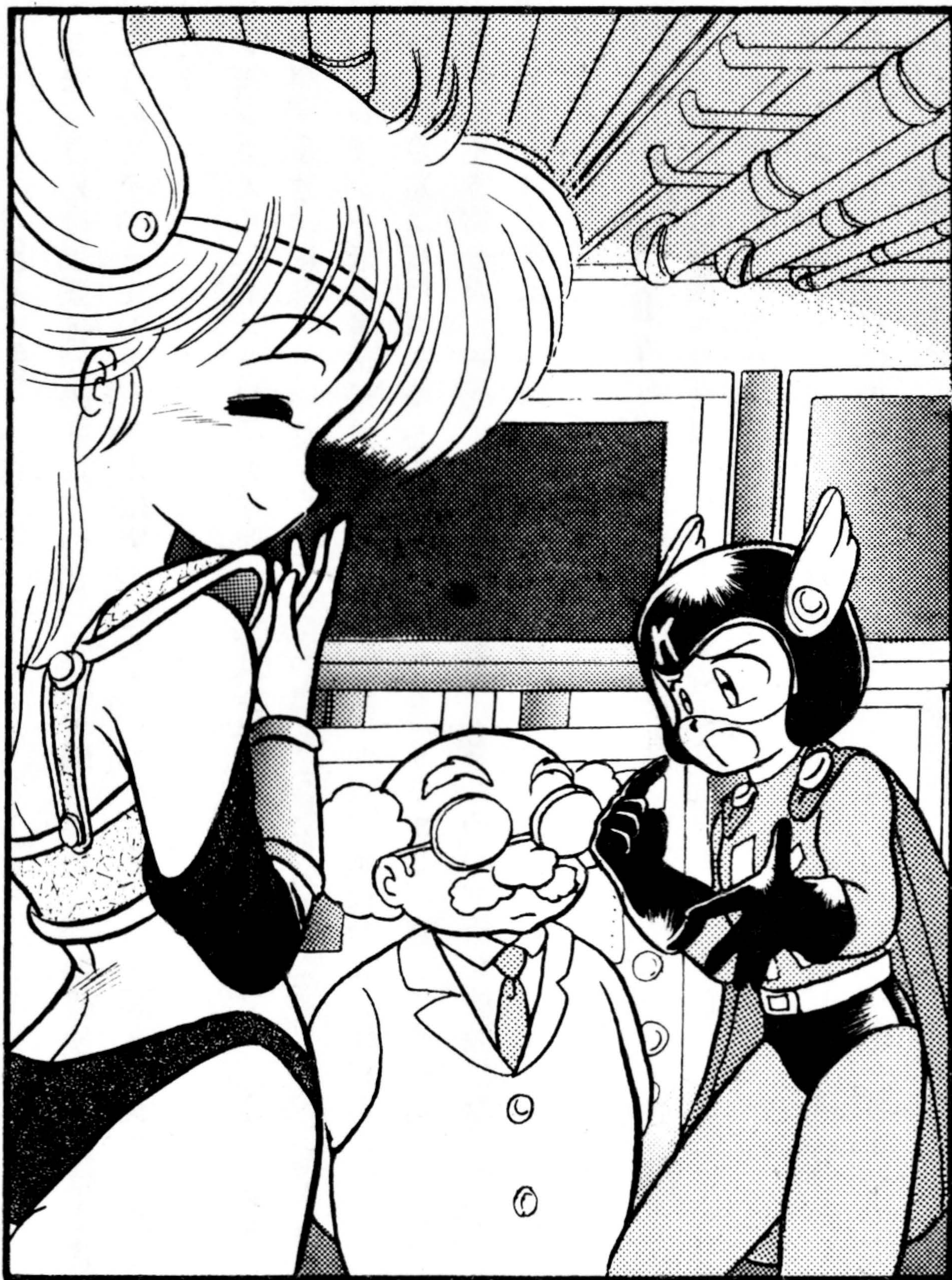
1匹のペンギンがペタペタとやってきて教授に耳打ちしたのだ。

「諸君、聞いた通りじゃや。ただちに発進してくれたまえ」

▼コナミマンを選択している場合――――↓350へ

▼コナミレディを選択している場合――――↓326へ

305



305▶「教授！」「なんじゃコナミマン」「オレたちも１度くらい女の子と一緒に行動したいよ！」

306

シモンさんは独眼独頭の前に立つと、呪文を唱え始めた。独眼独頭の方はと言えば、気にしないでそのままシモンさんに突っ込んでいった。その口を開き、シモンさんに噛みついた！

「シモンさん！」わたしは思わず叫んだ。**（シモンの体力ポイント、マイナス5）**しかし、次の瞬間事態は逆転していた。シモンさんの唱える呪文の調子がひときわ高くなった。……同時にシモンさんの身体がまばゆく輝き、独眼独頭が跳ね飛ばされる。

シモンさんは続けてムチを走らせた。ムチはすさまじい速さで奴を絡め、シモンさんのところに引き寄せた。近づいたところでシモンさんのパンチが炸裂した。呪文の力をともなって放たれた拳は、一撃で独眼独頭を粉砕した。

↓320へ

307

ツインビーに内蔵されたコンピュータが機の状況をモニターし、わたしはそれを頼りにエンジンをスタートさせた。

ツインビーのエンジンは急速にうなりを高めていった。コンピュータの指示にしたがって操縦桿（かん）を引くと、機体の後部で爆発が起こったような音がして急上昇を始めた。

わたしの身体は強烈なGによってシートに押さえつけられた。それがいったいどれくら

い続いたのか……。気がついたときには、船外モニターは大気に邪魔されることのない星空を映していた。

↓294へ

308

シモンさんのムチが空を切り裂き、エンマ大王の腕に巻きついた。
エンマは余裕の表情を浮かべ、ニヤリと笑った。シモンさんが気づいてムチを解いたときは、すでに遅かった。
エンマはすさまじい力で腕を降り回すと、ムチを手離してシモンさんを投げた。シモンさんはかなり離れた地面にきつく身体をぶつけてしまった。**(シモンの体力ポイント、マイナス6)**
「シモンさん！」私は夢中で走り出していた。

↓285へ

309

敵はワルダーの護衛戦闘機だ。数は5機。シモンさんの担当であるレーザーがまず発射された。敵機との距離はまだ肉眼で捕えられることができないくらいに離れている。
しかし、レーザーは正確に敵機を貫いた。敵機の残り4機が散開する。その中央で爆発が起こった。続いてレーザーは2発放たれた。散開したうちの1機に向かって伸びた2本

のレーザーのうち、1本は外れ、もう1本が命中した。残り3機。
高速で互いに近づいているので、もうすでに非常に近くまで接近している。
——次の瞬間、ビッグバイパーと敵機3機が擦れ違った。

↓399へ

310

月風魔の武器として手裏剣を入手しているか？　ただし、入手していても弾丸が4個以上なければ使用することはできない。

▼入手している ————↓324へ
▼入手していない ————↓287へ

311

ビッグバイパーのレーザー、ミサイル、ツインビーのレーザー、ミサイル、そしてモアイのイオンリングがたて続けにワルダー戦艦を襲う。
しかし、大きさにして50倍近く違うので、ちょっとやそっとの攻撃でハンディを越えて勝てるはずがなかった。攻撃が効かないと分かると、ビッグバイパーもツインビーも、ほぼワルダー戦艦の攻撃をよけるだけとなってしまった。なんとかしなければこの戦艦を破壊することができない。……それどころか逆にやられてしまう。

▼コナミマンを選択している場合 ————↓356へ

▼コナミレディを選択している場合 ―――――――――― ↓２９２へ

３１２

マイキー君がエンマに闘いを挑んだ。

マイキー君は迫るエンマの腕に、身軽さを利用してひょいとのっかると、そのまま頭に向かって駆け登った。

不安定な上を一気に駆け登り、マイキー君は両腕をいっぱいに利用してエンマの首を締め始めた。

エンマはなんとかマイキー君を振り落とそうとする。私はそうはさせないと、蹴りを放ってエンマの注意を反らした。やがてエンマは呼吸困難に陥って仰向けに倒れた。

そこへシモンさんがムチでとどめを刺した。わたしたちは、マイキー君の活躍でエンマを倒すことに成功したのだった。**（マイキーの体力ポイント、マイナス15）** ↓２８９へ

３１３

しかし、わたしたちの行動は完全に読まれていた。月風魔さんはくるりと向きを変えてそのまま走りさってしまったの。

月風魔さんの走る速度は驚くほど速かった。わたしもシモンさんも、あとを追おうとし

たけど、ついて行くことさえできなかった。

↓275へ

314

「へっへっへ。ありがとうございます」

わたしが買うと言うと、店の主人は揉み手をしながら笑みを浮かべて、手裏剣の束を渡してくれた。**（月風魔の武器として手裏剣入手、弾丸15個マイナス）**

わたしが休ませて欲しいと言うと、これもまた主人は快く承知してくれ、わたしたちは思いがけずに休むことができた。**（コナミレディ、シモン、マイキーの体力ポイント、それぞれプラス2）**

主人に礼を言うと、わたしたちは店を出て先へと進んだ。

↓328へ

315

シモンさんはすかさず十字架を放った。十字架はいも虫の表皮を破り、ずぶりと中にめりこんだ。いも虫の身体にめりこんだふたつの十字架はそこで白熱した。

肉の焼ける音がし、嫌な匂いがあたりにたちこめた。**（弾丸2個マイナス）**

しばらくたつと、いも虫はぐずぐずに崩れて跡形もなくなった。

↓288へ

316

ではどうやって闘う？

▼蹴りを放つ ――――――――――― ➡282へ
▼3人で協力して攻撃 ―――――― ➡301へ

317

わたしは、槍の攻撃をよけ、そのまま怪人に回し蹴りを放った。腹にわたしの蹴りを受けた怪人は、すさまじい勢いで後ろにふっ飛んだ。

しかし、今までの闘いから分かったのだが、この地獄の敵どもは私やマイキー君の力では息の根を止めることができないみたい。この怪人も、わたしの必殺のキックを受けて、ダメージを受けているもののとどめを刺すことはできない。地獄の生き物はすでに一度死んでいるので、呪いを解く聖なる力でないかぎり消滅させることができないのだ。

聖なる力を駆使できるのはシモンさんだけだ。彼は以前の闘いから十字架の聖なる力を駆使してきている。神の加護がともにあるのだ。

シモンさんはそれに気づき、怪人にとどめを刺そうとした……。

「ま、待ってくれ、何でも言うことを聞くから……」

怪人は突然命乞いを始めた……。どうもその言葉に嘘偽りはないようだ。➡281へ

318

月風魔さんはめまいがしたように膝をついた。ふいに意識を失ったようにも見えた。しかし、次の瞬間意識を取り戻した。

「わ……わたしはいったい……」

「やったわ、月風魔さんの呪いが解けた！」私は喜びのあまり歓声を上げた。

月風魔さんはこちらに視線を向けると、エンマ大王と闘っているわたしたちを見て状況を理解したようだった。

↓303へ

319

わたしたちの前に、また新たな敵が現れた。

今度現れた敵は、巨大な生首。それも、ひとつの目の生首だ。そいつは兜をかぶっている。そういえば教授に聞いたことがある敵だ。独眼独頭という名前だったはずだわ。

見掛け倒しでそんなに強くないと聞いてる。

「オレに任せろ」シモンさんの声。わたしは頷いた。

シモンさんの武器として十字架を入手しているか？　弾丸が2個以上あってそれを使うならば、入手しているに進む。

▼入手している――――――――↓291へ

▼入手していない（または弾丸が足りない）――――――↓306へ

320

独眼独頭が消え去り、先へ進もうとしたわたしたちは、奴が現れた地点に小さな箱が置いてあるのを発見した。
何だろうと開けてみると、なんとその中にヒートガンがあるのを発見した！　わたしはそれを取りだし、持って行くことにした。これで少しは闘いが楽になるに違いないわ。**（コナミレディの武器として、ヒートガン入手。弾丸2個プラス）**
わたしたちは先を急ぐことにした。

↓293へ

321

そして、わたしたちは鬼の形をした山にたどりついた。
「この奥に支配者はいます。覚悟して下さい」
わたしたちが答える前に、突然視界が暗くなるとともに太い声が降ってきた。
「覚悟する必要はない。その前に死んでもらおう」
わたしたちに覆いかぶさるようにして、ひとりの巨大な男が立っていた。
「エンマ様……。レディさん、この男がこの地獄の支配者です。数日前までは正義を志し

ていた立派な方だったのに……」

身長5メートル近い巨大な男、地獄の伝説の主人公とも言えるエンマ大王は、わたしたちの敵として前に立ったのだ……。

↓283へ

322

「おお、レディ、帰ってきたか。ご苦労じゃったのう。ちょうどさっきコナミマンたちも帰ってきたところじゃ。これで8人のヒーローたち……いや、違ったの。7人のヒーローとひとりのヒロインが揃ったことになる。

すぐに作戦会議を始めるからの。ここで休んでなさい」

（ここで体力ポイントか、または弾丸を補充することができる。補充できる数は25ポイント。弾丸だけ25ポイント増やしてもいいし、コナミレディとシモンとマイキーと月風魔の体力を5ポイントずつ増やして、弾丸を5ポイント増やしてもかまわない。ただし、体力ポイントは30より多くすることはできない）

↓305へ

323

分かれ道を左に進んでしばらく行くと、小屋のような家があった。

「こんな所にいったい誰が住んでるのかしら」

「分からん。もしかしたらここで休めるかも知れん。入ってみよう」
シモンさんがそう言ったので、わたしたちはこの家を訪問してみることにした。
「いらっしゃい！」扉を開けたとたん、明るい声が聞こえて来た。
「ここは武器屋です。手裏剣を弾丸15個と交換でお売りしますよ」
なんと、ここは驚いたことに武器屋だったのだ。手裏剣を売ってくれると言っているが、どうしよう？

▼買う ―――――――――――――― ↓314へ

▼買わない（または弾丸が足りない） ―――――― ↓297へ

324

月風魔さんは次の瞬間手裏剣を放っていた。
4つの手裏剣は、エンマの顔と左胸を正確に貫いた。呪いを解く聖なる力をも持っている手裏剣は、すさまじい勢いでエンマを貫通した。**（弾丸4個マイナス）**
エンマの断末魔が辺りにこだました。
――そして、地獄に不気味な静寂が戻った。エンマは二度と起き上がることがなかった。

↓289へ

325

マイキー君のパチンコから、目にも止まらぬスピードで2発の弾丸が飛ばされた。弾丸は怪人の両手に、1発ずつ命中し、その痛みで怪人は槍を落とした。**(弾丸2個マイナス)**

どうやら地獄に住む者どもは、マイキー君のパチンコで息の根を止めることはできないようだ。すでに死んでいるものたちの中なので、呪いを解かないかぎり無理らしい。

そういった力を持っているのはシモンさんだけだ。彼には神の加護がついている。

シモンさんが怪人にとどめを刺そうとしたその時だった。

「ま、待ってくれ、何でも言うことを聞くから……」

怪人は突然命乞いを始めた……。どうもその言葉に嘘偽りはないようだ。

↓281へ

326

「それじゃあ、レディたちはどっちの機に乗るかね？」教授はそう聞いてきた。わたしたちが先に選んでいいみたい。どっちに乗ることにしようかなあ。

▼ビッグバイパーに乗ることにする ―――――― ↓274へ

▼ツインビーに乗ることにする ―――――― ↓307へ

327

「月風魔さんと闘うわけには行かないわ。ここは逃げましょう」
わたしはシモンさんとマイキー君の手を引いて逃げ出した。地面の激しい起伏で見え隠れしながら月風魔さんは追ってくる。わたしは、月風魔さんの死角に入ったところであいこちにごろごろと転がっている岩陰に飛び込んだ。
岩陰で息を潜めていると、やがて月風魔さんは近くまでやってきた。……しかし、わたしたちの姿を発見できないし、大きな岩があちこちにいっぱいあるので、探しもせずにそのまま通り過ぎていってしまった。

↓275へ

328

「お姉ちゃん、着いたよ！」
マイキー君が叫ぶように言った。わたしたちはやっと、鬼の顔の形をした山の麓(ふもと)にたどりつくことができたのだ。

↓295へ

329

「お姉ちゃん、どうしたの？」繰縦席に戻った私とシモンさんは、心配そうなマイキー君に迎えられた。……わたしには何も答えることができなかった。

わたしは船外モニターを見つめた。
小さな人影がワルダー戦艦に向かって落ちてゆくように見えた。
「ねえ、月風魔のお兄ちゃんは、お兄ちゃんはどうしたの！」マイキー君が何かを感じて叫んだ。シモンさんが無言でモニターの人影を指で示した。
「そんな……無茶だよ！　なんで……」マイキー君からも言葉が失われた。
わたしたちは無言でモニターを見つめることしかできなかった。
永劫に近い時間が流れた。
ワルダー戦艦は閃光に包まれ、新星のように輝いた。
わたしは顔をそむけた。機械の自分に流せるとは思えない涙を、どうしても止めることができなかった。

↓377へ

330

オレたちはイースター島にやってきた。写真でよく見る通り、なんのためにあるのかさっぱり分からないモアイが、み一んな同じ方向を向いて立っている。
「すごいなあ……」オレは思わず呟いた。見れば、ゴエモンもコングも無言でモアイを眺めている。きっと彼らもこのモアイに感銘を受けているのだろう。

↓347へ

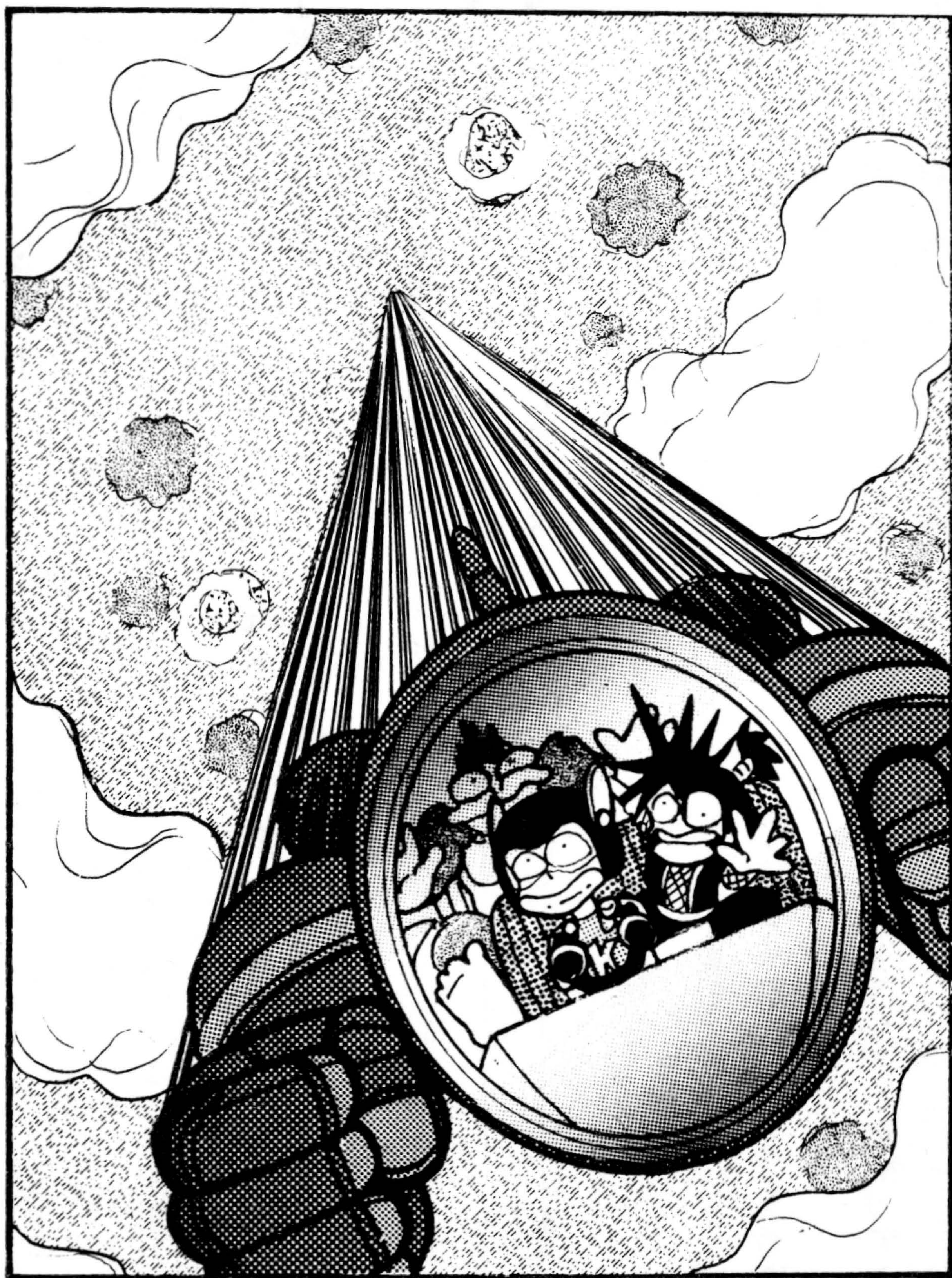
３３１

「だめだ。みんなで協力して闘ったほうがいい！」
オレがそう叫んだのと同時に、ブラックモアイは口からイオンリングを発射してきた！
「危ない！」オレは叫んだが、ホールの中では大きく逃げ回ることができない。爆発に巻き込まれてしまった。**（コナミマン、ゴエモン、コング、モアイの体力ポイント、それぞれ3ポイントマイナス）**
このままではやられてしまう。
オレは自分の武器としてレーザーガンを入手しているか？

▼入手している――――――――――――――――↓３７２へ
▼入手していない（または弾丸を3個以上持っていない）――――↓３４６へ

３３２

「それじゃあ発進しますよ。いいですか。Gが大きいから注意して下さいね」
ツインビー搭載のコンピュータ、アフロディテちゃんがそう警告すると、次の瞬間ツインビーは急速発進していた。
とたんにのしかかってくるすさまじいG。操縦はアフロディテちゃんがやってるからいいのだが、口をきくどころか目を開けてることすら困難だ。



332▶　とたんにのしかかってくるすさまじいG。目を開けてることすら困難だ。

３３３〜３３４

次元転送機の苦痛が生易しく思えるくらいGに堪え、ツインビーはやっと宇宙に出た。
「ぜえはあ……アフロディテちゃん、もうちょっと穏やかに発進して欲しかったなあ」
「あらあ、これでも精一杯おしとやかにしたつもりだったのよ」
「うーむ」オレはまわりを見回してみて飽きれかえった。コングもゴエモンも今のGショックで気を失っていたのだ。情けない。こんなところを敵に襲われたらどうするんだ。
「みんなよくおやすみですね」
今の台詞（せりふ）は、アフロディテちゃん。それどころじゃないっつーの。

↓３５２へ

３３３

ゴエモンがすかさずくらげの化け物に小判を投げた。３発たて続けに投げられた小判は見事にくらげの化け物を貫いた。**（弾丸３個マイナス）**
くらげの化け物は、洞窟の地面に落下すると、溶けるように崩れてゆき、地面に吸い込まれていった。

↓３６８へ

３３４

「闘うって、あれが仲間のモアイかも知れないじゃないでござるか」
ゴエモンがもっともな抗議をしてきた。どうしたらいいんだろう。

▼敵かも知れないので闘う ――↓349へ▼やっぱり逃げる ――――↓359へ
▼しばらく様子を見る ――――――――――――――――――――↓370へ

335

神殿までやってきたとき、突然まわりのモアイに変化が生じた。突然モアイたちが口を開くと、そこからイオンリングを発射して攻撃してきたのだ！
オレたちはイオンリングをよけながら神殿から離れた。――とたんに攻撃はぴたりと止まる。
「こりゃだめだ。とにかくまわりを歩き回って探してみることにしよう」
オレたちはさっきの攻撃で軽いながらもダメージを受けていた。強行突破はあまりにも激しい攻撃のためできそうにない。**（コナミマン、ゴエモン、コングの体力ポイント、それぞれ3ポイントずつマイナス）** ↓362へ

336

持ってる武器を使うか？　使う場合で、２種類以上持っている場合は、その中のどれを使うか選択する。
▼レーザーガンを使う ――↓366へ▼まねきねこを使う ――――↓373へ

▼バナナを投げる——————————↓345へ
▼使わない（または弾丸を2個以上持っていない）——————↓357へ

337

オレはレーザーを発射した。敵機5機のうちの1機を打ち落とす。
しかし、操縦のほうがおろそかになった。敵機も同時に攻撃を開始していたのだ。ビッグバイパーが大きく振動した。**（コナミマン、ゴエモン、コングの体力ポイント、それぞれ5ポイントマイナス）**
なんとか機を立て直す。敵機は再び攻撃しに向かってくる。そのうちの2機が突然爆発した。——モアイだ。モアイがイオンリングで敵機を撃墜したのだ。
しかし、残りの2機がビッグバイパーの後ろに回り込んでいた。
——やられる！　そう考えたとき、その2機が爆発した。同時に通信モニターがつく。
「ごめんなさい、遅くなって。大丈夫だった？」コナミレディだった。ツインビーが追いついてあの2機を撃墜してくれたのだった。
↓354へ

338

「あたし、あなたたちの捜してるモアイの恋人でモア子って言います。彼は今あの神殿に

捕っているの。お願い、助けてあげて。……それから彼に伝えて欲しいの。——モア子は何時までも待ってます……って」
モア子は例の独特の無表情のまま恥ずかしがって後ろを向いた。
オレたちは余りの意外な展開にしばらく口もきけない状態が続いたが、やがてなんとか立直り、神殿に入る方法をモア子さんに聞いてみた。

↓351へ

339

「コナミマン、とにかく先へ進んで行くしかないのでござるか」
ゴエモンは意外に落ち着いていたので、取りあえずまともな答えが出た。このままここへ立ち止まっていてもしょうがない。オレ、ゴエモン、コング、モアイのいつものパターンで先へ進むことにしよう。

↓364へ

340

モアイの口が開いた。オレはその瞬間悪い予感を感じた。
次の瞬間、悪い予感は実証された。開いたモアイの口から、光の輪が発射された。——イオンリング——モアイが反撃してきたのだ。
オレたちはなんとかイオンリングをよけることができた。……しかし、爆風に巻き込ま

れてダメージを負ってしまった。**（コナミマン、ゴエモン、コングの体力ポイント、それぞれ2ポイントずつマイナス）**

さらに攻撃を続けるか？

▼続ける————————————↓371へ

▼やめる（または弾丸が3個以上ない）————————————↓355へ

341

……ずごーん。……ずごーん。……モアイが1回頭突きをするごとに、石でできた扉にひびが走る。

そして、扉が粉々になった。

↓376へ

342

オレの脳裏に、また不吉な予感が通り過ぎた。

……ずーん。……ずーん。……また、あの音が聞こえてきた。

「なんだよーまた来るのかよー」オレはほとほとうんざりして呟いた。

音の方向に目を向けると、またもや不気味な光景を見ることができた。飛び跳ねながらこちらへ向かってくるモアイ。なんだか妙にシュールな気がした。

どうする？　また闘うか？

▼闘う――――――↓361へ▼逃げる――――――↓357へ

343

オレはコナミレディ機に無線を使って連絡した。

モニターには、涙を流したコナミレディが映った。まわりにシモンとマイキーは見えるが、月風魔の姿が見えなかった。

「コナミレディ、あの爆発はいったい……」オレは問いかけながら、返ってくる答えはなかった。コナミレディは堪えかねたようにシモンの肩に顔を埋めて泣き始めた。

「月風魔さんが……月風魔……さん……が……」嗚咽に混じってそう聞こえた。……月風魔が単身ワルダー戦艦に飛び込んで自爆したということは、最後まで聞かずとも分かった。

オレはコナミレディに何と声をかけてよいのか分からず、絶句した。

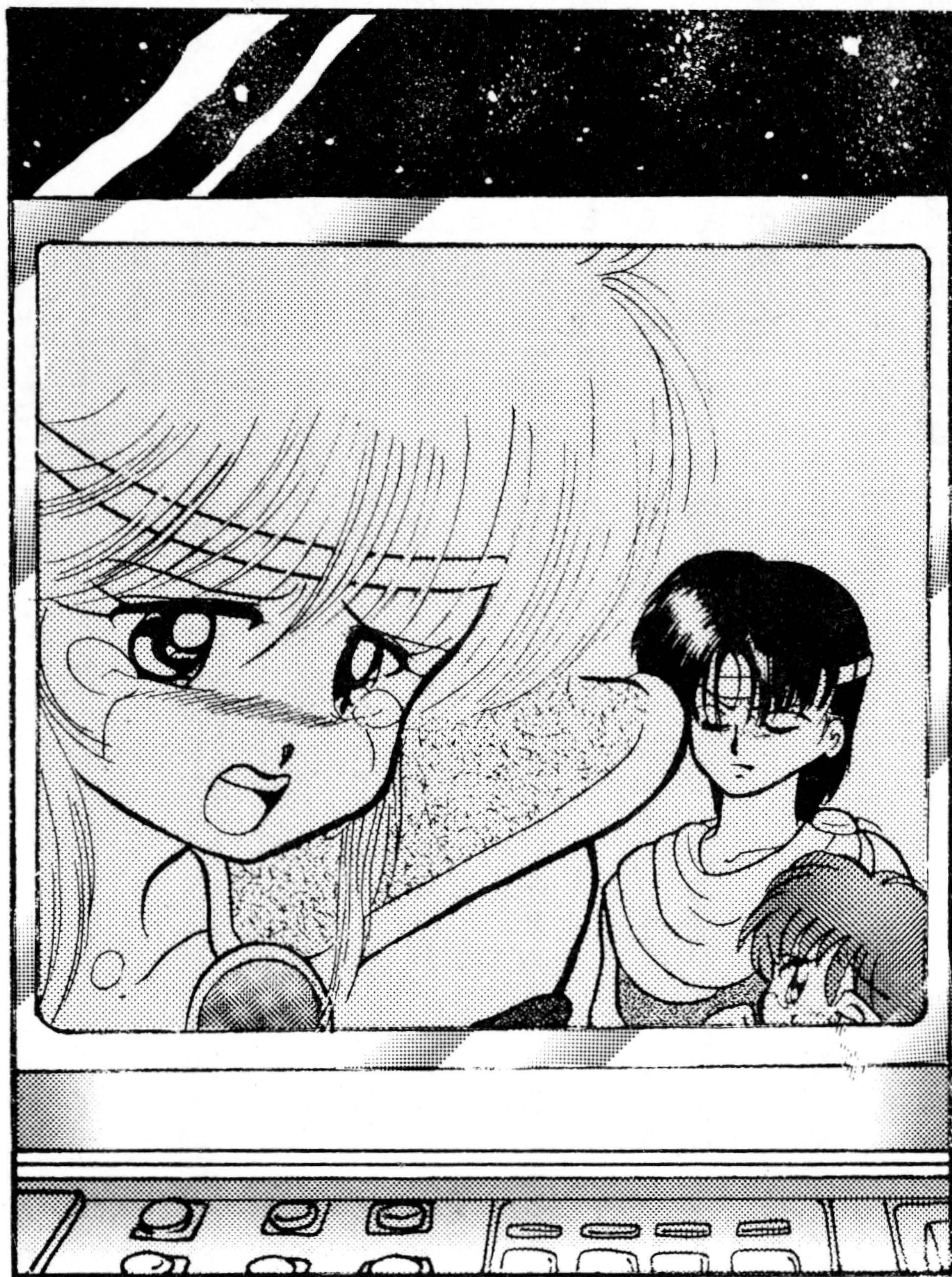
その時、ゴエモンが叫び声を上げげた。

「コナミマン、あれを見るでござる！」オレは言われた通りにモニターを見た。

ワルダー戦艦がいた空間に異変が起こっていた。オレは言いづらかったが決心して言った。

「大変だ、コナミレディ、気持ちは分かるが、ワルダー戦艦がいたところをモニターで見

343



343▶　モニターには涙を流したコナミレディが映った。シモンとマイキーは見えるが、月風魔の姿が見えなかった。

てくれ！　大変なことが起こっている！」

↓406へ

344

地下水路から中に入ると、巨大な石で壁も床も天井も造られた1本の通路に出た。オレたちは迷わずその通路を進んでゆく。

やがて通路が終わり、大きなホールに出た。

そして、このホールには足を鎖でつながれたモアイがひとりいた。目的のモアイに違いない！　オレたちは鎖を外した。モアイは最初なぜ鎖を外されるのかが分からなくてきょとんとしていた。

「オレはコナミマン。地球の平和を守る使者さ！」オレが名乗ると、シナモン教授から受けた使命と、モア子の伝言を伝えた。

「そうか……モア子ちゃんがそんな伝言を……コナミマンさん！　僕、がんばります！」

「そうはさせんぞ！」モアイが決意したとき、突如背後の壁が崩れてさらに巨大で、真っ黒いモアイが出現した。

「う、ブラックモアイ！　コナミマンさん！　こいつが僕をここに閉じ込めたんだ！　こいつは僕が倒したい！　いいですか？」

モアイは怒りに燃えた口調でそう言った。

▼モアイに任せる　――――――↓374へ▼みんなで協力して倒す　――――↓331へ

345

コングはバナナを2発続けて放った。バナナは弧を描いて飛び、モアイに命中した。(弾丸2個マイナス)
↓340へ

346

ブラックモアイは、オレたちに反撃の間を与えることなくイオンリング攻撃を続けた。モアイが同じようにイオンリングを発射して反撃したが、余り効果はなかった。……そして、逃げ回っていたオレたちにも遂に限界がきた。

体力に限界がきて動きが鈍くなった時に、イオンリングが直撃した。オレたちは一瞬のうちに蒸発してしまった。ブラックモアイに一矢むくいることもなく……。

GAME　OVER

347

「これじゃあどれが目的のモアイだか分からんでござるな」「うほうほ」

――ごてっ。オレは思わずこけてしまった。全く、感銘を受けてると思ったのに。

「なに考えてんだ全く……」
「それじゃあコナミマンはどれが目的のモアイだか分かるんでござるか？」「うほうほ」
「い……いや……それは……分からないけど……さ。探してみればいいじゃないか。……ほら、あそこに神殿がある。なにか怪しいような気がするぞ」
くそ。ゴエモンのいうのももっともだった。こんなにモアイが並んでいては、どれが目的のモアイだか分かるはずがない。
とにかくこのままボーゼンとしててもしょうがない。探してみることにしよう。このまま歩き回って探してみるか？　それとも神殿に行ってみることにするか？
▼このまま探してみる ———— ↓362へ
▼神殿に向かう ———— ↓335へ

348

「おお、コナミマン、帰ってきたか。ご苦労じゃったのう。ちょうどさっきコナミレディたちも帰ってきたところじゃ。これで地球を救う英雄が8人揃ったことになる。すぐに全員で作戦会議を始めるからの。ここで少し休んでなさい」

(ここで体力ポイントか、または弾丸を補充することができる。補充できる数は25ポイント。弾丸だけ25ポイント増やしてもいいし、コナミマンとゴエモンとコングとモアイの体力を5ポイントずつ増やして、弾丸を5ポイント増やしてもかまわない。ただし、体力ポ

イントは30より多くすることはできない）
↓305へ

349

しかしどうやって闘ったらいいんだろう。武器があれば、それに越したことはない。コナミマンの武器としてレーザーガン、ゴエモンの武器としてまねきねこ、コングの武器としてバナナの束。この中のどれかひとつでも入手しているか？

▼入手している ——— ↓336へ
▼入手していない ——— ↓357へ

350

「それじゃあコナミマン、ビッグバイパーとツインビーのどっちに乗るかね？　女の子は一緒に乗らんが、ツインビーには電子頭脳がついているので話をすることができるぞ。ああ、それからモアイ君は乗ることができんぞ。きみはちょっと身体が大きすぎるでな。すまんが自力で飛んで欲しい」

「ふん、ツインビーはともかくビッグバイパーには元から乗る気はないもん！」

さすがに自分の敵機であるビッグバイパーには恨みを持っているようだ。だが、そうも言ってられない。どっちに乗ることにするか。

▼ビッグバイパーに乗ることにする ——— ↓363へ

▼ツインビーに乗ることにする――
↓332へ

351

神殿に侵入するには地下水路を通っていくのがいいようだ。モア子さんはその地下水路の入り口を教えてくれると、やってきた時のように飛び跳ねてどこかへ行ってしまった。
「いったいあれは何だったのでござるか？」「うほうほ」
「オ、オレにも分からん。聞かないでくれ」
オレたちはなんとか精神的なショックから立ち直り、教えてもらった地下水路から神殿の中に入った。
↓344へ

352

ファン、ファン、ファン、ファン……。突然警報が鳴り渡った。とっさにレーダーを見る。敵影が5つ。コナミレディの機はかなり後ろだ。どうやって闘えというんだ。
「モアイ、頼む、援護してくれ！　こっちはみんな今の発進で気を失ってる！」
オレはくっついて船外を飛んでいるモアイに通信機で指示を与えると、操縦席の攻撃システムを起こした。
▼ビッグバイパーに乗っている場合――――――――――――――――――――――――――――――――――
↓337へ

▼ツインビーに乗っている場合

↓365へ

353

「やったーっ！」「やったでござるー！」「うほほほほーい！」「わーい！」

オレたちはみんなで喜びあった。

「ようし、それじゃあ、すぐにシナモン教授のところに戻ろう！」

「うむ」「うほ！」「うん！」

オレは教授に連絡を取ると、次元転送をかけてもらった。……しまった！

「うぎゃぎえーっ！」「どぐわーっ」「うぼぼぼぼーっ！」「えぎゃーっ！」

——モアイに次元転送のことを言い忘れてた……。

↓348へ

354

敵機を倒してほっとひと息ついたとき、またもや警報が鳴り始めた。警報はさっきよりも激しく気絶していたコングとゴエモンも起きた。

「とうとうワルダーの所までやってきたのか……」オレは思わず、ハードボイルドに呟いた。

↓311へ

355

「やめて！　あたし、あなたたちの敵ではないわ！」
てっきり敵だと思っていたモアイが、オレたちの眼前で止まってそう言った。
「お……女のひと……？」オレは余りの意外さにボーゼンとした。
「ごめんなさい。つい攻撃しちゃって……でも、あなたたちが先に攻撃してくるから……」
そのモアイは笑みのような表情を形造ると、3メートル近い巨大な頭を下げてあやまってくれた。オレたちもつられて頭下げる。しかしこんな巨大な頭を下げられると潰されるような気がして怖いよ。それに女のひとと言っても他のモアイと変わらないし、表情も変化があまりないから不気味でしょうがない

↓338へ

356

コナミレディの機が突然ワルダー戦艦の攻撃を避けて離れていった。攻撃を受けたのだろうか。
しばらく時が過ぎ、コナミレディ機のエアロックから何かが飛び出したように見えた。
——それは人間のように見えた。どんどんワルダー戦艦の方へと流れて行く。
いらいらするほどゆっくりと飛んで行くその人影がワルダー戦艦に辿りついたとき、突然ワルダー戦艦は閃光に包まれた。

↓343へ

３５７

「やめて！　あたし、あなたたちの敵ではないわ！」
てっきり敵だと思っていたモアイが、オレたちの眼前で止まってそう言った。
「お……女のひと……？」オレは余りの意外さにボーゼンとした。

↓３３８へ

３５８

「よし、これからが本当の戦いだ。行くぞ！　月風魔のかたきを打ってやる！」
オレはそう叫ぶと、機を発進させて空間の裂け目に向かった。コナミレディの機もすでに裂け目に向かっている。

↓４０８へ

３５９

「待って！」
オレたちが逃げ出すと、背後でモアイが叫んだ。そして次の瞬間、オレたちは背中にすさまじい衝撃を受けて前にふっ飛んだ。**（コナミマン、ゴエモン、コングの体力ポイント、それぞれ3ポイントずつマイナス）**
「あ、ごめんなさい。あたしが止めても聞いてくれないからしかたなく体当たりしたのよ。悪気があったんじゃないの。本当にごめんなさい」

そのモアイは、オレたちに体当たりをかましておきながら、あやまっていた。しかも、その声は可愛い女の子の声だった。なんなんだ、この展開は……。
「あたしは、あなたたちの敵じゃないのよ。話を聞いて」モアイの女の子は話し始めた。

⬇338へ

360

「キャアッ！」突然コナミレディが悲鳴を上げた。
洞窟の途中に突然落とし穴があったのだ。コナミレディはそれに落ちてしまった。
「レディーッ！」
シモンが閉じる穴に向かって叫ぶ。穴はすぐに閉じてしまった。助けようがない。
そんな時、突然敵が襲いかかってきた。巨大なくらげのような姿をした敵で、空中に浮かんで触手を伸ばしてくる。2匹もいる。
ゴエモンの武器としてまねきねこを入手しているか？　ただし、弾丸が3個以上ないと使用することはできない。

▼入手している ―――――――――――――――――― ⬇333へ
▼入手していない（または弾丸がない。使用しない）―――――――― ⬇367へ

361

どの武器を使うか？　さっき使った武器を再び使うことは、弾丸がまだあるならばできる。弾丸がなければ、武器を使うことができないので考え直して逃げることにする。

▼レーザーガンを使う ——— ↓366へ▼まねきねこで小判を投げる ↓373へ

▼バナナを投げる ——— ↓345へ

▼使わない（または弾丸を2個以上持っていない） ——— ↓357へ

362

取りあえず歩き回ってみる。それ以外になにも方法を思いつかない。

しかし、こんなことが起こるとは予想だにしていなかった。

……ずーん。……ずーん。

……地面が揺れるとともにすさまじい音が聞こえてきた。

「な、何でござるか、この音は……」ゴエモンが脅えたような声を上げた。

「あ、あれを見ろ！」オレは自分の目にした光景が信じられず、悲鳴に似た声を上げた。

「げっ！」「うぼっ！」ゴエモンとコングも驚きの声を上げた。

なんと、近づいてくる地響きはモアイの1体がこちらに向かって飛び跳ねてくる音だったのだ。いったいどうなってんだよー。ひえーい。



362▶　…ずーん。ずーん。近づいてくる地響きは、モアイがこっち向かって飛び跳ねてくる音だったのだ。

▼闘う―――――――――↓334へ▼逃げる―――――――――↓359へ

363

「ビッグバイパー、発進！」オレは威勢よく声を上げると、充分に出力の上がったビッグバイパーを発進させて一気に上昇した。

「あがぐえげぐ……」大気圏脱出の壮絶なGが身体にのしかかってくる。

何時間にも思えるGがやっと終わると、ビッグバイパーは宇宙空間を飛行していた。船外モニターには大気に邪魔されない本当の満天の星空が映っている。

オレはまわりを見回して、飽きれてしまった。コングもゴエモンも今のGショックで意識を失っていたのだ。まったくだらしないなあ。こんなところを敵に襲われたらどうするんだ。

↓352へ

364

かなり長い間洞窟の中をさ迷った気がした。行けども行けども終わりのない洞窟にいい加減嫌気がさしてきた時、通路の先に扉を発見した。

「キャアッ！」

扉に駆け付けたオレたちは、確かに女の子――コナミレディ――の悲鳴を聞いた。この

扉の向こうからだ。どうやって開けたらいいんだ。
▼全員で体当たりする ―――――↓369へ▼モアイの頭突きで破る ――――↓341へ
▼殴って鍵を壊して開ける ――――――――――――――――――↓375へ

365

「コナミマンさん、攻撃はあたしに任せて！」
今起こした攻撃システムが、いつの間にかコンピュータ制御に変わっていた。アフロディテちゃんが攻撃をやってくれるらしい。……しかし、何か恐ろしい予感がする。
モアイのイオンリングが走った。敵機の1機がも屑と変わり、戦いの火蓋は切って落とされた。
オレはアフロディテちゃんの指示通り、敵の攻撃をよけるのに神経を集中させた。アフロディテちゃんは、なんだか嬉しそうにレーザーとミサイルを乱射していた。1機をやっつけるのにレーザーだったら5発、ミサイルだったら10発くらい使って、まさにしらみ潰しといった感じだ。
敵機は瞬く間に全滅した。
「あーすっきりした」何者なんだろーなー、このコンピュータは。あー恐ろしい。
↓354へ

366

オレはレーザーガンを撃った！　２本の光条はまっすぐに伸びると、モアイに命中した。
（弾丸２個マイナス）

↓340へ

367

コングがその１匹に殴りかかった。表面がぐちゃりと破れ、体液のようなものが吹き出した。嫌な匂いのするその液体をかぶったコングは、その液体をかぶった箇所に痛みを感じた。酸性の体液だったのだ。**（コングの体力ポイント、マイナス５）**
しかし、そいつはそれ以上の脅威とはならなかった。さっきのコングの攻撃が致命傷だったようで、地に落ちると溶け崩れて消えてしまった。

↓368へ

368

しかし、１匹を倒している間にもう一方の怪物がマイキーをさらってしまっていた。
さらに、その怪物を追ったのかシモンの姿も消えている。オレたちはまたもや、いつもの組み合わせに戻っていた。あーあ。
全く、こんなにばらばらになっちゃうとは……いったいどうしたらいいんだあ！

↓339へ

369

「それじゃあ行くぞー。いっせーの、せっ！」
オレの駆け声と共にいっせいに体当たりした。扉ははじけ飛んだ。

↓376へ

370

モアイはオレたちの眼前まで飛び跳ねてくると、ぴたりと止まった。——そして、そのモアイは驚いたことに可愛い女の子の声でこう言ってきたのだ。
「あたし、あなたたちの敵じゃないわ。話を聞いて欲しいの」
「はあ」「へえ」「うほ」オレたちは余りに意外な展開のためボーゼンと答えることしかできなかった。モアイの女の子は話を始めた。

↓338へ

371

さらに3発の攻撃が命中したとき、モアイは粉々に爆発した。さすがに5発続けての連続攻撃は効いたようだ。**（弾丸3個マイナス）**
オレたちは再びモアイ捜しを続けることにした。……しかし……今のモアイ本当に目的のモアイじゃなかったんだろうなあ。目的のモアイを自分で倒したら洒落(しゃれ)にもならないもんなあ。

↓342へ

３７２

オレはすかさずレーザーガンを3連射した。**（弾丸3個マイナス）**
狙いは外れることなく、３本のレーザーはブラックモアイの口に命中した。
ブラックモアイの口の中で小さな爆発が起こった。
「やった、これで敵の攻撃を封じたぞ！」オレが叫ぶのと同時に、モアイが攻撃をかけた。
モアイの口からイオンリングが2発放たれた。イオンリングはブラックモアイに命中し、貫通した。
——そして、一瞬の間。
次の瞬間ブラックモアイが爆発した。オレとゴエモンとコングは伏せて爆風をよける。
モアイだけは誇らし気に超然と立っていた。

↓３５３へ

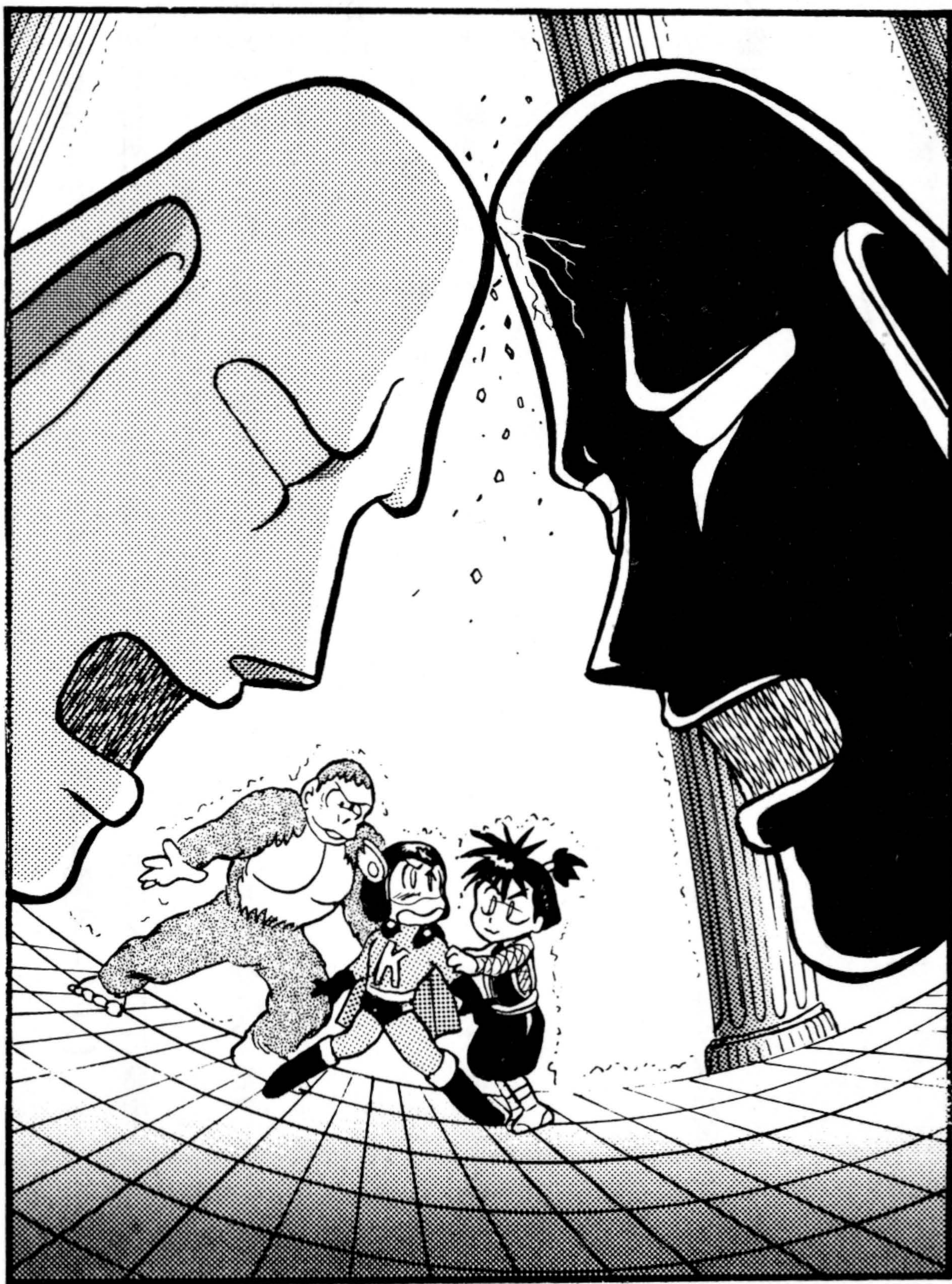
３７３

ゴエモンが小判を投げた！　手裏剣のように飛んだ小判は、モアイに命中した！**（弾丸2個マイナス）**

↓３４０へ

３７４

壮絶な闘いが始まった！



374▶　…ずこーん。…どごーん。…音と共に神殿全体が揺れている。モアイたちは頭づきをし合っているのだ。

……ずごーん。……どごーん。……音と共に神殿全体が揺れている。モアイたちは頭突きをしあっているのだ！

これがモアイ同士での闘いかたなのだ。

闘いは全く五分と五分に見えた。……しかし、だんだんとブラックモアイが押されてモアイは優勢になってくる。**（モアイの体力ポイント、マイナス10）**

ビシッ！　ブラックモアイの額にひびが入った！

どうやら恋人に励まされた分だけモアイのほうが優勢のようだ。

「これで終わりだ！」モアイは叫びとともに最後の頭突きを決めた！

「ぐおおっ！」ブラックモアイの叫び声がホール内にこだまする。……そして次の瞬間、ブラックモアイの頭は真ん中でふたつに割れて倒れた。

↓353へ

375

「えいっ！　このやろっ！」オレは一撃必殺のパンチを扉の錠に叩き込んだ。

……しかし、痛いだけだった。**（コナミマンの体力ポイント、マイナス5）**錠自体は全く開く気配がない。どうもこんな方法では開けることはできないみたいだ。

▼全員で体当たりする　――――　**↓369へ**
▼モアイの頭突きで破る　――――　**↓341へ**

376

扉の中に入ってみると、なんとそこにコナミレディとシモンとマイキーの3人がいた。3人はかばい合うようにして背中を向けあって立っている。闘っている相手は巨大なエイリアン、ワルダーだった。

▼レーザーガン、まねきねこ、バナナの束の3つが揃っている場合 ――――― ↓390へ

▼そのどれかがひとつでもない場合 ――――――――――――― ↓419へ

377

「コナミレディ、今の爆発はいったい……」

通信モニターがつき、コナミマンさんの顔が映った。こちらの雰囲気に気づいて台詞(セリフ)が尻すぼみになる。

わたしは堪えることができずに、シモンさんの肩に顔を埋めて声を上げて泣いた。

「月風魔さんが……。月風魔……さん……が……」彼にも事情は分かったらしい。しかし、何も言うことができない。

「なに！」コナミマンさんが突然声を上げた。「大変だ、コナミレディ、気持ちは分かるがワルダー戦艦がいたところをモニターで見てくれ！」

わたしはコナミマンさんの声に顔を上げた。

↓406へ

376〜380

378

「なんで！　月風魔さんがやったことは無駄だったの！　そんなのってあんまりだわ！」
わたしはワルダーがまだ生きていると知って、激しい怒りを覚えた。
「それは違う。月風魔がやったことは無駄なことじゃない」
シモンさんが私に言った。
「とにかく中に入ってみよう。ワルダーを倒すことが俺たちの使命だ」
シモンさんの言葉に、マイキー君が大きく頷いて機を進めた。後ろからコナミマンの機もついてくる。

↓408へ

379

あ、くそ。誰が攻撃をかけたらいいんだ。準備をちゃんとしてこなかったために、ここにきて慌てふためくは目になってしまった。ワルダーがこっちに向かってきた！

↓407へ

380

すぐ目の前に小惑星があった。見掛けによらない質量がなければ見過ごしてしまいそうな本当に小さな小惑星だ。他に近くには恒星はおろか惑星も何もない。ワルダーがいると

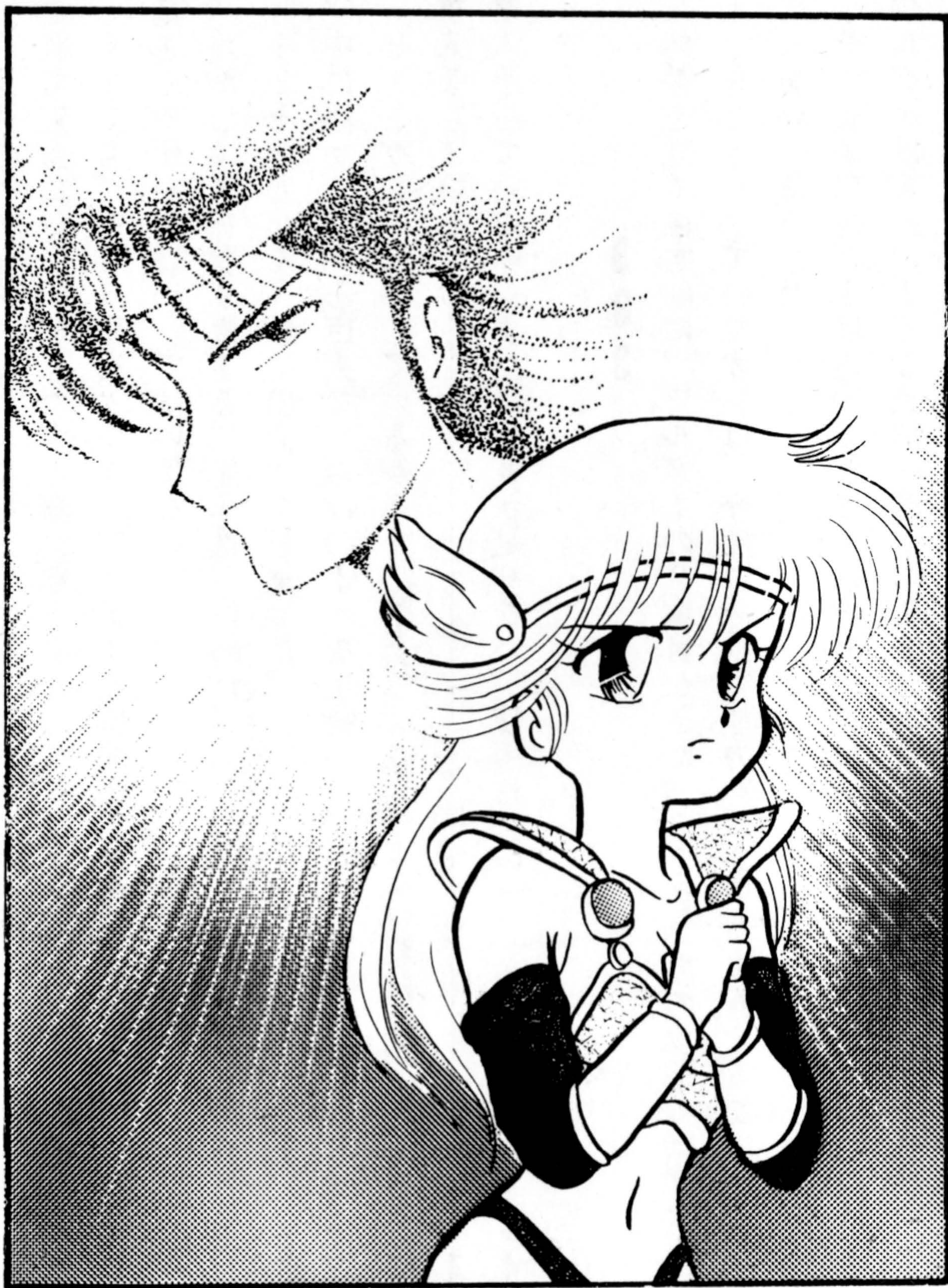
すれば、この小惑星に違いない。
ビッグバイパーとツインビーの2機とモアイは小惑星に着陸した。全員が機から降りて回りを調べてみると、小惑星内部へと続く洞窟を発見した。そのまま全員で入って行く。
▼コナミマンを選択している場合 ―――――― ↓360へ
▼コナミレディを選択している場合 ―――――― ↓389へ

381

わたしのヒートガンが火を吹いた。同時にシモンさんが十字架を投げる。熱線と白熱する十字架の同時攻撃は、ワルダーの身体を灼き尽くすかに見えた。
しかし、そうはならなかった。
ワルダーは身体のあちこちを溶け崩れさせて体液を垂れ流していたが、まだ生きていた。
（弾丸6個マイナス） ↓403へ

382

そこは、本当に不気味な世界だった。まるで体内に縮んで入ったように床も壁も天井も肉質で不気味な弾力を持ち、表面は粘液のようなもので濡れている。通路全体が細かく動いている。わたしは気味が悪くなって慌てて立ち上がった。



382▶　—でも、ひとりになってもワルダーを倒すまでは諦めないわ。月風魔さんの死を無駄にしてはいけなもの。

落ちてきた穴は完全に消えてしまっている。あったところで登れるわけもないけども、これで完全にシモンさんたちと離れ離れになってしまった。

——でも、ひとりになっても、ワルダーを倒すまでは諦めるわけにはいかないわ。月風魔さんの死を無駄にしてはいけないもの。

わたしは気を取り直すと、先へ進み始めた。

……そのとたん、敵に出会ってしまった。

空中に浮かんでいる巨大なくらげのような生物。

ヒートガンを入手しているか？（弾丸が、2個以上なければ使用することはできない）

▼入手している——————————————↓410へ

▼入手していない（または弾丸が足りない。使用しない）——————↓401へ

383

体勢を立て直す前に、ワルダーの2撃目がきた。……さっきの攻撃でほぼ致命的なダメージをこうむっていたオレは、今度こそ飛行能力をコントロールすることができなくなってしまい、落下した。

そのままワルダーは追ってきてオレの上にのしかかる。もうオレにはねのける力はない。ワルダーは笑みのような表情を浮かべると、まさに食べるためだけに機能された口を開い

た。舌の先にも切り裂くための牙が生えている。
舌がじわじわとオレの顔に近づいてくる。牙が嬉しそうにかちかちと音を立てた。

GAME OVER

384

全く不気味なところだった。もしかしたら小惑星全体がひとつの生命体なのかも知れない……それがワルダーなのかしら……。
わたしは気を取り直して先へと進み続けた。しばらく進んで行くと、何者かが争っている物音が聞こえてきた。さっきのくらげの化け物と誰かが闘っている。

↓395へ

385

オレには取っておきの超能力があるのだ。あまり長い間使えるわけではないが、オレは空を飛ぶ超能力を持っている。今こそ、その超能力を使う時だと判断したのだ。
オレは空中に浮き上がった。ほぼ同時にワルダーも浮き上がる。
こいつも浮遊能力を持っているのか？　オレは少し焦ったが、落ち着いてレーザーガンを放った。
弾丸が無くなるまで引き金を絞る。光条は全てワルダーに命中した。**（弾丸数0）**

ワルダーは急速に接近してくる。オレはつかず離れずの位置を保って飛び回り、チャンスを待った。一撃必殺のパンチをお見舞いする時を。

——来た。

そう思った瞬間、オレは自分からワルダーに向かって飛び、その勢いを利用してパンチを放った！

↓411へ





386

しかし、安心してもいられなかった。くらげの化物がわたしたちのまわりにいつの間にか集まってきていたの。その数は5匹。

目も口もなく、ただ巨大なくらげにしか見えない化け物がこんなに恐ろしく見えたときはこの時以外にないだろう。じわりじわりと集まってくる奴らは、身体の下についている触手をわたしたちに伸ばしてきた。動きその物は鈍いが、それだけに恐ろしさは増している。触手が眼前に迫り、わたしたちは完全に逃げ場を失った。

↓393へ

387

ワルダーは続けて攻撃を仕掛けてきたが、オレはそれをなんとかよけることができた。モアイがイオンリングを撃って援護してくれたのだ。

オレはなんとか体勢を立て直すと、さっきのような一撃を食らわないように一定の距離を取ってチャンスを待った。

ワルダーが逃げ回るオレにとうとう攻撃を仕掛けようとした時、僅かな隙が生まれた。オレは一気にワルダーに近づくと、ワルダーにパンチを決めていた。

↓411へ

３８８

しかし、再会を喜びあっている暇はなかった。突然声が響き渡った。空間の裂け目を通る前に聞いた、あのワルダーの声だ。
「よくここまでたどりつくことができたな。だが、きさまたちの運はここでつきた。ここがお前たちの墓場となるのだ」
肉の引き裂かれる音がして、眼前の肉壁が口を開いた。血のような真っ赤な液体が流れだし、その中から血を滴らせた巨大なものが出てきた。
あくまで生態なのだがメタリックな輝きを放つ巨大な頭と、骨格そのままに近い、堅く鋭い手が出現した。その手は、とがった指先で肉壁の裂け目を開く。床が痛みに震えるようにぴくりと大きく揺れた。
「私が最後の相手だ……」どこまでも不気味なその異星生物は、食うことを究極に機能化させた口を開き、言った。
わたしたち3人の武器、ヒートガン、十字架、パチンコは揃っているか？　ただし、揃っていても弾丸が8個なければ使用することはできない。

▼揃っている――――――――――――――――――――――――――――↓４１７へ
▼揃っていない（または使えない）――――――――――――――――――――↓４０５へ

389

「キャアッ！」突然わたしの足の下の地面が消失した。
——落し穴だ！　そう考えた時には、わたしはまっさかさまに落ちていた。
穴はすぐふさがってしまったようで、上のほうからシモンさんの声が聞こえて来たが、すぐに小さくなって聞こえなくなってしまった。
「きゃん！」わたしはしばらく落下してからお尻で着地した。なんだか不気味な感触が感じられる。わたしは慌てて辺りを見回した。

↓382へ

390

「コナミマンさ～ん！」コナミレディの、驚きと喜びの混ざった声が聞こえてきた。
オレは腰のレーザーガンを抜き、エイリアンに向けて撃った。それを皮切りに、ゴエモンが小判を投げ、コングがバナナを投げた。もちろんモアイもイオンリング攻撃をかけている。

↓404へ

391

マイキー君はそいつの触手から逃れると、すかさずパチンコを連射した。傷口からまたあの体液が吹き出した。

マイキー君は地面を転がって体液を逃れた。くらげの化け物は力尽きたように地面に落下すると地面に吸い込まれるようにして消えてゆく。
わたしはほっと吐息をついた。
「お姉ちゃん！」次の瞬間、マイキー君が飛び付いてきた。マイキー君もよほど嬉しかったのだろう。**（弾丸4個マイナス）**

↓386へ

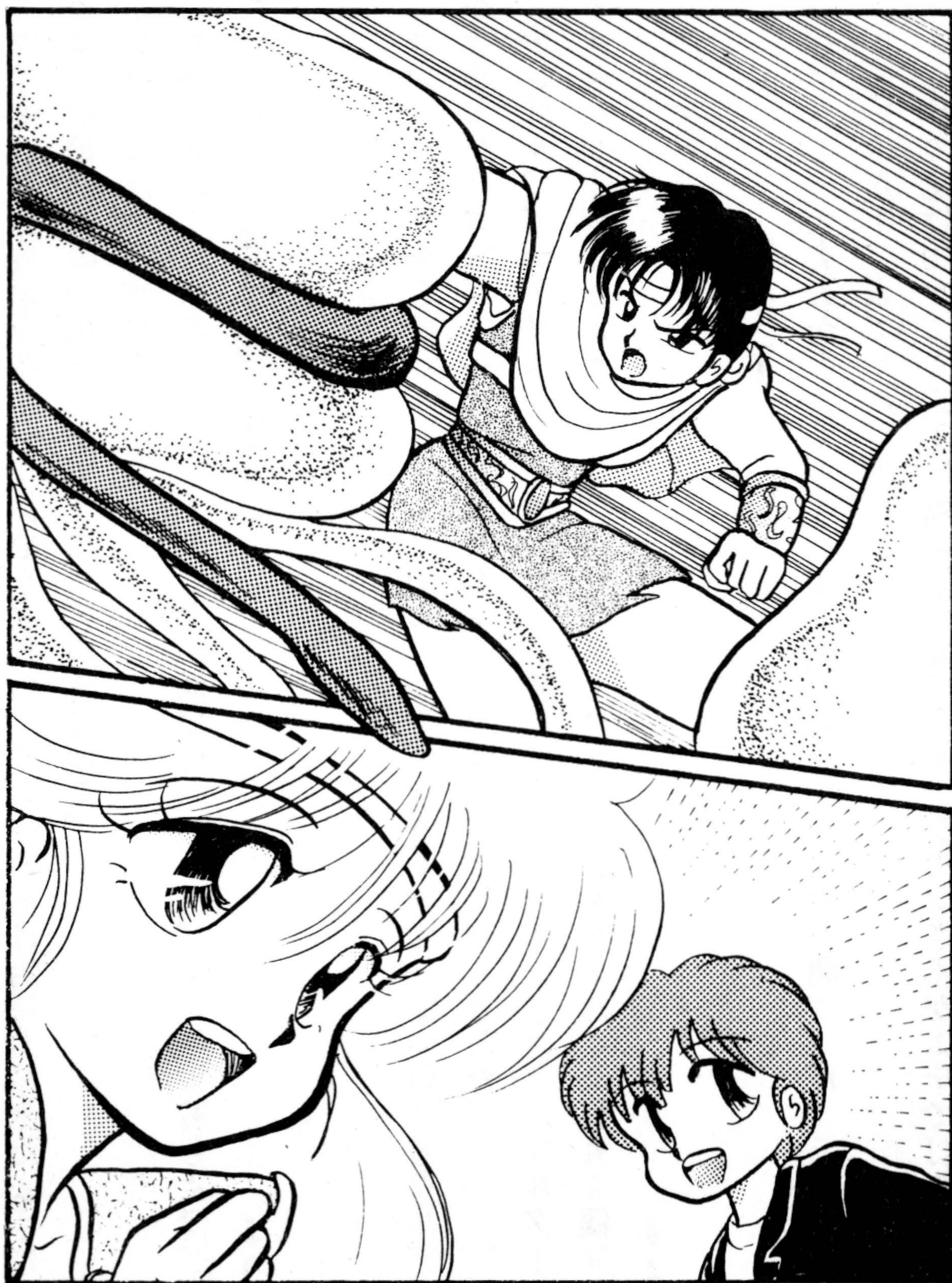
392

コングがバナナを投げた。……しかし、バナナは全くと言っていいほどワルダーには効かなかった。コングはあごが外れたように口を開いてぼーぜんとした。
オレは慌ててレーザーガンを撃った。同時にモアイのイオンリングがワルダーを襲う。さすがにレーザーとイオンリングはワルダーにダメージを与えた！**（弾丸6個マイナス）**

↓407へ

393

「レディ！　大丈夫か！」くらげの化け物の向こうから声が聞こえた。
「シモンさん！　来てくれたのね！」
くらげの化け物が、1匹1匹地面に落ちてゆく。シモンさんがムチで打ち落としている



393▶　「レディ！大丈夫か！」「シモンさん！来てくれたのね！」くらげの化け物が、１匹１匹地面に落ちてゆく。

のだ。離れて攻撃できるムチは、この敵に対して絶大なる効力をもっていた。化け物はたちまち全滅し、わたしたちは再び手を取りあうことができた。

➡388へ

394

オレには取っておきの超能力があるのだ。オレは空を飛ぶことができる。今こそ、その超能力を使う時だと判断した。

オレは空中に浮き上がった。ほぼ同時にワルダーも浮き上がる。こいつも浮遊能力を持っているのか？　オレは少し焦ったが、ひるまずにワルダーに向かって飛んだ。

――そして、一撃必殺のパンチ！

と思ったのだが、カウンターを食らってしまった。ワルダーの骨格そのままのようなごつごつした拳が頬にめりこむのを感じ、オレは一瞬落ちそうになってしまった。**（コナミマンの体力ポイント、マイナス15）**

コナミマンの体力ポイントは8ポイント以上残っているか？

▼ある――――➡387へ▼なし――――➡383へ

395

「マイキー君！」わたしは思わず声を上げた。この不気味な世界で仲間に再び巡り合えた

ことに対する喜びと、苦戦しているマイキー君を心配してだ。
「マイキー君、そいつの体液は酸性よ、気をつけて！」わたしは叫んで、走り出した。
マイキー君の武器としてパチンコを入手しているか？　ただし、弾丸が４個以上なければ使用することはできない。

▼入手している ――――――――――――――――――↓３９１へ
▼入手していない（または弾丸が足りない。使用しない）――――――↓４１４へ

３９６

わたしたちの攻撃はそれぞれワルダーにダメージを与えていたが、どれも致命傷には程遠いものだった。わたしはヒートガンを乱射した。弾丸がゼロになるまで引き金を引き続け、何本もの熱線がワルダーの身体のあちこちを貫いた。
それでも、ワルダーは息絶えなかった。
「こいつは不死身なの？　いったいどうやったら倒すことができるのよ！」
わたしは思わず声を上げた。傷ついて少々動きが鈍くなったワルダーは、無言でわたしたちに近づいてくる。

↓４１８へ

３９７

船の残骸がめきめきと音を立ててなにか違うものへと変貌してゆく。
それはまず2本の腕を生やした。そして、次に2本の足。とうとう、そいつは艦橋を頭に変化させた。……海賊船は、船に四肢を生やした格好の不気味な怪物に変態したのだ。
そいつは巨大な腕をこちらに伸ばしてきた。
どうしよう！

▼闘う ──────────── ↓157へ
▼逃げる（または、弾丸が5個以上ない場合）──────── ↓174へ

３９８

わたしのヒートガンが火を吹いた。同時にマイキー君のパチンコから弾丸が飛ぶ。熱線がワルダーの身体を灼き、マイキー君のパチンコがワルダーの口に命中した。
しかし、ワルダーにこたえた様子は見えなかった。確かにダメージは与えているはずだが、どれも致命傷には程遠いのだ。**（弾丸6個マイナス）**

↓403へ

３９９

すれ違いざまに、ビッグバイパーに衝撃が襲った。3方向からレーザー攻撃を受け、わ

たしのとっさの操縦によって2発はかわしたものの1発を翼に受けてしまった！　機は大きく揺れ、わたしたちはダメージを受けた。**（コナミレディ、シモン、マイキー、月風魔の体力ポイント、それぞれ5マイナス）**

しかし、すれ違いざまにこちらからも攻撃していた。月風魔さんの発射したミサイルが4発。2機の敵機を追撃し、も屑と変えた。

残った1機は、再び攻撃してくる間もなく爆破された。後方を飛んでいたツインビーが撃墜したのだ。

↓290へ

400

ゴエモンが小判を投げた。コングがバナナを投げる。モアイのイオンリングがワルダーを襲う。

ワルダーは突然現れた新たな敵に対処する前に多大のダメージを受けていた。

ワルダーは空中浮遊した。空中からコナミマンさんに襲いかかろうとしているのだ！

「コナミマンさん、よけて！」わたしは叫んだが、叫ぶまでもなかった。コナミマンさんも空中に浮かんだのだ。そして腰からレーザーガンを抜き安全な距離を取って飛び回りながら正確な射撃を続けた。

数十発のレーザーの直撃を受け、反撃もままならないワルダーは、とうとう力尽き、地

に落ちた。

↓420へ

401

わたしはそいつに蹴りを放った。

見掛け通り、そいつの表皮はすぐに破けた。

破けた口から嫌な匂いの体液が吹き出した。わたしは慌ててよけたが、左手に少しかかってしまった。

地面や壁のものよりもっと粘っこい感触で左手が包まれた。わたしは気持ち悪くて振り払おうとしたが、その手に急に痛みを感じた。

左手は焼けどしたように赤くなって、表皮の組織が軽く焼けただれていた。くらげの化け物の体液は酸性の性質を持っていたのだ。さっき、とっさによけて少ししか、かからなかったからまだよかったものの、全身に浴びていたら……。

↓413へ

402

ゴエモンの小判がワルダーに走った。

ちゃりん、ちゃりん。「あれ?」ゴエモンぼーぜんとしてしまう。小判攻撃が全く効かないのだ。

オレは慌ててレーザーガンを撃った。光条が奴を貫く。**(弾丸6個マイナス)**

↓407へ

403

突然ワルダーの身体が浮き上がり、すさまじい速度で私に襲ってきた。鋭い爪でわたしの腕を捕らえる。爪の先が皮膚を破ってめりこんでゆき、すさまじい痛みが走った。**(コナミレディの体力ポイント、マイナス15)**

「レディーッ！」シモンさんの声が聞こえ、わたしに嚙みついてこようとするワルダーの身体にムチが巻きついた。次の瞬間、ワルダーの身体が引きはがされるように離れた。

コナミレディの体力は8ポイント以上あるか。

▼ある――――――――↓418へ ▼ない――――――――↓415へ

404

すでにコナミレディたちと闘って相当ダメージを受けていたらしいワルダーは、この一斉攻撃で致命傷を受けたかに見えた。

身体のあちこちが焼けただれ、全身から膿のような体液を垂れ流している。あと一息でとどめさせる！

オレはここであれを使うことを決意した。 ↓３８５へ

４０５

武器を2種類持っているならば、誰と誰の武器を持っているか？ ただし、持っていても弾丸が6個以上なければ使うことはできない。2種類以上持っていないに進む。

▼ヒートガンと十字架を入手している場合 ↓３８１へ
▼ヒートガンとパチンコを入手している場合 ↓３９８へ
▼十字架とパチンコを入手している場合 ↓４１６へ
▼2種類以上持っていない場合 ↓４０９へ

４０６

ワルダー戦艦がさっきまでいた空間に、何か裂け目のようなものができていた。肉眼ではなかなかとらえにくいが、その裂け目の部分だけ真っ黒に抜け落ちて、向こうに星が見えないのでそれと分かる。

「ふっふっふっ……戦艦を破壊したくらいで私を倒したと思っているのではあるまいな。私は不死身だ。倒したくばその次元の裂け目を通って来るがいい。来たところで返り打ちにあうのは目に見えておるがな。はっはっはっは……」

突然、どこからともなく声が聞こえてきた。……ワルダーの声らしい。さっきの戦艦にワルダーは乗っていなかったのだ。本体はこの裂け目の向こうにいるのか。

▼コナミマンを選択している場合 ——— ↓358へ

▼コナミレディを選択している場合 ——— ↓378へ

407

ワルダーはどんどんこちらへ向かって歩いてくる。オレは決心した。ここであれを使うしかない!

レーザーガンを入手しているか? ただし弾丸が4個以上なければ使用することができない。

▼入手している ——— ↓385へ

▼入手していない(または弾丸が足りない) ——— ↓394へ

408

裂け目に入ってゆくと、さっきまでの通常宇宙とは全く違う別の宇宙に出た。星の輝きがまばらにしか見えないのだ。ぽつりぽつりとしか恒星の光が見えない。

ここは少なくても、銀河系の中ではない。さっきまでのと同じ宇宙ならばよっぽど、どこの星雲からも離れた辺境の空域なのだろう。まばらに見える光そのものが星雲なのだ。

409

攻撃に手をこまねいているうちに、ワルダーが接近していた。

↓380へ

↓403へ

410

わたしは、まだこっちに気づいていなかったそいつにヒートガンを放った。2本の熱線がそいつの身体を貫くと、そいつは蠢(うごめ)く地面に落下して嫌な匂いの体液を流した。地面が溶けている。どうやらそいつの体液は酸性の性質を持っているようだ。この体液をあびるのはなんとか避けたほうがいいだろう。**(弾丸2個マイナス)**

↓384へ

411

ワルダーはオレの一撃を受けて落下した。

すかさずコナミレディを始めに、シモン、マイキー、ゴエモン、コング、モアイがワルダーに駆け寄り、それぞれの拳や蹴りを叩き込んだ。

さすがにそれだけの攻撃を受けて、ワルダーがまだ生きていられるはずもなかった。

↓420へ

412

コングがバナナを投げ、ゴエモンが小判を投げた。
……しかし、小判もバナナも全くと言っていいほどダメージを与えることができない。
ふたりともあごが外れたように口を開いてぼーぜんとした。
モアイが慌てて援護にイオンリングを放つ。——さすがにイオンリングの攻撃はワルダーにダメージを与えることができたようだ。**（弾丸6個マイナス）**

↓407へ

413

化け物はさっきの一撃で息絶えて地面に落下していた。地面を溶かしながら吸収されるように消えてゆく。**（コナミレディの体力ポイント、マイナス5）**

↓384へ

414

わたしはやっとの思いでたどりつくと、触手から逃れたマイキー君を後ろにかばって蹴りを放った。くらげの化け物の表皮はさっきと同じようにはじけるようにして割れると、そこから臭い体液を吹き出した。
わたしはなんとかよけようとしたが、マイキー君をかばっていたのでよけきることができずに、背中に少量受けてしまった。——とたんに背中が焼けるように熱く感じ、わたし

は悲鳴を押さえることができなかった。**（コナミレディの体力ポイント、マイナス5）**
「お姉ちゃん！」
「大丈夫。……それよりマイキー君は？」わたしは痛みを我慢して反対に聞いた。
「大丈夫だよ。……でも、会えて良かった。どうなるかと思ってたんだ」マイキー君は嬉しさのため、わたしの首にかじりついてきた。よほど嬉しかったみたい。

↓386へ

415

わたしは今の攻撃で立ち上がることができないくらいダメージを受けていた。
今ワルダーは私からムチでひきはがしたシモンさんと死闘を繰り広げている。
しかし、さっきムチを使ったのは失敗だった。ワルダーはムチで離れることはできないのを利用して、シモンさんの身体を切り刻んだ。
シモンさんも動けなくなるまでダメージを受けた後、ワルダーはその口を使った。舌を伸ばし、その先についた切り裂くことのできる牙でシモンさんの顔を食い始めた。
シモンさんの苦痛の叫びがこだました。

GAME OVER

416

シモンさんの十字架とマイキー君のパチンコが同時に放たれた。それらはワルダーに命中したが、大してダメージを与えられなかった。**（弾丸6個マイナス）**

↓403へ

417

わたしのヒートガンが火を吹いた。それを皮切りに、シモンさんの十字架とマイキー君のパチンコも放たれる。熱線の1本は異星生物には当たらず、肉壁を灼いた。しかも、もう1本が上半身を現した奴の肩に命中し、肩の一部が灼け白煙を上げる。

十字架は放たれた2本とも異星生物に命中した。どちらも閃光を発してワルダーにダメージを与える。ワルダーから苦痛の声が上がった。

そしてマイキー君のパチンコは1発外れてしまったが、もう1発がワルダーの口に命中した。**（弾丸8個マイナス）**

↓396へ

418

その時、どーんと大きな音がした。ワルダーを含めて全員の視線がそちらを向く。

「コナミマンさん！」わたしは喜びの声を上げた。

その方向には石の壁があったのだが、それを破ってコナミマン、ゴエモン、コング、モ

アイが姿を現したのだ。
「大丈夫か、コナミレディ、助けに来たぞ！」 ⬇400へ

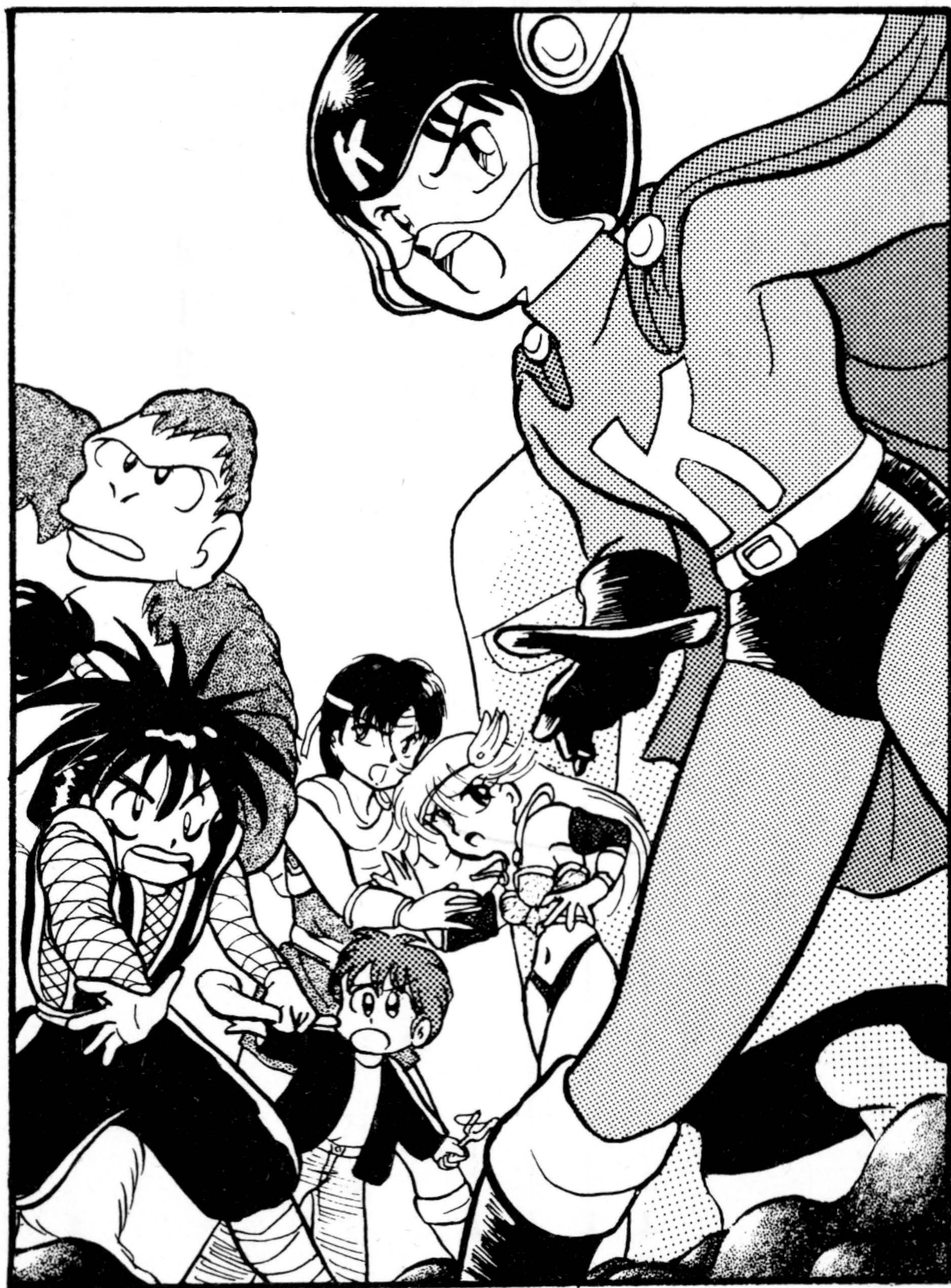
419

「コナミマンさん！」コナミレディの喜びの声が聞こえてきた。そりゃあ、ピンチに陥っていた時に入ってきたんだ。当然かも知れない。
武器を2種類入手しているなら、どれとどれを持っているか。ただし、弾丸が6個以上なければ使用することはできないので、2種類持っていないへ進む。

▼レーザーガンとまねきねこを入手している場合 ⬇402へ
▼レーザーガンとバナナの束を入手している場合 ⬇392へ
▼まねきねことバナナの束を入手している場合 ⬇412へ
▼2種類持っていない場合 ⬇379へ

420

「やったわ！」歓声が響き渡った。
とうとうワルダーを倒したのだ。ワルダーの死体はさっきのくらげの化け物みたいに溶けるように萎んでゆき、肉質の地面に吸収された。



420▶　「なんだこれは！」「分からないけど、このままここにいては危いわ！　早く脱出しましょう！」

「やったわね！」コナミレディは全員の手を取って喜びあった。
ゴゴゴゴゴゴゴ……突然小惑星全体が揺れ動きだした。
「なんだこれは！」
「分からないけど、このままここにいては危いわ！　早く脱出しましょ！」
コナミレディの声を皮切りに、全員扉から抜けて走りだし、ビッグバイパーとツインビーのところまで戻った。すぐに乗り込み、機が発進した時には、揺れは立っていられないほどになっていた。
ビッグバイパーとツインビーは急速に小惑星の軌道を離れた。
瞬間、背後に太陽が発生した。
そう思うほどすさまじい光だった。――小惑星が爆発したのだ。ビッグバイパーとツインビーは、爆発のあおりを受けたが、なんとか間一髪で爆風に巻き込まれずにすんだ。
これでワルダーは完全に宇宙から消え去った。
ビッグバイパーとツインビーは、地球に、シナモン教授の研究所に戻るために空間の裂け目をくぐった……。

HAPPY END

▼コナミマンを選択している場合――――↓エピローグⅠへ
▼コナミレディを選択している場合――――↓エピローグⅡへ

エピローグI

「いやー、コナミマン君、よくやってくれた。これで地球は救われたぞ。さすがコナミマン君じゃ」

「いやー、それほどでもないですよ」

オレはなんだかくすぐったいような気がして頭をかいた。

「コナミレディももちろんよくやってくれた。それから、次元を越えて手伝ってくれた君たちにもお礼を言わねばならんな。ゴエモン君、コング君、モアイ君、それからシモン君にマイキー君。……月風魔くんのことは悲しい出来事じゃったが、彼のお陰でワルダーを倒すことができたんじゃ……なあ、コナミマン君」

「あ？」

「いやあ、オレなんか全然……活躍しただなんて……」

「いやですよお、教授。そんなにおだてられたらオレ、恥ずかしいじゃないですか……」

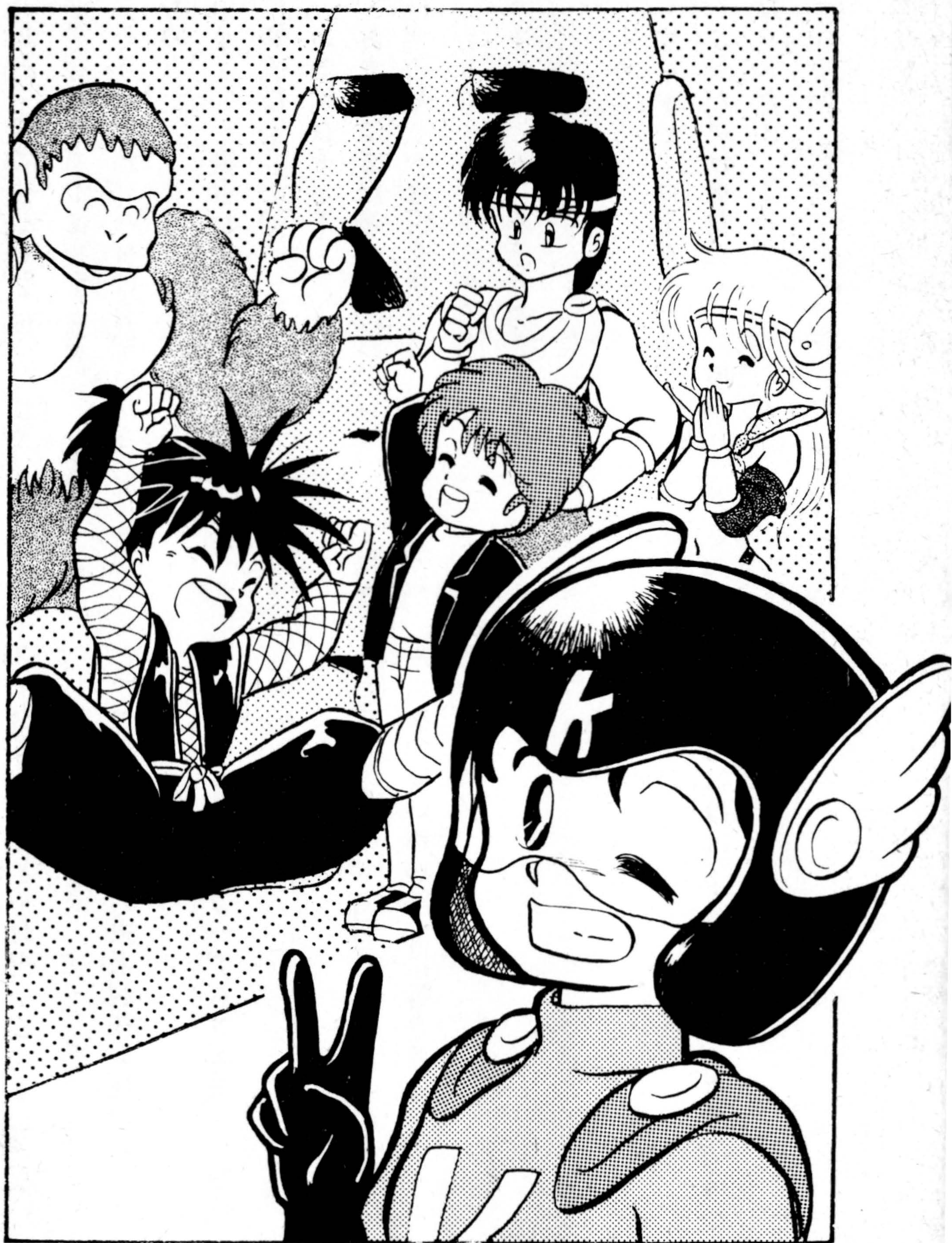
「……何を言っとるのじゃ、コナミマン。わしはおだててなんかおらんぞ」

「……あれ？」

しまった。大ボケをかましてしまった。

「あははっはは……、で、なんの話をしてたの？」

エピローグⅠ



「ああ、気にせんでもいいんじゃ。今日はワルダーを倒したことをお祝いしようじゃないか。なあ、コナミレディ君」
「そうですね。今日はお祝いしましょう。なんといっても、地球の未来が守られたんですもの！」
「よーし、宴会だ宴会だ！」突然ゴエモンが叫ぶ。「うほうほ！」コングもゴエモンの意見に賛成なようだ。
「お酒飲むぞー！」
「おまえはまだ未成年だろ。ジュースで我慢しろ」
マイキーの台詞を聞いて、シモンが叱った。みんなの笑い声が部屋に響き渡る。
――やっぱりワルダーを倒してよかったなあ。
オレはしみじみそう考えるのだった。

しかし……。
「オレがヒーローなんだー！」
これだけは最後にもう一度言っておきたかった。わはははは……どーせあんまり活躍しなかったよ。くそ。

エピローグII

わたしは明るい笑い声に満ちた部屋からこっそりと抜け出した。
いま、このシナモン教授の研究所では地球をワルダーの魔の手から救うことができた祝賀会が開かれている。
わたしは月風魔さんのことを思い出してしまって、心から楽しむことができず外に出てきてしまったのだ。
「……レディ……」
「——！」わたしはだし抜けに背後から声をかけられて、はっとして振り向いた。誰にも気づかれないようにこっそりと出てきたつもりだったので本当に驚いたの。
「おっと。今回はナイフを突きつけちゃいないぜ」
「シモンさん！ ……驚いたわ。誰かと思ったじゃないの」
「こっちこそ驚いたさ。紅一点がパーティから消えちまったんだからな」
「……ごめんなさい……」
「俺に謝るのはいいけどさ、連中その内騒ぎ出すぜ。……まあ理由は見当つくけどな」
わたしは、10センチほど高い位置にあるシモンさんの目を見つめた。
「月風魔のことを考えてたんだろ……」シモンさんの視線が落ち、声が低くなった。



「……考えたってどうなるってわけでもないんだぜ……」

わたしは、なんだかシモンさんを安心させてあげたい衝動に襲われた。

「なに言ってるのよシモンさん。わたしは自分の守った星空を眺めてみたかっただけ。……アンドロイドのわたしには嫌なことを忘れてしまえる力があるのよ」

わたしは笑顔を造って向けた。無理に造った笑顔だったが、苦痛はなかった。彼に笑顔を向けるのは本当に嬉しいことだった。

「君が人間と変わらないことは俺がいちばんよく知ってるよ。……本当に空が見たかったんだね？ ……それなら早く部屋に戻ろう。まだ外は寒いよ」

「……ありがとう……大丈夫。戻ろ」わたしはこみあげてくるものをこらえて頷いた。

シモンさんが背を向けて、わたしはちょっと駆けて彼の腕に私の腕を絡ませた。彼の驚きが伝わってくる。

「さっきの言葉……本当に嬉しかったわ……」

研究所の入り口に人影が現れた。コナミマンさんかしら。

「おーい、ふたりでなにやってんだよー。シモン、女の子ひとり占めはずるいぞー！」

わたしとシモンさんは笑みを交わすと、ちょっとだけ早く、走った。

空には、春の星空。

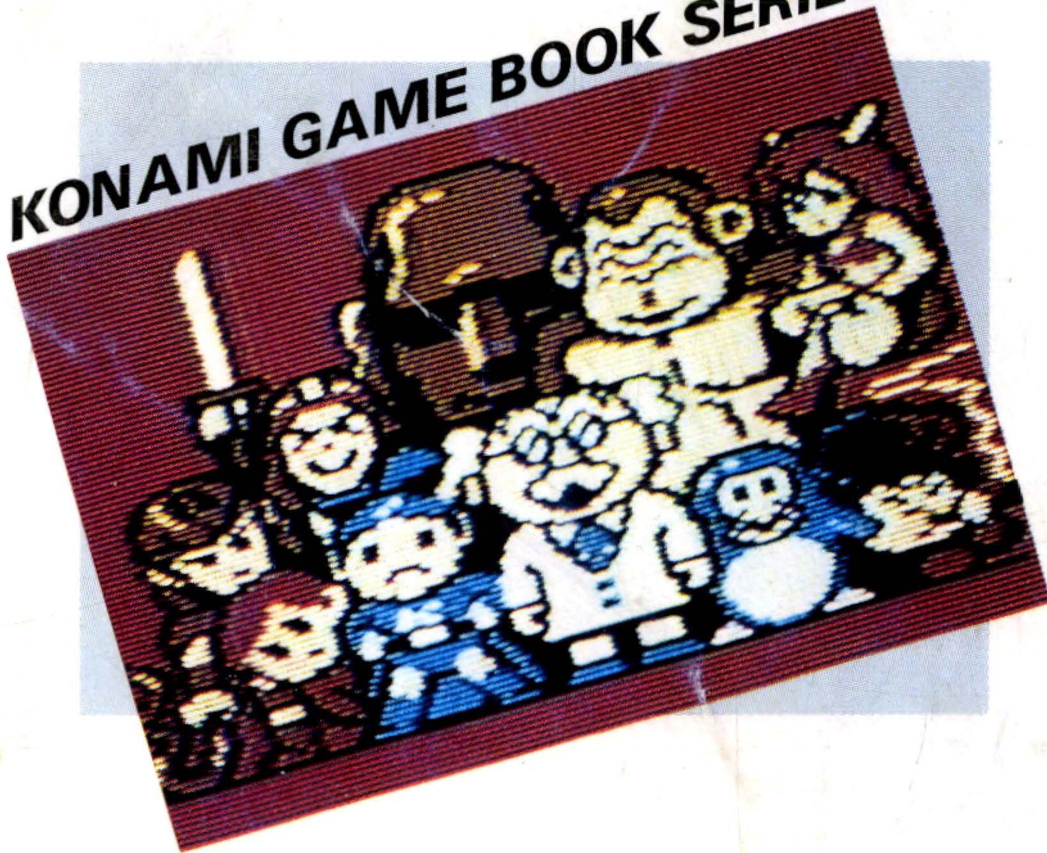
企画・構成／STUDIO HARD 田中　彰
文／塩田信之
作画／こなみみなこ

コナミ
ワイワイワールド

コナミスペシャル
KONAMI GAME BOOK SERIES 3
昭和63年3月31日 第1刷発行　　定価420円

著　者　塩田信之
制　作　STUDIO HARD
発行者　高井俊次
発行所　コナミ出版
〒101 東京都千代田区神田神保町3-25
TEL 03－221－7231
印　刷
製　本　(株) 耕文社


KONAMI



ISBN4-87655-014-X C0176 ¥420E 定価420円